

茨城県教育財団文化財調査報告第376集

# 木 原 城 址

主要地方道美浦栄線交差点改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 25 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第376集

木<sup>き</sup>原<sup>はら</sup>城<sup>じょう</sup>址<sup>し</sup>

主要地方道美浦栄線交差点改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 25 年 3 月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

茨城県では、主要地方道美浦栄線改良事業を推進しているところ  
です。

その一環として、茨城県竜ヶ崎工事事務所は、稲敷郡美浦村大字  
木原地区において、主要地方道美浦栄線交差点改良事業を計画しま  
した。当該地における事業計画の実施にあたっては、美浦村立木原  
小学校が隣接していることから、児童の登下校においての安全確保  
を最優先としました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文  
化財包蔵地である木原城址が所在し、記録保存の措置を講ずる必要  
があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から埋蔵文化財発掘  
調査の委託を受け、平成23年6月から8月までの3か月間にわたり  
これを実施しました。

本書は、木原城址の調査成果を収録したもので、学術的な研究資  
料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化  
の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託  
者である茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたこ  
とに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、美  
浦村教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力  
に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

# 例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、財団法人(現 公益財団法人)茨城県教育財団が平成 23 年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡美浦村大字木原 1568 番地 6 ほかに所在する木原城址<sup>きはらじょうし</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 23 年 6 月 1 日～8 月 31 日  
整理 平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 1 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長檜村宣行のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 稲田義弘  
首席調査員 寺内久永  
調査員 近江屋成陽
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、調査員田村雅樹が担当した。



# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅺ系座標に準拠し、 $X = + 2,400 \text{ m}$ 、 $Y = + 41,400 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3, … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット SA - 土塁跡・切岸跡 SD - 堀跡・溝跡 SF - 道路跡

SH - 竪穴遺構 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 500 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉  粘土範囲・黒色処理  煤・油煙

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴建物跡・竪穴遺構の「主軸」は、最長の軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SI 2 → SH 2 SI 3 → SH 3

欠番 SF 3・SI 2～4

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
木原城址の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と遺物	15
1 縄文時代の遺構と遺物	15
土坑	15
2 古墳時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴建物跡	16
(2) 竪穴遺構	19
3 戦国時代の遺構と遺物	21
(1) 第1号曲輪跡	21
土塁跡 溝跡 道路跡 竪穴遺構 土坑	
(2) 第2号曲輪跡	32
土塁跡 堀跡	
(3) 第3号曲輪跡	39
切岸跡 堀跡	
4 江戸時代の遺構と遺物	44
道路跡	44
5 その他の遺構と遺物	46
(1) 竪穴建物跡	46
(2) 竪穴遺構	47
(3) 土坑	48
(4) ピット	50
(5) 遺構外出土遺物	50

第4節	まとめ	56
写真図版		PL 1 ~ PL10
抄録		

# 木原城址の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

木原城址は、<sup>いなしきぐん み ほむら</sup>稲敷郡美浦村の北西部に位置しています。霞ヶ浦南岸の標高 20 m ほどの舌状台地上に築かれた城郭です。戦国時代には江戸崎に拠点を置いた<sup>とき</sup>土岐氏に属した<sup>こんどう</sup>近藤氏の居城とされています。

<sup>しゅうよう ちほうどう み ほさかえせんこう さてんかいりょう じぎょう</sup>主要地方道美浦栄線交差点改良事業にともない、遺跡の記録保存を目的として、茨城県教育財団が平成 23 年度に発掘調査を行いました。調査面積は 580m<sup>2</sup>です。



## 調査の内容

調査区域は、三の丸跡と大手郭跡に挟まれた台地から低地に向かう緩やかな谷に位置しています。発掘調査の結果、戦国時代の<sup>くるわ</sup>曲輪跡、<sup>きりぎし</sup>土塁・切岸跡、堀跡、<sup>はじしつ</sup>竪穴遺構、溝跡、道路跡、土坑などを確認しました。主な遺物は、<sup>はじしつ</sup>土師質土器、<sup>がしつ</sup>瓦質土器、陶器、磁器、石器、銭貨などです。ほかに、縄文、弥生、古墳、奈良・平安時代や江戸時代の<sup>いこう いぶつ</sup>遺構や遺物も確認しました。



調査区全景（西上空から）





木原城址全景 (北西上空から)



完掘した土塁の状況



完掘した障子堀の状況



出土した様々な器

## 調査の結果

確認した3区画の曲輪は、三の丸と大手郭に挟まれた緩やかな谷を仕切るように築かれ、土塁・切岸や堀によって防御性が高められていました。特に外堀跡と内堀跡の調査成果からは、今回の調査区域の城郭構造を知る上で、大きな手がかりとなりました。

城外と城内を区画する外堀は、対岸や堀底が確認できなかったことから、大規模な堀と推測できます。江戸時代の絵図からは、麓の町場や霞ヶ浦へ通じている水路と結び付いていた様子がみられ、城内への物資輸送に利用されていた可能性があります。一方、内堀は、堀底に大小様々な窪みを不規則に掘り込んだ特徴がみられます。この構造は攻め手が堀を渡ろうとする際、進入速度を低減させる工夫とされ、防御性が高い障子堀しょうじぼりの系譜を引く堀と考えられます。

木原城における当域は、土塁跡の調査によって16世紀中葉の構築、17世紀前葉までの廃絶が考えられます。築城にあたっては、当城の弱点にあたる緩斜面の防御の強化に加えて、水運を取り込む工夫がなされたと考えられます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎土木事務所（現 竜ヶ崎工事事務所）は、美浦村において主要地方道美浦栄線の交差点改良事業をおこなっている。

平成21年3月27日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道美浦栄線交差点改良事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年10月16日に現地踏査を、平成23年1月18日には試掘調査を実施し、木原城址の所在を確認した。平成23年2月18日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内において木原城址が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成23年4月22日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘を通知した。平成23年4月25日、茨城県教育委員会教育長は遺跡の現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県竜ヶ崎工事事務所長に対し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年4月26日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、主要地方道美浦栄線交差点改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年4月27日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに木原城址における発掘調査の範囲及び面積について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人（現 公益財団法人）茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、委託者から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年6月1日から8月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

木原城址の調査は、平成23年6月1日から8月31日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	6月	7月	8月
調査準備 遺構除去 土除確認	[Bar chart showing work from early June to mid-June]		
遺構調査	[Bar chart showing work from late June to late August]		
遺物洗浄 写真整理	[Bar chart showing work from mid-June to late August]		
補足調査 撤収	[Bar chart showing work in late August]		

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

木原城址は、茨城県稲敷郡美浦村大字木原 1568 番地 6 ほかに所在している。

美浦村は、茨城県の南部に位置し、小貝川と桜川とに挟まれた標高 30 m ほどの稲敷台地の先端部に所在する。村域の北部から東部にかけては霞ヶ浦と面しており、村内の主要河川である清明川や高橋川には幾多の支流が流れ込んで、霞ヶ浦へと注ぎ込んでいる。その周辺には、沖積地や偏狭な谷津が樹枝状に開析されている。こうした自然環境下において地形を大別すると、霞ヶ浦縁辺の湖岸低地部には沖積層が、内陸部の台地には洪積層が形成されている<sup>1)</sup>。

稲敷台地を形成している地層は、下層位から、藪層、成田下層、成田上層、竜ヶ崎層、常総粘土層、関東ローム層、そして現在の生活面を含む表土層となる<sup>2)</sup>。

当城址が所在する稲敷台地の南東部は、台地中央部から起伏をもちながら緩やかに下り、標高 20 m ほどとなっており、霞ヶ浦縁辺の湖岸低地部にむかって開析された樹枝状の谷津によって、複雑な舌状地形を呈している。今回の調査地は、台地から低地に下る標高 9～18 m の傾斜部に位置しており、谷津地形を呈している。

現在の調査地周辺は、霞ヶ浦縁辺の低地部には水田、微高地には宅地が営まれ、台地上は宅地や畑地、山林として土地利用されている。

### 第2節 歴史的環境

当城址①は稲敷台地の南東部に位置し、霞ヶ浦を望む台地の縁辺部に築城されている。霞ヶ浦南岸の台地や微高地には、遺跡の分布調査によって多くの遺跡が確認されている。その分布は霞ヶ浦近辺に濃密であり、また霞ヶ浦から離れた内陸部においても、小河川や発達した谷津の兩岸の台地上には比較的密に分布している。霞ヶ浦やそこに流れ込む河川を利用した人々の生活がうかがわれる。

旧石器時代の遺跡は、霞ヶ浦沿岸の島状に独立した台地上や稲敷台地に連なる台地上に数例みることができ、美浦村北東部の島状の台地上では、ナイフ形石器が出土した陸平貝塚<sup>3)</sup>や石器集中地点が確認された陣屋敷遺跡<sup>4)</sup>、根本遺跡<sup>5)</sup>をはじめ、花立遺跡が所在している。当城址近辺ではナイフ形石器や細石刃が出土した御茶園遺跡<sup>6)</sup>〈17〉、原遺跡<sup>7)</sup>〈19〉、木原神田遺跡<sup>8)</sup>〈72〉が所在し、低地に面した内陸部の台地上にも大谷貝塚<sup>9)</sup>や沢田古墳群<sup>10)</sup>〈32〉が所在し、ナイフ形石器、石刃などが出土している。各地点における当該期の地形や環境が猟場に適していたといえる。

縄文時代の遺跡は、当村北東部に位置する島状の台地上や稲敷台地に形成された谷津地形の兩岸で多数が確認されている。特に貝塚は多く確認されており、日本人の手による初の学術発掘調査がなされた国指定史跡の陸平貝塚や前期土器の標識遺跡である興津貝塚〈49〉は著名である。この他にも早期の大谷日光台貝塚や前期から中期の虚空蔵貝塚〈36〉、中期の木原台遺跡〈87〉、や大谷貝塚、後・晩期の信太貝塚〈37〉、平木貝塚などがあり、海生の貝類や魚類の遺存体が確認されている。また、生業に関わる遺跡では晩期の製塩遺跡である法堂遺跡<sup>11)</sup>がある。これらは美浦村東域の余郷入近辺に多く分布しており、入り江であった古環境が復元される。当城址で



は以前の調査<sup>11)</sup>で竪穴住居跡1軒が確認されるとともに、中期から後期にかけての多量の土器片が出土している。近辺には宮脇遺跡<2>や御茶園遺跡、御茶園西遺跡<16>、荒地遺跡<18>、原遺跡などが所在し、当該地近辺においても集落を営むのに適した環境であったものと考えられる。

弥生時代の遺跡は中期の笹山遺跡<sup>12)</sup><56>や後期中葉から後葉の陣屋敷遺跡、根本遺跡、後期末葉の沢田古墳群などがある。陣屋敷遺跡と根本遺跡は近接する遺跡であるが、土器の様相を異にしており注目されている。また、当城址<sup>13)</sup>においては竪穴住居跡12軒や環濠と推定される堀状遺構が確認されている。中期末葉の大崎台式系の土器群は主に竪穴住居跡から、後期後葉の上稲吉式系の土器群は堀状遺構からの出土であり、中期末葉から後期後葉にかけての環濠集落が想定されている。

古墳時代の遺跡は前期に数えられる遺跡が少なく、当城址<sup>14)</sup>や鳥状の台地上に所在する池端遺跡<sup>15)</sup>が該当する。中期以降は増加する傾向がみられ、野中遺跡<sup>16)</sup><34>や下り内遺跡<sup>17)</sup>などの集落跡に加えて、三王山古墳を含む大塚古墳群<7>や愛宕山古墳を含む木原白旗古墳群<15>、八枚原古墳群<35>、沢田古墳群、常陸笹山古墳群<57>、東崎古墳<86>などが形成され、台地上に分布している。これらのうち、中期では沢田古墳群で2基の古墳が、後期では八枚原古墳群の庚申古墳<sup>18)</sup>や常陸笹山古墳群の光仏古墳が発掘調査されている。庚申古墳では箱式石棺内から2体以上の人骨と金環、青銅環、ガラス小玉が出土し、光仏古墳では箱式石棺内から2体の人骨と直刀や鉄鏃などの副葬品が出土した。また、江戸時代の国学者色川三中が著した「黒坂命墳墓考」は『常陸風土記』逸文にみる論考で、大塚古墳群の弁天塚古墳に関わる著作である。

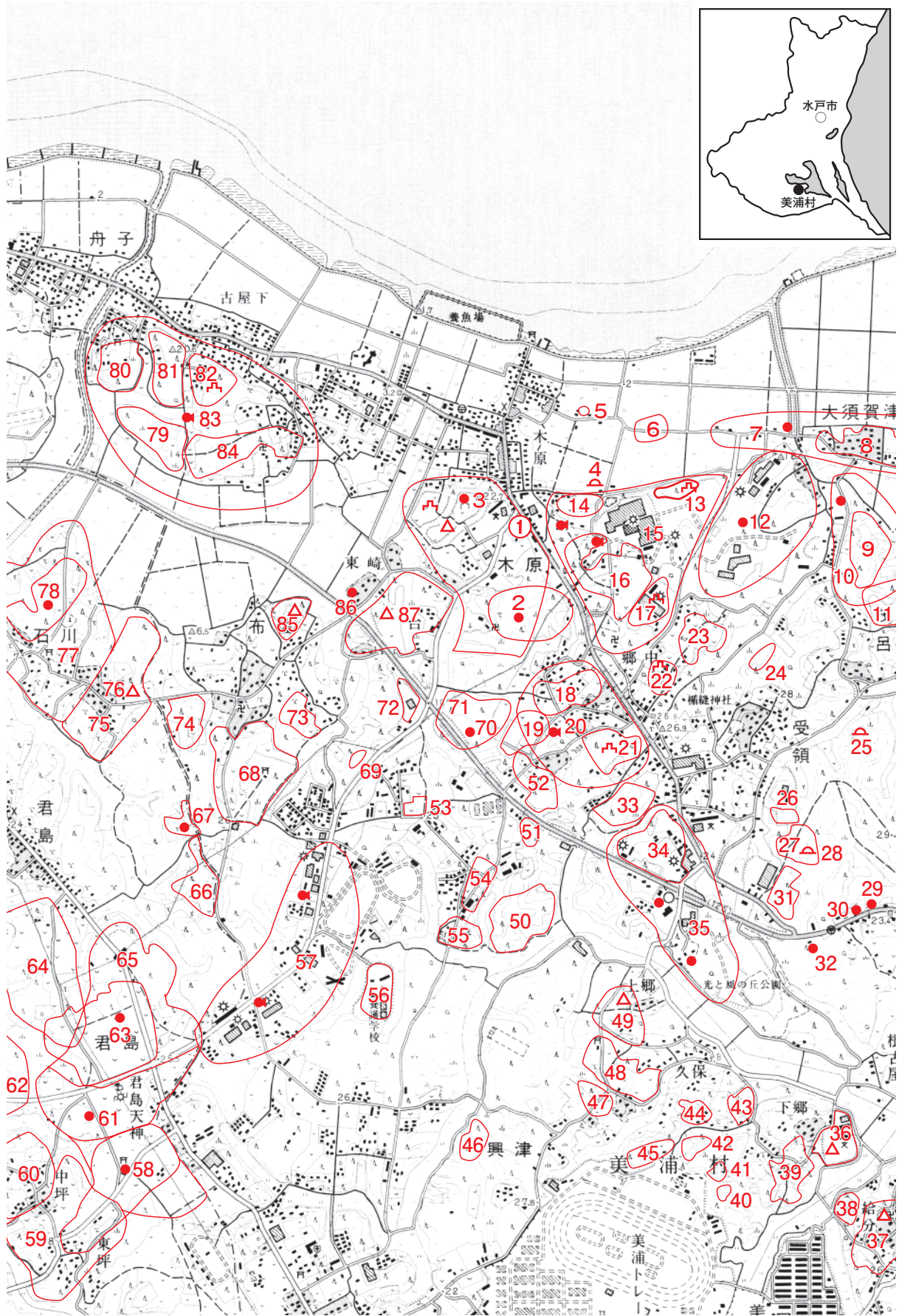
奈良・平安時代にはいと、当該地周辺は「信太郡津島郷」に属したとされている<sup>19)</sup>。遺跡は、比較的内地部に所在している。君島天神遺跡<65>や鍛冶内遺跡<68>、西ノ前遺跡<77>、木原台遺跡は、近くに古墳が所在することから、古墳時代から継続する集落跡と推測される。また原畑遺跡<41>や稲荷山遺跡<42>は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが調査された平安時代の遺跡である<sup>20)</sup>。これらの遺跡範囲は、古墳時代から続く遺跡は広域で、古代から営まれた遺跡は偏狭といった違いをみせているが、一方で現在の路線網で繋がっているようにみえる。これらの路線は信太郡一宮である楯縫神社付近で集合しており、茂呂後田遺跡<9>を經由して大須賀津に所在する岸内遺跡<8>へ達している。当該期に水路や陸路が整備されたことが推測され、台地上の陸路においては現在の路線網の祖型をみいだせるものと考えられる。

平安時代末期の当該地は、常陸平氏の勢力下で立荘された「信太荘」に属していたとされている。当荘は美福門院(藤原得子)に寄進され、その後、子にあたる八条院(暲子内親王)などの血縁者や皇族に伝承されていった。そして、鎌倉時代末期には後宇多天皇から東寺へ供料荘として寄進されている。しかし、実質的支配は常陸の有力御家人である小田氏や鎌倉執権の北条一族が掌握していたと考えられている<sup>21)</sup>。

南北朝・室町時代にはいと、当荘は南朝方であった小田氏から北朝方で関東執事であった高氏の支配下となった。政変によって高氏が没落すると、関東管領の上杉氏や小田氏の所領として、目まぐるしく領主権が移行した。最終的には上杉氏の所領となり、被官であった土岐氏や近藤氏、白田氏が入荘し、在地の経営にあたったと考えられている。彼らは山内衆や山内一揆衆と称される一揆で結束し、信太荘の復権を狙う小田氏に対し、協力して当荘の維持に努めたのである。

戦国時代になると佐竹氏や後北条氏が台頭し、対峙する情勢となった。小田氏は当概地における権勢を徐々に低下させ、没落していった。こうしたなか、山内衆は上杉氏の支配下を離れ、頭角を現してきた土岐氏を盟主に、近藤氏や白田氏は被官化されていき、16世紀後半には土岐氏が信太荘一円を支配することとなった。そして、土岐氏の江戸崎城を拠点に近藤氏の木原城や白田氏の波賀城などが準拠点となって信太荘を統治した。このことを物語るように木原城址周辺には、古墳を砦に改修した木原根火山遺跡<13>、御茶園遺跡(御茶園館





第1図 木原城址周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「木原」）

表1 木原城址周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
①	木原城址		○	○	○		○		45	十三塚遺跡			○					
2	宮脇遺跡		○	○	○	○	○		46	興津白井遺跡	○	○		○	○		○	
3	城山古墳				○				47	興津神明遺跡		○		○				
4	木原石神塚							○	48	上ノ内遺跡	記載なし							
5	大船戸遺跡			○					49	興津貝塚		○						
6	木原二本松遺跡		○		○	○	○		50	摩訶陀東遺跡	記載なし							
7	大塚古墳群				○				51	柿平遺跡				○				
8	岸内遺跡	○	○	○	○	○	○		52	原南遺跡		○						
9	茂呂後田遺跡		○			○			53	木原平塚遺跡					○			
10	茂呂根本台古墳群				○				54	摩訶陀北遺跡		○						
11	久保ノ内遺跡			○					55	摩訶陀遺跡		○		○	○			
12	大須賀津古墳群				○				56	笹山遺跡		○	○	○				
13	木原根火山遺跡				○		○		57	常陸笹山古墳群				○				
14	木原新宿遺跡		○		○				58	八幡古墳群				○				
15	木原白旗古墳群				○				59	平内次郎遺跡		○		○	○			
16	御茶園西遺跡		○				○		60	小山前遺跡		○		○	○			
17	御茶園遺跡	○	○	○	○	○	○		61	羽賀戸古墳群		○		○				
18	荒地遺跡		○	○	○		○		62	台山遺跡					○			
19	原遺跡	○	○		○				63	君島古墳群		○		○				
20	木原原古墳群				○				64	元林遺跡				○				
21	木原館跡				○		○		65	君島天神遺跡				○	○			
22	木原門前遺跡						○		66	東向遺跡		○		○				
23	迎平遺跡			○					67	三ッ塚古墳群				○				
24	茂呂天神遺跡		○		○				68	鍛冶内遺跡		○		○	○	○		
25	池ノ瀉庚甲塚							○	69	木原長峰遺跡	記載なし							
26	八ヶ山遺跡			○	○				70	木原行竹古墳				○				
27	請領妙山遺跡			○	○				71	清月遺跡	記載なし							
28	茂呂カリマタ古墳				○				72	木原神田遺跡	○	○	○	○	○			
29	(名称不明, 湮滅古墳)				○				73	布佐谷津遺跡	記載なし							
30	(名称不明, 湮滅古墳)				○				74	七曲り遺跡	記載なし							
31	刈満田遺跡			○	○				75	石川遺跡		○		○	○			
32	沢田古墳群	○	○		○				76	石川貝塚		○						
33	天王後遺跡	記載なし							77	西ノ前遺跡				○	○			
34	野中遺跡		○	○	○				78	荒匂古墳群				○				
35	八枚原古墳群				○				79	浅間台遺跡		○						
36	虚空蔵貝塚	○	○		○				80	舟子宮平遺跡		○	○	○	○			
37	信太貝塚		○						81	六所遺跡	記載なし							
38	西山東添遺跡		○		○		○		82	上ノ内遺跡			○	○		○		
39	醒ヶ井遺跡		○						83	舟子塚原古墳群						○		
40	高野台遺跡		○				○		84	北の窪遺跡		○	○	○				
41	原畑遺跡		○			○		○	85	殿田遺跡		○	○	○	○	○		
42	稻荷山遺跡		○		○	○			86	東崎古墳				○				
43	中根台遺跡			○					87	木原台遺跡		○	○	○	○			
44	稻荷山北遺跡	記載なし																

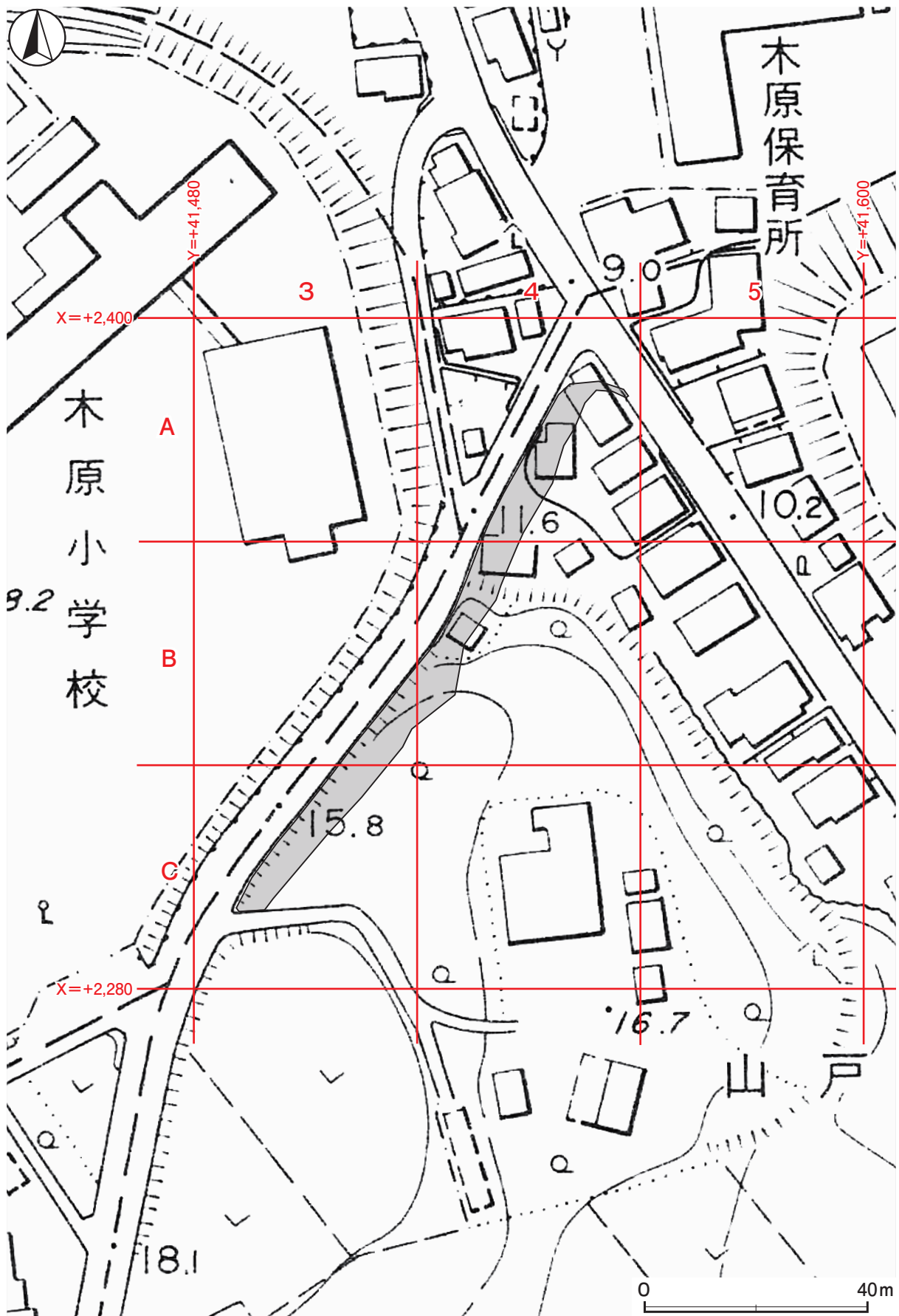
跡)、木原館跡<21>、木原門前遺跡<22>などの館や砦が木原城の外郭に所在し、木原城を防備している。また集落の小城郭化が進み<sup>22)</sup>、木原城などから江戸崎城を結ぶ道路網も整備されていった。こうした道路には街道閉塞などを目的とした土塁や堀が構築され<sup>23)</sup>、信太荘内を要塞化した防御網が成立したと考えられている。

土岐氏は領内の防御を進めながら、後北条氏と結びつき佐竹氏と対峙した。天正18(1590)年、豊臣氏によって後北条氏が滅亡すると、豊臣氏と結び付いていた佐竹氏へ土岐氏は降伏し、木原城などにおいても佐竹氏に対する交戦がないまま、佐竹氏の所領となった。

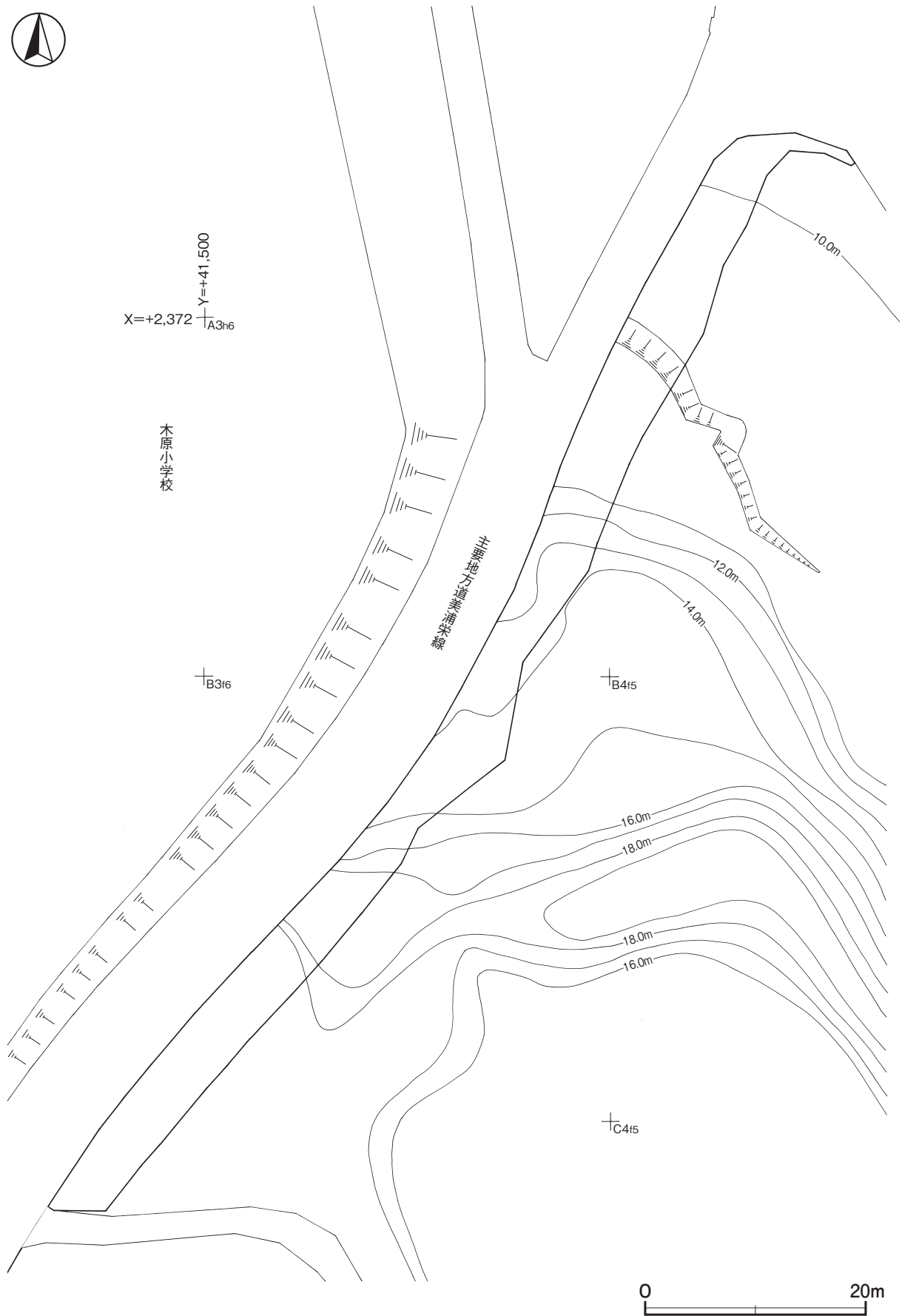
註

- 1) 美浦村史編さん委員会編 『美浦村誌』美浦村 1995年11月
- 2) a 横山芳春「茨城県における更新統下総層群の層序と堆積史」『早稲田大学リポジトリ』早稲田大学 2005年3月  
b 註1)に同じ
- 3) 註1)に同じ
- 4) 中村哲也ほか「茨城県稲敷郡美浦村 陣屋敷遺跡」『陸平研究所報告』1 茨城県美浦村・陸平調査会 1992年12月
- 5) 中村哲也ほか「茨城県稲敷郡美浦村 根本遺跡」『陸平研究所報告』2 茨城県美浦村・陸平調査会 1996年3月
- 6) 高橋嘉朗ほか『御茶園遺跡』茨城県美浦村・御茶園遺跡発掘調査会 1994年3月
- 7) 註1)に同じ
- 8) 註1)に同じ
- 9) 駒沢悦郎ほか「大谷貝塚 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第317集 2009年3月
- 10) 本橋弘巳「沢田古墳群 国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第276集 2007年3月
- 11) a 後藤和民ほか『木原城址Ⅰ－平成5年度 予備発掘調査概報－』木原城址調査団 1994年3月  
b 後藤和民ほか『木原城址Ⅱ－平成6年度 予備発掘調査概報－』木原城址調査団 1995年3月
- 12) 大竹房雄ほか『常陸笹山』稲敷郡美浦村教育委員会・笹山遺跡発掘調査会 1986年3月
- 13) 註11) a・bに同じ
- 14) 註11) a・bに同じ
- 15) 中村哲也ほか「茨城県稲敷郡美浦村 池端遺跡－発掘調査報告－」『陸平研究所叢書』2 美浦村教育委員会 2004年3月
- 16) 中村哲也ほか「茨城県稲敷郡美浦村 野中遺跡－第2次発掘調査報告－」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』8 美浦村教育委員会 2003年3月
- 17) 高木國男ほか『下り内遺跡』美浦村教育委員会・下り内遺跡発掘調査会 1986年12月
- 18) 大竹房雄ほか『庚申古墳(緊急発掘調査報告書)』美浦村教育委員会・庚申古墳発掘調査会 1988年3月  
註1)に同じ
- 19) 中山信名『新編常陸国誌』崙書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 20) 奥富雅之ほか「興津地区遺跡群 高野台遺跡 原畑遺跡 稲荷山遺跡 日本中央競馬会トレーニングセンター森林調教施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告』7 美浦村教育委員会 1996年3月
- 21) a 阿見町史編さん委員会編 『阿見町史』阿見町 1983年3月  
b 註1)に同じ
- 22) 註21) aに同じ
- 23) 註21) aに同じ

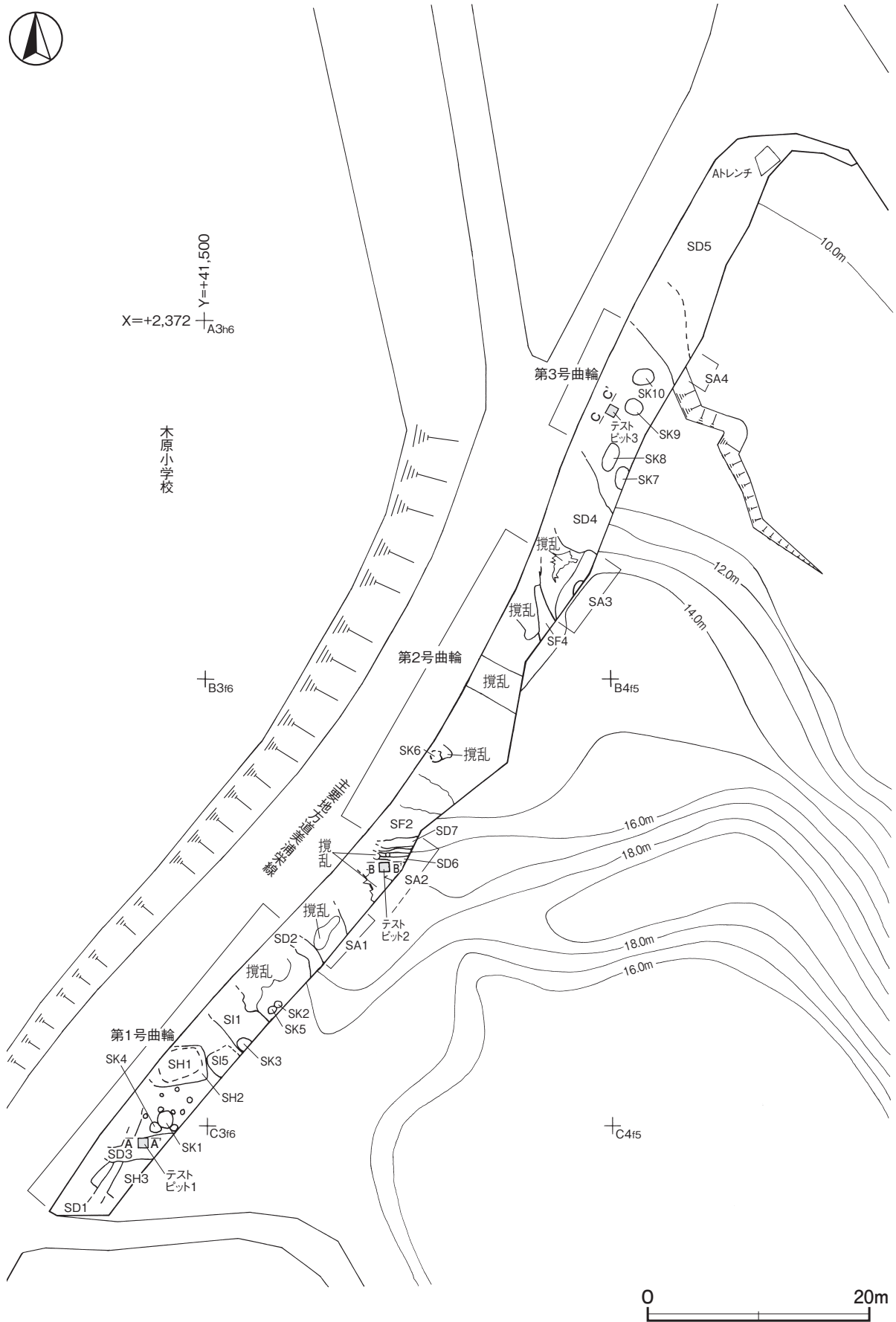




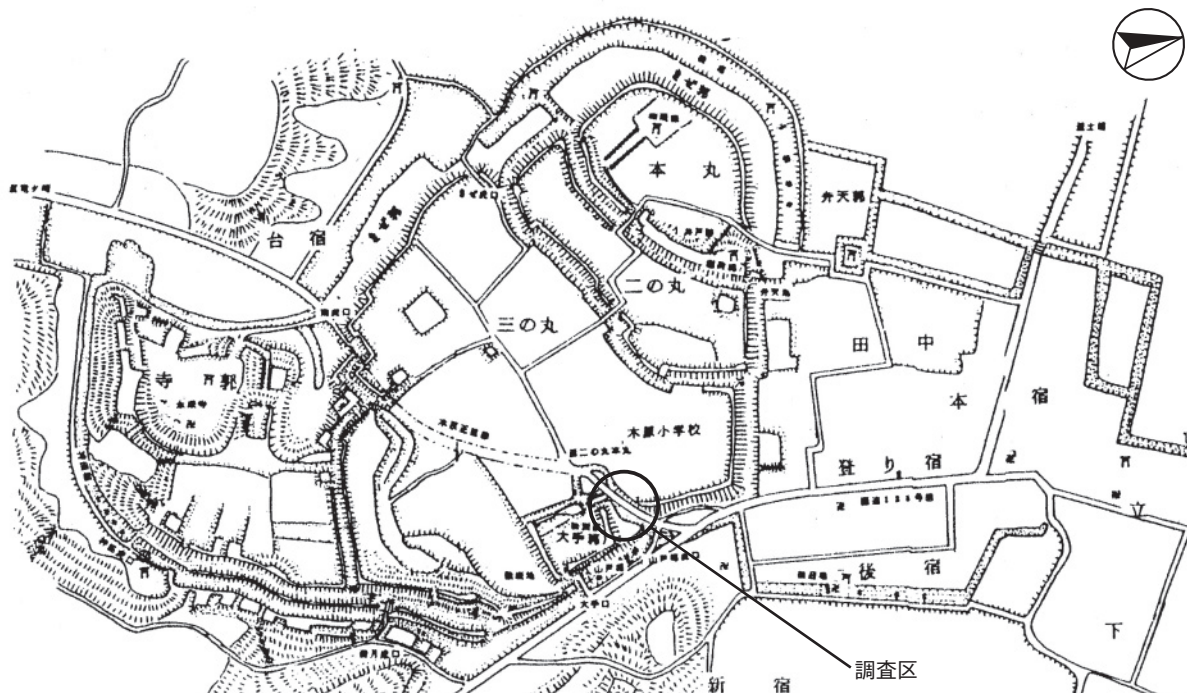
第2図 木原城址調査区設定図（美浦都市計画図 2,500分の1より作成）



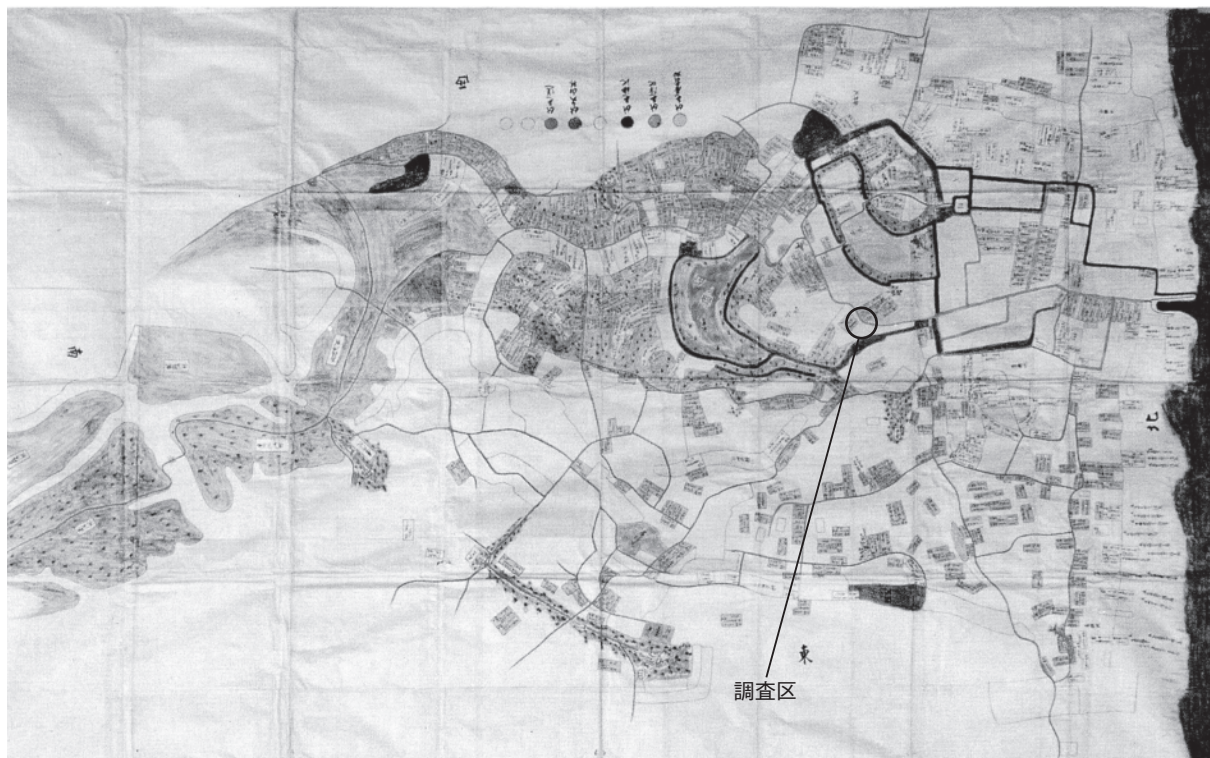
第3図 木原城址調査区現況測量図



第4図 木原城址遺構全体図



第5図 木原城縄張復元図（平成3年度，大竹房雄，吉田茂共作による『美浦村誌』）



第6図 近世末期天領検地絵図「木原台」（『美浦村誌』）



## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

木原城址は、美浦村の北西部に位置し、霞ヶ浦南岸の標高約 20 mの台地に立地している。当城址の地形は、谷津によって仕切られた舌状台地である。台地先端部に主郭をおき、台地内部へ向かって堀切を設けたり、小谷津の地形を利用して曲輪を構築した連郭式城郭である。今回の調査区域は大手郭の北西部に該当し、台地から緩やかに落ち込む谷津地形を呈している。調査面積は 580㎡で、調査前の現況は山林、荒地である。

調査の結果、曲輪跡 3 区画、土塁跡 3 条、切岸跡 1 条、堀跡 2 条、竪穴建物跡 2 軒（古墳時代・時期不明）、竪穴遺構 3 基（古墳時代・戦国時代・時期不明）溝跡 5 条（戦国時代）、道路跡 3 条（戦国時代 1・江戸時代 2）、土坑 10 基（縄文時代 1・戦国時代 2・時期不明 7）、ピット 9 か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 17 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・高台付坏・器台・高坏・甕）、須恵器（坏・甕）、陶磁器（碗・皿・鉢）、土師質土器（皿・鉢・脚）、瓦質土器（鉢・火舎・置竈）、土製品（土玉）、石器（砥石）、金属製品（刀子・鍋・竈鏝・銭貨・煙管・釘）などである。

### 第2節 基本層序

調査区の地形は谷津であることから、基本層序の調査においては調査区の南端部、中央部、北部の三地点でおこなった。南端部は台地上の平坦部（テストピット 1）に、中央部は台地と谷津部の境（テストピット 2）に、北部は谷津の埋没部分（テストピット 3）に設定した。

第 1 層は現代の耕作土や攪乱が激しく重複することから、総じて表土層とした。

第 2 層は黒褐色の自然堆積層で、ローム粒子を少量、焼土ブロック・炭化粒子を微量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚 36 ～ 44cm である。

第 3 層は黒色の自然堆積層で、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚 42 ～ 48cm である。

第 4 層は黒褐色の自然堆積層で、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚 36 ～ 44cm である。

第 5 層は暗褐色の自然堆積層で、ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚 25 ～ 32cm である。

第 6 層は明黄褐色の自然堆積層で、ローム粒子を多量に含んでいる。粘性、締まりは普通で、層厚 6 ～ 10 cm である。

第 7 層は黄褐色のソフトローム層である。粘性、締まりは普通で、層厚 20 ～ 26cm である。

第 8 層は明黄褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量に含んでいる。粘性、締まりは強く、層厚 34 ～ 42 cm である。

第 9 層は黄褐色のハードローム層である。粘性、締まりは強く、層厚 56 ～ 62cm である。



第10層は明黄褐色の粘土層である。シルト質の粘土で、植生痕に酸化鉄が沈殿している。粘性、締まりは強く、層厚14～20cmである。

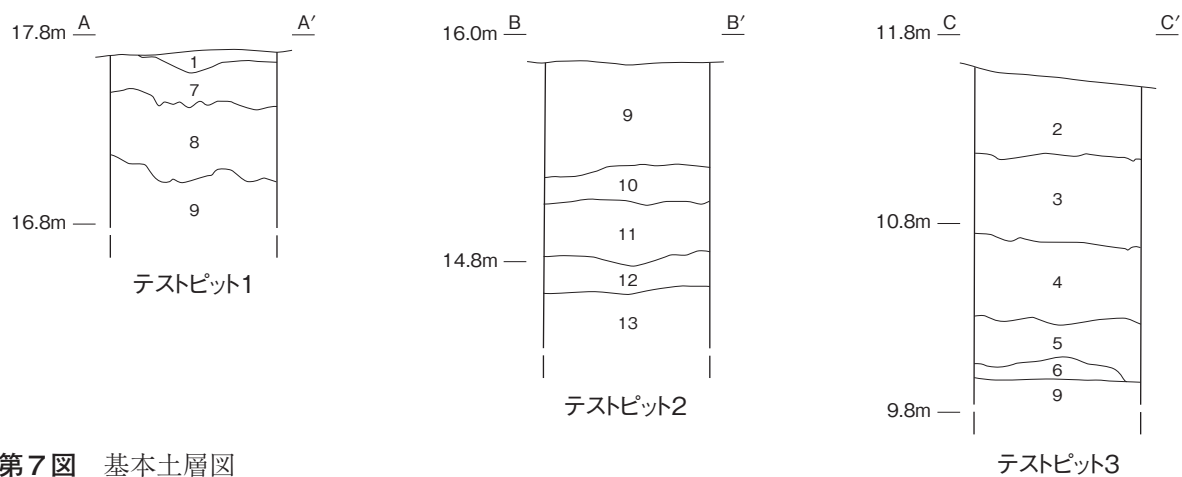
第11層は褐灰色の粘土層である。シルト質の粘土で、薄い砂層が数条堆積している。粘性は普通で、締まりは強く、層厚26～32cmである。

第12層は明赤褐色の砂層で、酸化鉄粒を多量、砂粒を少量含んでいる。粘性は弱く、締まりは強く、層厚16～28cmである。

第13層は青灰色の砂層で、礫を微量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。下部まで掘り抜いていないため、層厚は不明である。

基本層序を大別すると、第2～6層は谷津への流入土、第7～8層はローム層、第9～10層は常総粘土層、第12層以下は竜ヶ崎層に比定できる。第11層は第10層と第12層の漸移層と思われる。

遺構の確認面は台地部では第7層の上面、谷津の埋没部では第2～3層の上面である。いずれの層も第1層によって上面を攪乱されていることから、実質的な遺構の確認面ではない。



第7図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

土坑

##### 第10号土坑（第8・9図）

**位置** 調査区北東部のA4i5区、標高11mほどの台地傾斜部に位置している。

**規模と形状** 長径1.88m、短径1.64mの楕円形で、長径方向はN-76°-Eである。深さは50cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

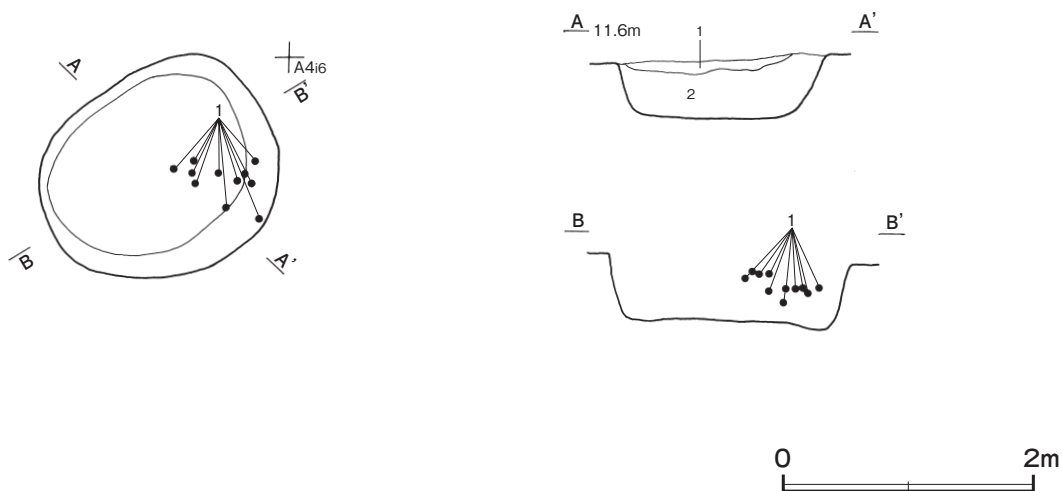
**覆土** 2層に分層できる。焼土粒子や炭化物が不規則に混入していることから、人為堆積である。第1層については層厚が薄いため、明確な判断はできないが、土師器片の出土が際立つことから、本跡を掘り込んだ別遺構、もしくは表土層の残存と考えられる。

##### 土層解説

1 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量      2 黒色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片45点（深鉢）が出土している。第2層からの出土が多数で、北東部に偏って確認されている。これらの土器片は多くが接合でき、同一個体の深鉢となった。このほか、第1層から土師器片12点（鉢1、甕11）が出土している。このうち鉢については、別遺構の可能性があるので、遺構外出土遺物の項で掲載した。

**所見** 出土遺物から縄文時代後期前半と考えられる。同一個体の深鉢となったことから、土器埋設の土坑の可能性はある。骨片は確認できなかった。



第8図 第10号土坑実測図



第9図 第10号土坑出土遺物実測図

第10号土坑出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[36.0]	(50.2)	-	長石・石英・ 白色粒子	にぶい橙	普通	LRの単節縄文 胴部下部無文帯	上層～下層	55% PL8

## 2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1軒、竪穴遺構1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

### (1) 竪穴建物跡

#### 第1号竪穴建物跡（第10・11図）

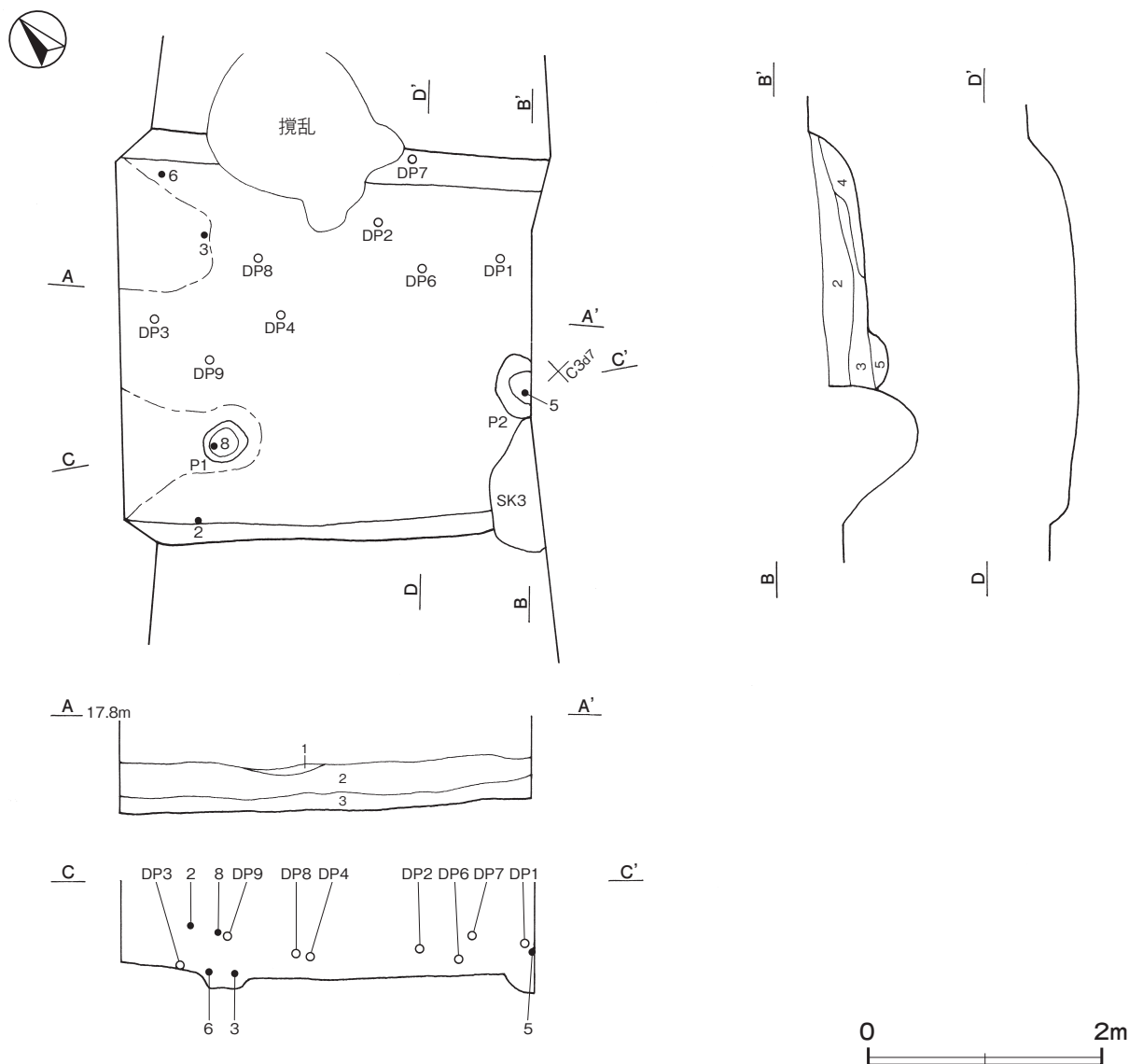
**位置** 調査区南西部のC3c6区、標高18mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号土坑に掘り込まれている。

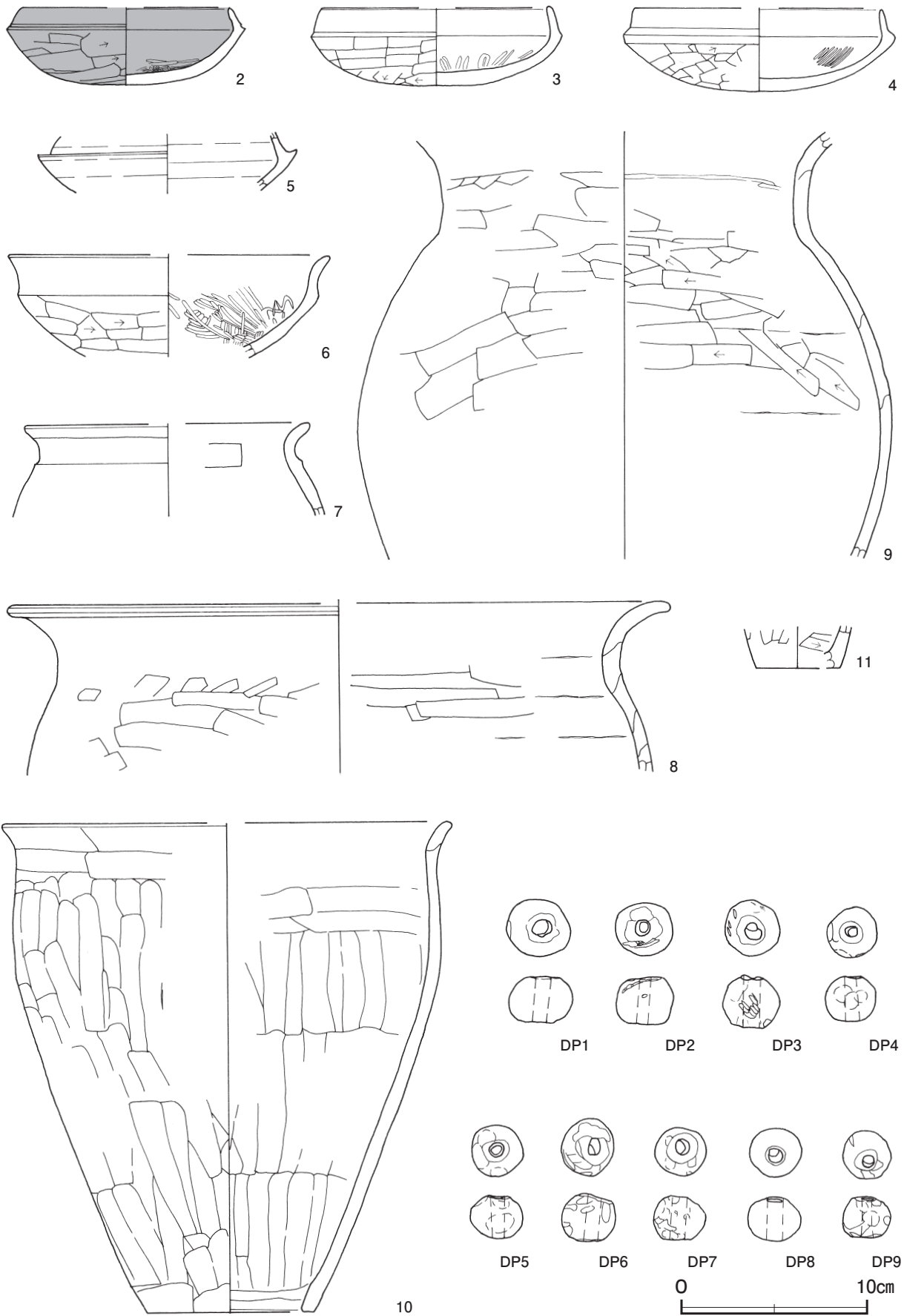
**規模と形状** 東部は調査区域外へ延び、西部は主要地方道美浦栄線によって壊されているため、北東・南西軸は3.46 mで、北西・南東軸は3.45 mしか確認できなかった。東西の壁は確認できなかったが、長軸と短軸の法量から長方形もしくは隅丸長方形を呈すると考えられる。長軸方向はN-48°-Wである。壁高は14~20cmで、南壁はほぼ直立し、北壁は外傾している。北壁の攪乱を受けた部分から粘土塊を多数確認した。粘土塊は、木の根に抱え込まれていたことから、形状や範囲は不明であるが、竈を有している堅穴建物の可能性がある。

**床** ほぼ平坦で、ハードローム層を掘り込んだ面を床面としている。北部が北壁に向かって緩やかに高くなっている。硬化面はP1周辺とその北側の小範囲を除いた全域で確認できた。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ10cm・14cmで、P2の覆土はロームブロックを中量含んでいることから、埋め戻していると考えられる。配置が不規則であることから柱穴の可能性は低く、性格不明である。



第10図 第1号堅穴建物跡実測図



第 11 图 第 1 号竖穴建物跡出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層できる。第1～3層は土質が似た細かい粒子の堆積土であることから、短期間での自然堆積と考えられる。第4層はロームブロックを多量に含んでいる人為堆積層で、第5層はP2の覆土である。

**土層解説**

- |       |                       |       |           |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量     | 4 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 5 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |       |           |

**遺物出土状況** 土師器片 539 点 (坏6・器台1・甕532), 須恵器片 48 点 (坏43・甕5), 土製品 13 点 (土玉) が、全体の覆土中から出土している。この他に流れ込んだ縄文土器片 237 点 (深鉢) や弥生土器片 23 点 (壺) などが出土している。なお細片で掲載はできなかったが、東海系の可能性がある甕が出土している。

**所見** 出土遺物から6世紀後葉と考えられる。土器は接合した破片がほとんど認められなかったことから、流入による可能性がある。床面から確認できた3・6・DP3についても同様である。土玉が比較的多く出土しているが、性格は不明である。本跡の形状や特徴から工房跡と推察できる。

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	坏	[11.2]	4.2	—	長石・赤色粒子	褐灰	普通	外面横位ナデ及び手持ちヘラケズリ 内面横位ナデ後縦位ミガキ 外・内面黒色処理	覆土上層	40% PL8
3	土師器	坏	[12.2]	4.2	—	長石・石英・雲母	褐	普通	外面横位ナデ及び手持ちヘラケズリ 内面横位ナデ後暗文状のミガキ 外・内面漆塗り	床面	30% PL8
4	土師器	坏	[13.4]	4.5	—	長石・石英	にぶい橙	普通	外面横位ナデ及び手持ちヘラケズリ 内面横位ナデ後縦位ミガキ	覆土中	10%
5	須恵器	坏	—	(3.1)	—	長石・石英	黄灰	良好	ロクロナデ成形 東海系	覆土中	5% PL8
6	土師器	高坏カ	[17.0]	(5.5)	—	長石・石英	明赤褐	普通	外面横位ナデ 坏部下端部にケズリ痕残存 内面横位ナデ後ミガキ 口唇部下端に稜	床面	10%
7	土師器	甕	[15.2]	(5.0)	—	長石・石英	明赤褐	普通	頸部に稜 外・内面横位ナデ	覆土中	5%
8	土師器	甕	[35.0]	(9.2)	—	長石・石英	赤褐	普通	体部外面縦・斜位ケズリ後横位ナデ 内面横位ナデ	覆土上層	5%
9	土師器	甕	—	(23.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	頸部外面下端縦位ナデ後横位ナデ 体部横位ナデ 内面横位ナデ	覆土中	10%
10	土師器	甕	[23.6]	26.4	9.0	長石・石英	橙	普通	外面縦位ケズリの後口縁部横位ナデ 内面縦位ナデ後横位ナデ	覆土中	50% PL8
11	土師器	ミニチュア土器	—	(2.2)	[4.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	手捏成形 外面縦位ナデ 内面横位ナデ	覆土中	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土玉	3.1~3.4	2.5	1.0	26.37	長石・石英	ナデ調整 棒状工具による圧痕 一方向からの穿孔	覆土中	PL9
DP2	土玉	2.9~3.1	2.5	0.7	(22.62)	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土中	PL9
DP3	土玉	3.0	2.8	0.9	21.87	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	床面	PL9
DP4	土玉	2.7	2.5	0.5~0.8	20.50	長石・石英	ナデ調整 指頭痕残存 一方向からの穿孔	覆土中	PL9
DP5	土玉	2.8	2.2	0.6~0.8	17.55	長石・石英	ナデ調整 指頭痕残存 一方向からの穿孔	覆土中	PL9
DP6	土玉	2.9~3.1	2.7	0.7~0.9	(16.89)	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL9
DP7	土玉	2.8	2.3	0.8	15.29	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土上層	PL9
DP8	土玉	2.9	2.4	0.8	16.13	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL9
DP9	土玉	2.6	2.2	0.7	(13.67)	長石・石英・白色粒子	ナデ調整 指頭痕残存 一方向からの穿孔	覆土上層	PL9

(2) 竪穴遺構

第2号竪穴遺構 (第12・13図)

**位置** 調査区南西端部のC3d5区、標高18mほどの台地の平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号竪穴遺構に掘り込まれている。東側に接する第5号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。

**規模と形状** 西部は主要地方道美浦栄線によって壊されているため、短軸は3.21mで、長軸は5.21mしか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と考えられ、長軸方向はN-80°-Eである。壁高は58~78cmで、外傾している。

**床** ほぼ平坦で、ハードローム層を掘り込んだ面を床面としている。炉跡や硬化面、ピットは確認できなかった。壁溝が南西コーナー部で確認できた。上幅16～22cm、下幅2～8cmで、深さは8～12cmである。断面形はU字形である。

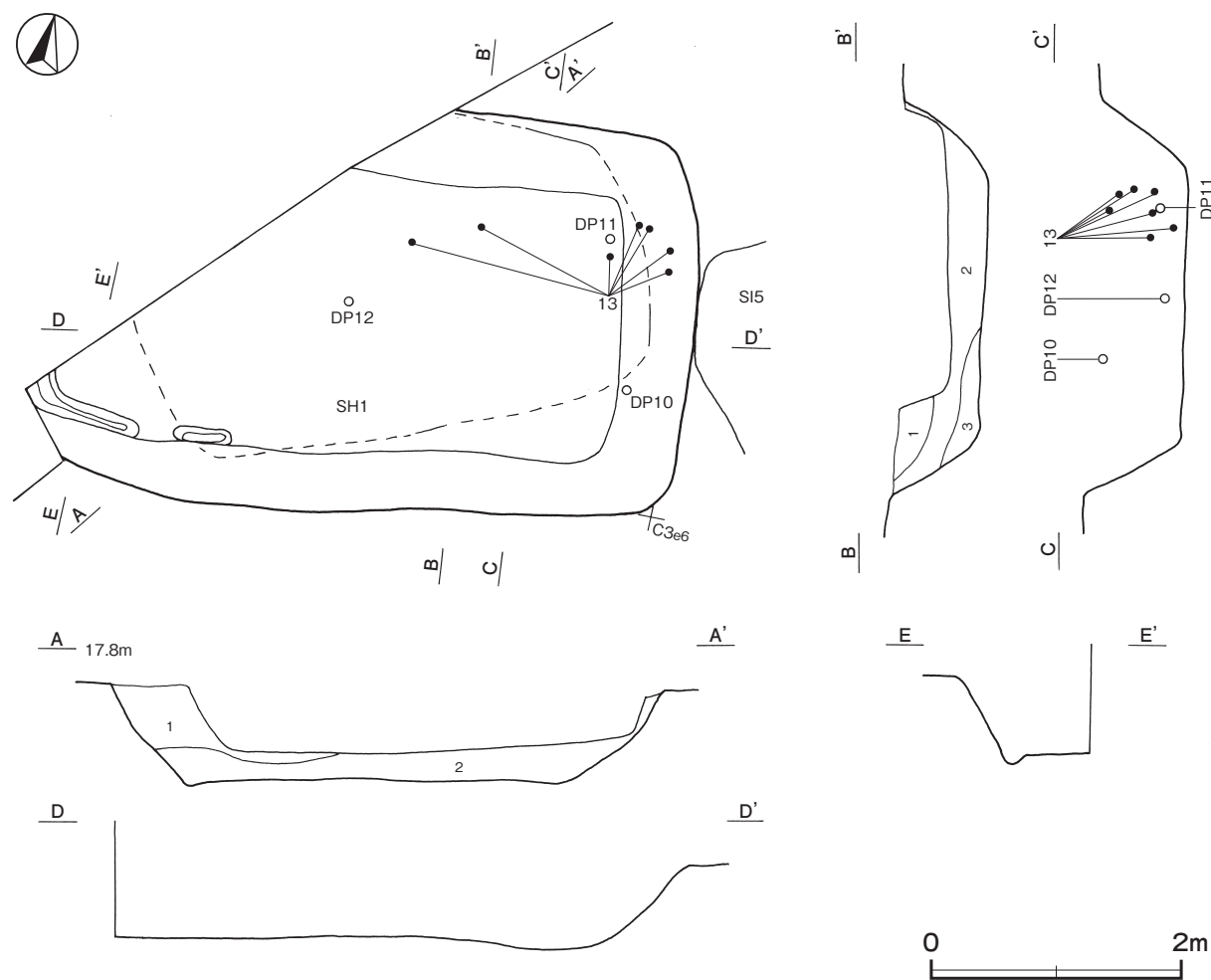
**覆土** 3層に分層できる。第1～3層はロームブロックが比較的多く含まれることから、埋め戻されていると考えられる。色調や含有物が似ていることから、短期間で埋められている。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

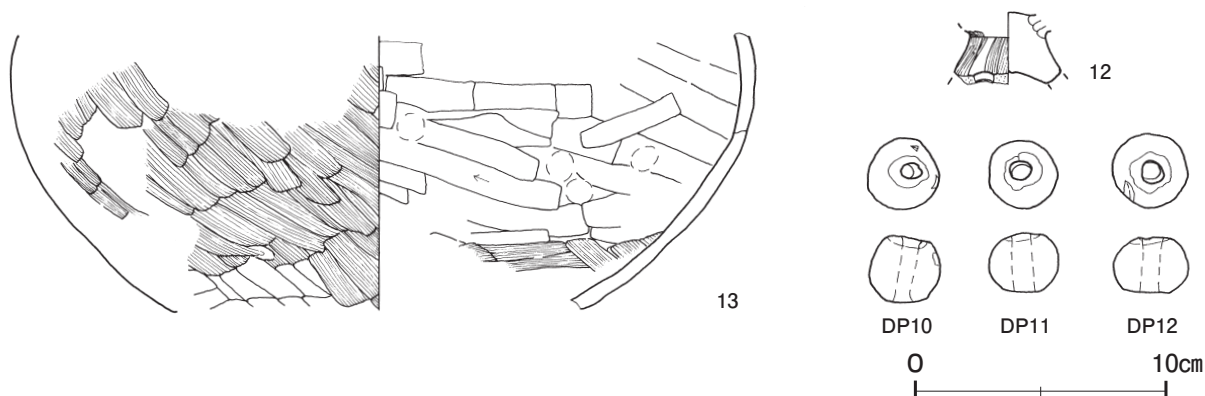
**遺物出土状況** 古墳時代前期の土師器片20点(埴5, 器台2, 甕13), 土玉3点が出土している。出土遺物は北東コーナー部付近に比較的密集しているが、第1号竪穴遺構によって攪乱を受けていることから、分布状況は明確にできなかった。このほか、混入した縄文土器片95点(深鉢), 弥生土器片6点(壺), 古墳時代後期以降の土師器片94点(坏2, 甕92)が出土しているが、上層に含まれていることから、第1号竪穴遺構に関係していると考えられる。

**所見** 出土遺物から古墳時代前期前葉の廃絶と考えられる。なお、弥生土器片については混入と考えられるが、短期間の人為堆積であることから同時性や連続性の可能性も否定できない。第1号竪穴遺構による攪乱のため、詳細は不明である。



第12図 第2号竪穴遺構実測図





第13図 第2号竪穴遺構出土遺物実測図

第2号竪穴遺構跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師器	器台	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面縦位ミガキ 内面縦位ナデ 外側から内側への穿孔	覆土中	10%
13	土師器	甕	-	(11.0)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面斜位ハケ目 下端一部に縦位・斜位ナデ 内面縦位・横位ハケ目後横位ナデ	覆土下層～中層	20% PL8 SD3 破片接合

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP10	土玉	2.8	2.8	0.8	20.40	長石・石英・白色粒子	ナデ調整 棒状工具による圧痕 一方向からの穿孔	覆土上層	PL9
DP11	土玉	2.7～2.8	2.3	0.9	17.30	長石・石英	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL9
DP12	土玉	3.0	2.3	0.9	20.91	長石・石英	ナデ調整 棒状工具による圧痕 一方向からの穿孔	覆土下層	PL9

### 3 戦国時代の遺構と遺物

当該期の遺構は、曲輪跡3区画と土塁跡3条、切岸跡1条、堀跡2条、竪穴遺構1基、道路跡1条、溝跡5条、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。曲輪は城郭の土塁や堀によって区画された平場を示す用語であるが、本報告では防御施設である土塁や堀を曲輪の付帯施設として扱うこととした。また遺物については、遺構の廃絶年代に関わることから、近世のものも含むことを記しておきたい。

#### (1) 第1号曲輪跡 (第14図)

**位置** 調査区南西部のC3a7～C3g4区、標高18mほどの台地平坦部に位置している。

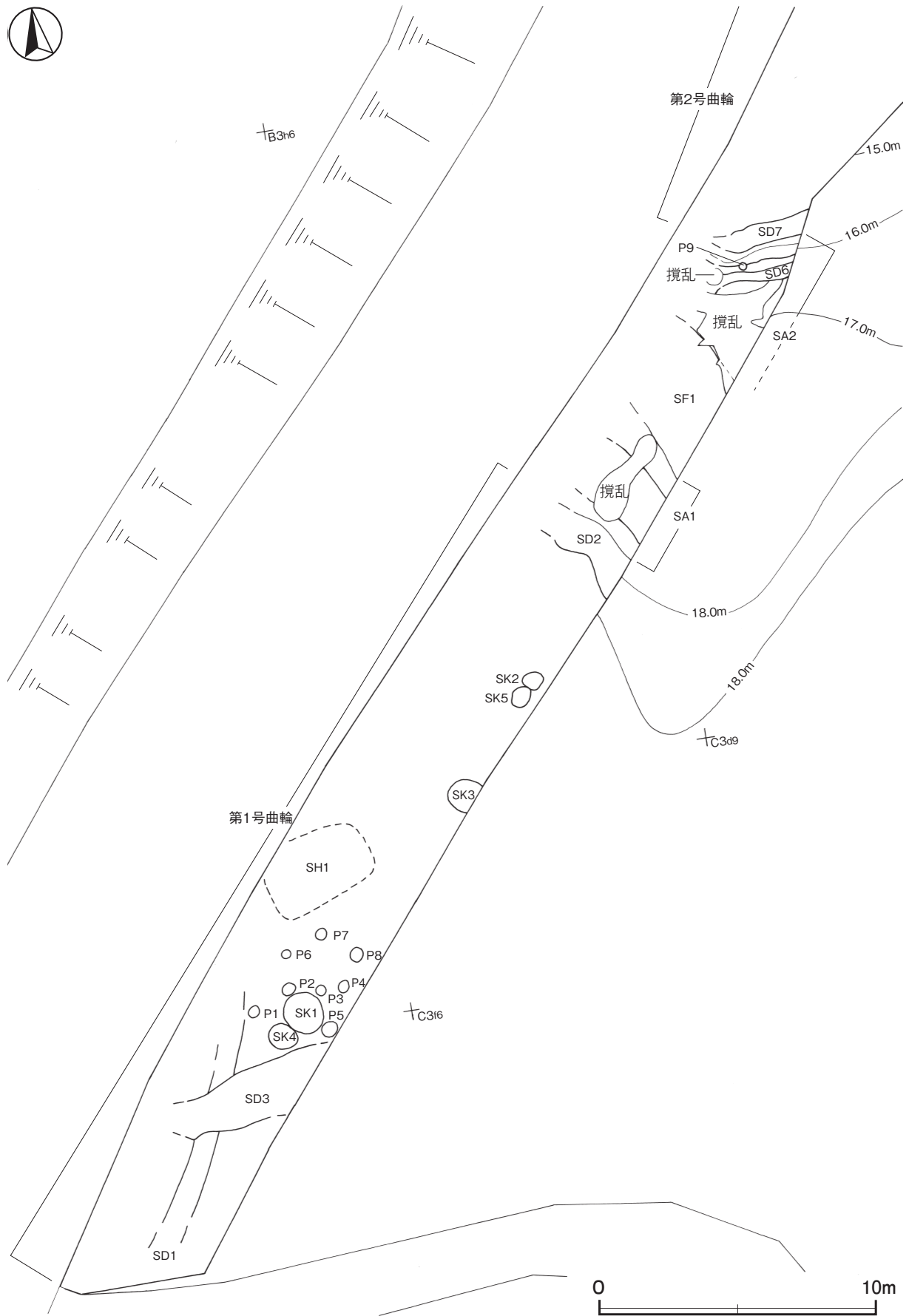
**規模と構造** 木原城縄張復元図(第5図)によると、本跡は三の丸跡の北東端部に位置し、大手郭跡の南西側に接している。三の丸跡の現況は大部分が畑地となっていることから、内部の区画は明確にはできないが、縄張復元図にみられる道路が当時の内区画の一部である可能性がある。長軸約445m、短軸約385mで、地形を利用して構築されていることから、平面形は不整な台形で、長軸方向はN-15°-Wである。

今回の発掘調査区域は、長軸39.8m、短軸4.2mである。第2号曲輪とは、北端部で確認できた第1号土塁と第2号土塁によって区画されている。遺構確認面は北東方向へ緩斜している。

発掘調査で確認された本曲輪の付帯施設は、第1・2号土塁、第1号竪穴遺構、第1号道路、第1・2・3・6・7号溝、第2・5号土坑である。このうち、第2号溝は第1号土塁に、第6・7溝は第2号土塁に伴っている。また第1号道路については、第1号土塁もしくは第2号土塁に付帯すると考えられる。

**所見** 構築年代については不明であるが、大手郭に隣接している立地から、当城の入口部分を防御する重要な部分であったと考えられる。



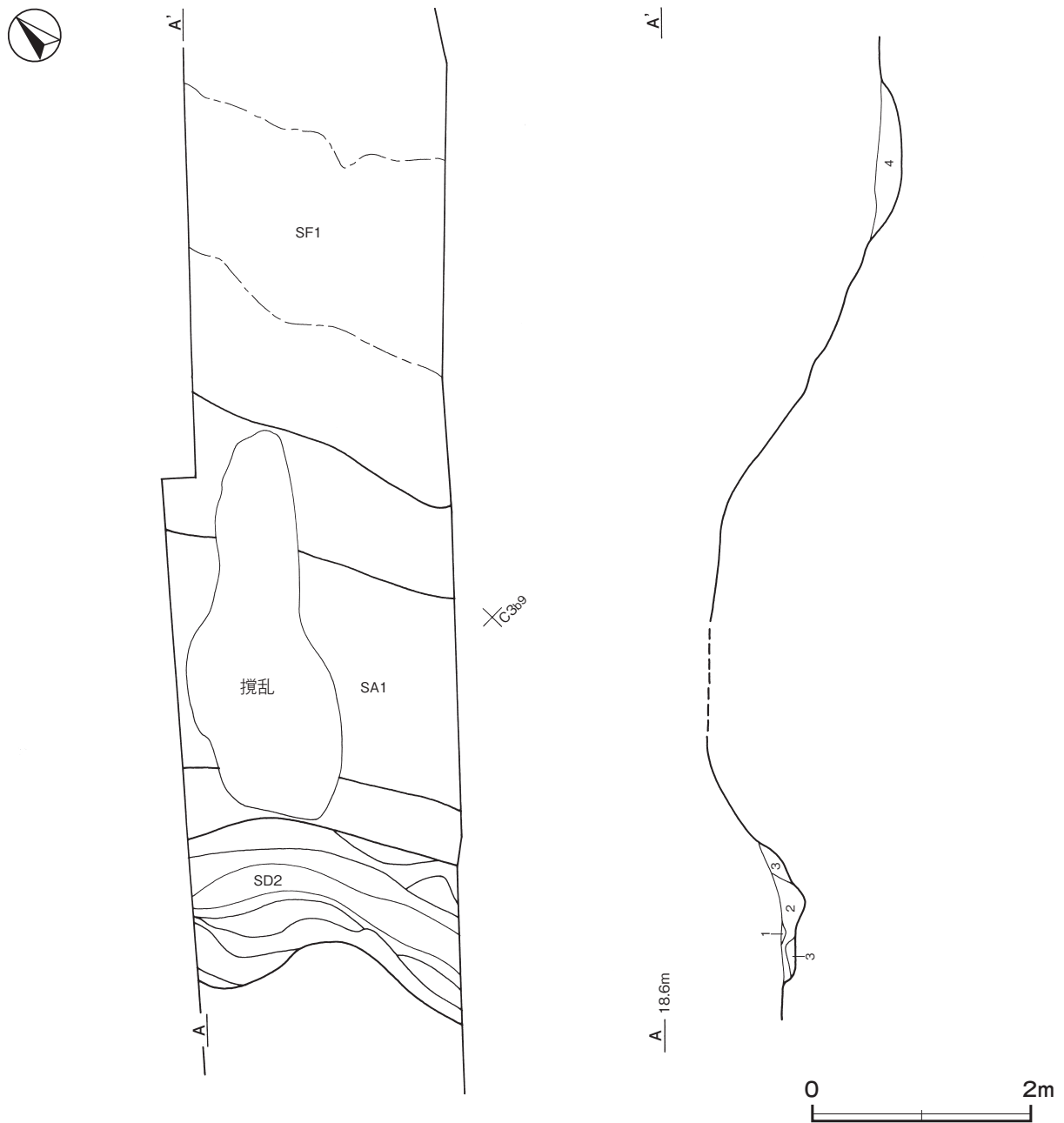


第14図 第1号曲輪跡・ピット実測図

### 第1号土塁跡 (第15図)

**位置** 調査区北東部の B4d3 ~ C3a3 区, 標高 18 m ほどの台地の平坦部に位置している。

**規模と構造** 北西端部と南東端部は調査区域外へ延びているため, 長さは 2.40 m しか確認できなかった。B4d3 区から南東方向 (N - 156° - E) へほぼ直線的に延びている。上幅 2.10 ~ 2.34m, 下幅 4.10 ~ 5.43m であるが, 構築土が残存していなかったことから, 外矩の高さは 1.44 ~ 1.56m, 内矩の高さは 0.40 ~ 0.56m しか確認できなかった。上面や矩面はローム層が露呈していることから, ハードローム層を削り出して, 基盤を構築している。このことから土塁の断面形は台形と推定される。また基盤が露呈していることから, 最終的に構築土は破壊されたと考えられる。基盤の上面には柵列などの痕跡は確認できなかったが, 本曲輪の内矩下部に第2号溝, 外矩下部に第1号道路が確認され, 付帯する施設と考えられる。



第15図 第1号土塁跡・第2号溝跡・第1号道路跡実測図

**第2号溝** 第1号土塁の内矩下部に沿って、掘り込まれている。確認できた規模は、長さ2.50m、上幅0.15～0.33m、下幅0.16～0.36m、深さは25～32cmである。断面形は緩やかなU字形で、底面の傾きは中央部から両端部へ緩斜している。覆土は3層に分層できる。いずれも自然堆積であるが、第3層が堆積した後、溝浚いか掘り直しがおこなわれ、その後第1・2層が堆積している。流入土を浚った痕跡と考えられることから、排水溝と考えられる。出土遺物は混入した縄文土器片1点のみである。

**土層解説**

- |       |                     |       |                |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量      |       |                |

**第1号道路** 第1号土塁と第2号土塁の間に位置しており、第1号土塁の外矩下部に沿って、大手郭方面へ構築されている。確認できた長さは2.40mで、幅は1.48～1.95mである。掘方の断面形は浅いU字形を呈している。構築土は単層で、層厚10～22cmで、硬く締まっている。第1・2号土塁を破壊する際に、本遺構を埋め戻していないことから、重要な道路であったと考えられる。

**土層解説**

- |       |           |
|-------|-----------|
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|-----------|

**所見** 構築にあたっては、ローム層を削りだして基盤とし、盛土をした構造と推察できる。盛土を破壊した層位は外矩面上には確認されなかったことから、第1号曲輪の内側方向へ破壊した可能性がある。しかし、この破壊層が確認できなかったことから、後世の畑地の開発や耕作土などによって攪乱された結果と推察される。また、本土塁の構築方向上には大手郭の西側土塁が存在していることから、この土塁に関係する構造が考えられる。

**第2号土塁跡（第16～18図）**

**位置** 調査区北部のB3i9～C3b8区、標高17mほどの台地の平坦部に位置している。

**規模と構造** 東端部と西端部は調査区域外へ延びているため、長さは3.07mしか確認できなかった。B3i9区から東方向(N-110°-E)へ緩やかに彎曲して延びている。土塁の構築土や基盤は削平されていることから、外矩の高さ2.02～2.08mしか確認できなかった。土塁の断面形は不明であるが、外矩は有段を呈する急斜である。外矩面に人為堆積層が確認できたことから、最終的には構築土は破壊されている。削平された上面には柵列などの痕跡は確認できなかったが、外矩中腹に第6号溝、下部に第7号溝が確認でき、付帯施設と考えられる。

**覆土及び土塁の破壊層** 6層に分層でき、二時期の廃絶を確認した。第1層は自然堆積で第2層からの流出土である。第2層は第2号道路の構築後、第3～6層は第2号道路構築以前の破壊層である。

**土層解説**

- |       |                       |       |           |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黄褐色 | ロームブロック中量             | 5 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック多量             | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

**第6号溝** 第2号土塁の外矩中腹に沿って、掘り込まれている。確認できた規模は、長さ3.07m、上幅0.32～0.48m、下幅0.13～0.20mで、深さは17～20cmである。断面形はU字形で、底面は中央部から両端部へ緩斜している。覆土は2層に分層できる。いずれも自然堆積で、第2層が堆積した後、溝浚いか掘り直しがおこなわれ、その後第1層が堆積している。流入土を浚った痕跡と考えられることから、外矩面の排水溝と考えられる。また溝の上面が水平になっていることから、第2号土塁が破壊される以前に機能を停止したと考えられる。

土層解説

8 暗褐色 ロームブロック少量

9 暗褐色 ロームブロック多量

**第7号溝** 第2号土塁の外矩下部に沿って、掘り込まれている。確認できた規模は、長さ3.05 m上幅0.75～0.82 m、下幅0.06～0.17 m、深さは15～21cmである。断面形は緩やかなV字形で、底面の傾きは東から西へ緩斜している。覆土は単層で、自然堆積である。溝壁に沿って数条の稜が認められることから、複数回の流入土を浚った痕跡と考えられる。このことから排水溝と考えられる。出土遺物は磁器片2点（碗）で、16世紀の中国製の可能性がある。細片のため図示することができない。

土層解説

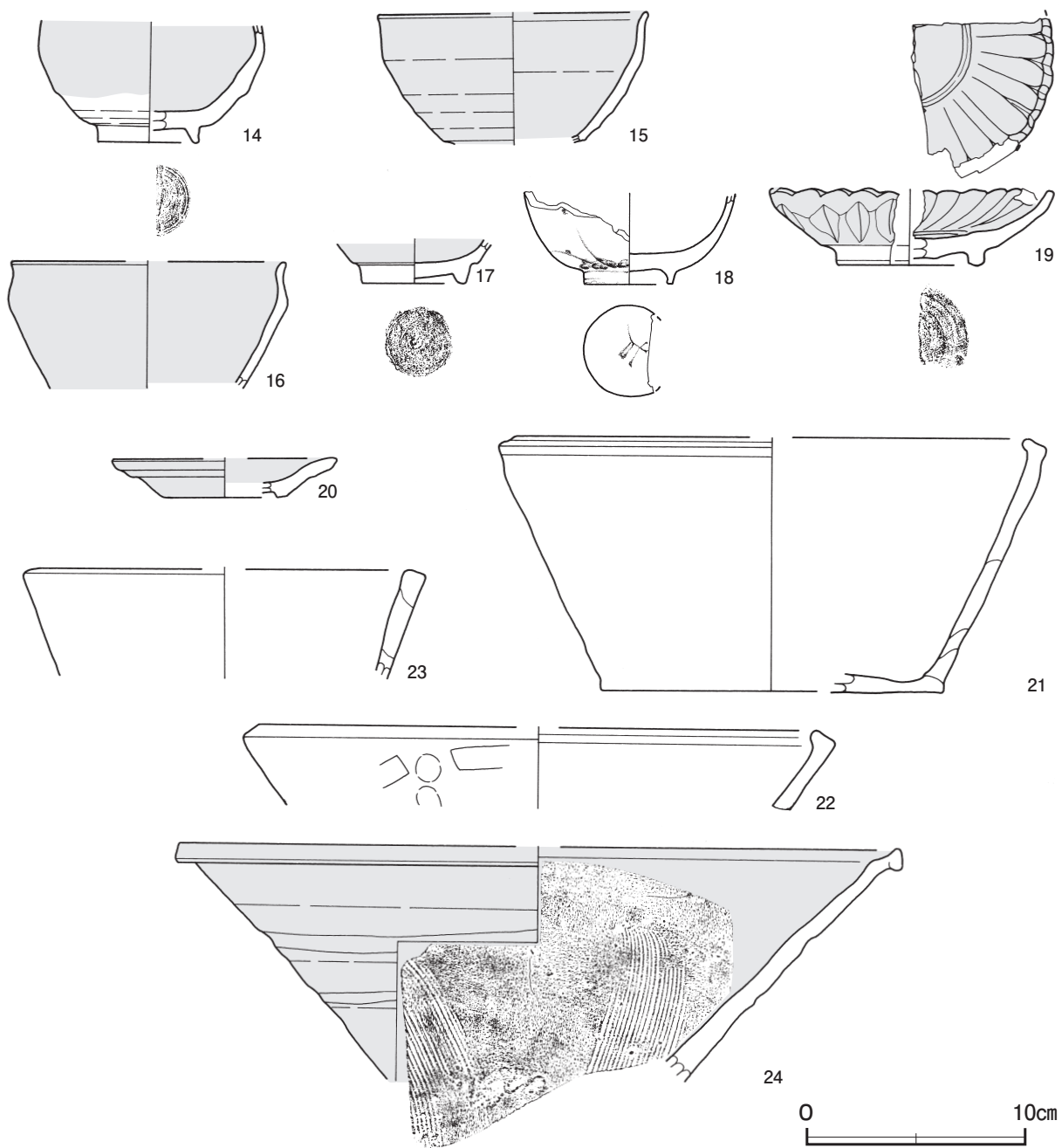
7 暗褐色 ロームブロック多量



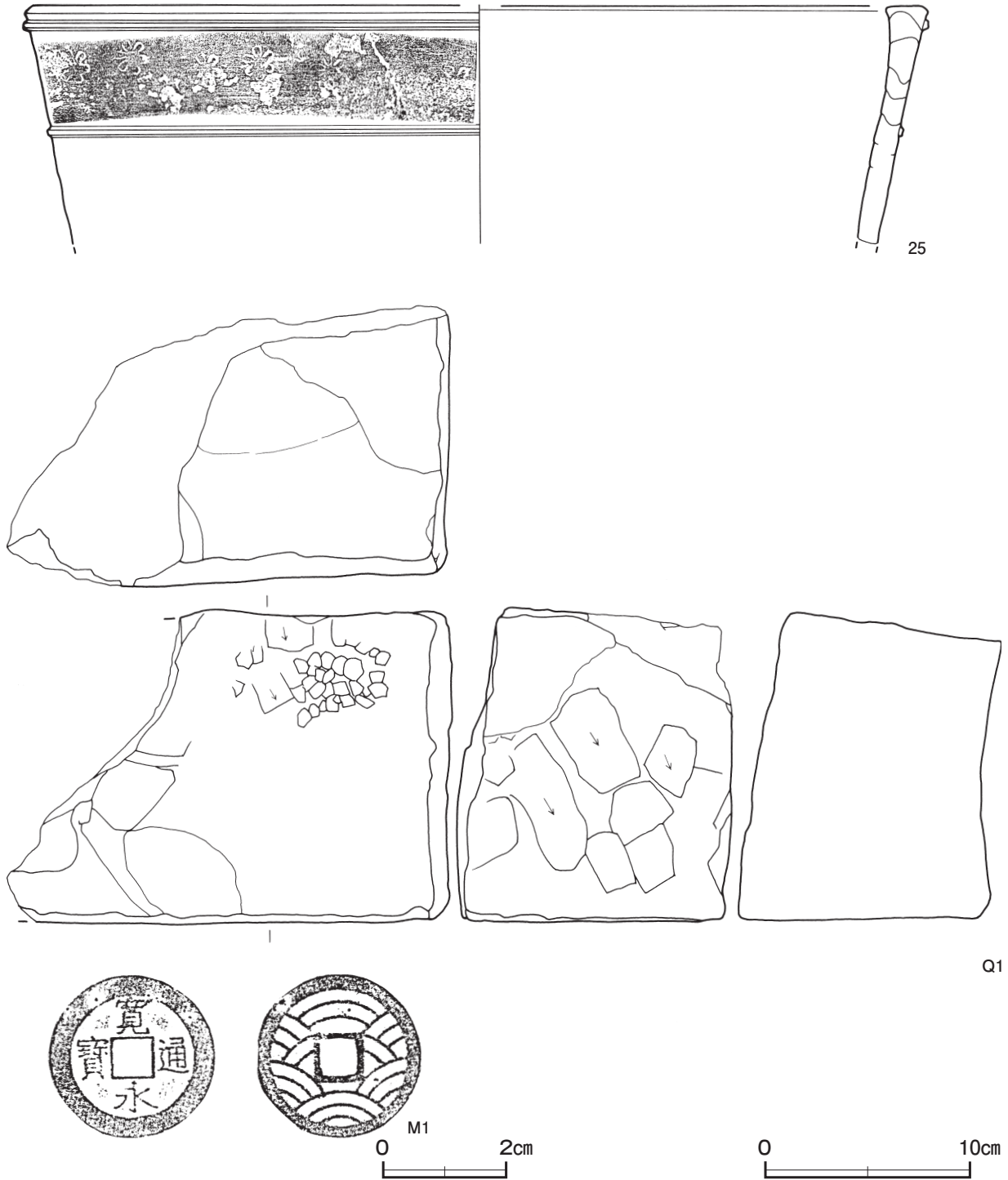
第16図 第2号土塁跡・第6・7号溝跡実測図

**遺物出土状況** 本跡の破壊に伴う遺物は、土師質土器片6点（皿1・甕1・鉢2・焙烙2）、瓦質土器片2点（鉢・火舎）、陶器片13点（碗6・皿2・甕3・土瓶1・急須1）、磁器片5点（碗2・皿1・瓶2）、石器・石製品2点（砥石・五輪塔）、銭貨1点、瓦片2点である。第2層から出土した14・18・20・22・23は16世紀から18世紀後半、第3～6層から出土した15・17・19・21・24・25は16世紀後半から17世紀前葉の所産である。ほかに、混入した縄文土器片40点（深鉢）、土師器片17点（甕）が出土している。

**所見** 本土塁の構築年代については不明であるが、土塁を破壊した時期が少なくとも二時期あるものと考えられる。出土遺物や第2号道路との重複関係から第Ⅰ期は17世紀前葉、第Ⅱ期は18世紀後半に考えられる。なお土塁の構築方向が、大手郭の北側に存在している平場の外縁に向かっていていることから、この平場に関わるものと考えられる。



第17図 第2号土塁跡出土遺物実測図（1）



第18図 第2号土塁跡出土遺物実測図(2)

第2号土塁跡出土遺物観察表(第17・18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
14	陶器	天目茶碗	-	(5.5)	[4.6]	精良	灰白	良好	ロクロ成形 部削りだし	鉄釉漬けがけ 瀬戸美濃系登窯第2段階	体部下部から高台 第2層	90% PL10 17世紀 後葉～18世紀中葉
15	陶器	天目茶碗	[12.2]	(6.0)	-	精良	淡黄	良好	ロクロ成形 3段階	鉄釉漬けがけ 瀬戸美濃系大窯第	第3～6層	15% PL10 16世紀後葉
16	陶器	天目茶碗	[12.4]	(5.8)	-	精良	浅黄橙	良好	ロクロ成形 1段階	鉄釉漬けがけ 瀬戸美濃系登窯第	第2層	10% PL10 17世紀前葉～後葉
17	陶器	天目茶碗	-	(2.0)	4.8	精良	淡黄	良好	ロクロ成形 底部打ち欠き	鉄釉漬けがけ 転用カ 瀬戸美濃系大窯第3段階	高台部削りだし 第3～6層	10% 16世紀後葉
18	磁器	丸碗	-	(4.2)	4.0	緻密	明オリーブ 灰	良好	ロクロ成形	外面具須草花文 波佐見系	第2層	40% PL10 18世紀後半

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
19	陶器	菊皿	[12.4]	3.5	[6.4]	精良	淡黄	良好	型打成形 灰釉漬けかけ 口縁部へラケズリ 外・内面ノミ削ぎ 瀬戸美濃系大窯第4段階	第3～6層	25% PL10 16世紀後半
20	陶器	皿	[10.2]	1.8	[5.8]	精良	浅黄	良好	ロクロ成形 灰釉漬けかけ 瀬戸美濃系大窯第4段階 カ	第2層	10% PL10 16世紀後半カ
21	土師質土器	捏鉢	[23.6]	11.6	[15.6]	長石・石英・ 雲母	にぶい橙	普通	輪積み ロクロナデ成形	第3～6層	10% PL6 16世紀
22	土師質土器	捏鉢	[25.6]	(3.7)	-	長石・雲母・ 赤色粒子	にぶい 黄褐	普通	輪積み ロクロナデ成形 指頭痕及び横ナデ残 存	第2層	10% PL10 16世紀
23	瓦質土器	捏鉢	[18.4]	(5.0)	-	長石・石英・ 小礫	暗灰黄	普通	輪積み ロクロナデ成形	第2層	10% PL6 16世紀
24	陶器	播鉢	[33.0]	(10.7)	-	精良	暗赤褐	良好	ロクロ成形 錆釉刷毛かけ 外面2条のケズリ 沈線 内面17条の櫛目の掃目 大窯第4段階	第3～6層	15% PL10 17世紀前葉
25	瓦質土器	火舎	[43.6]	(11.6)	-	長石・石英・ 雲母	黒褐	普通	輪積み ロクロナデ成形 外面帯状浮線及び沈 線花弁刻印	第3～6層	10% PL5 16世紀

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 1	五輪塔	15.2	(21.3)	13.5	(5445.0)	凝灰岩	縦方向のノミ痕	第2層	地輪

番号	器 種	径	孔幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 1	銭貨	3.32	0.63	0.14	4.36	真鍮	新寛永通寶 裏面21波文 四文銭	第2層	PL9 初鋳1868年

### 第1号竪穴遺構（第19図）

**位置** 調査区北部のC3d5区、標高18mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号竪穴遺構を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北西端部は主要地方道美浦栄線によって壊されているため、短軸は2.42mで、長軸は4.10mしか確認できなかった。第2号竪穴遺構の調査時に本跡が確認できたことから、土層断面部分以外の遺構形態は不明である。土層断面から推定できる平面形は隅丸長方形で、このことから長軸方向はN-70°-Eである。壁高は32～34cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦である。北部から東部にかけて硬化している。

**ピット** 3か所。覆土はP1で2層、P2で3層に分層でき、不規則な堆積状況から埋め戻されている。P2・P3の深さは32cm・17cmで、柱穴の可能性はある。P1は深さ30cmで、柱穴の可能性もあるが、性格不明である。

#### 土層解説

- |         |              |           |         |
|---------|--------------|-----------|---------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子微量      | 3 極 暗 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |           |         |

**覆土** 6層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

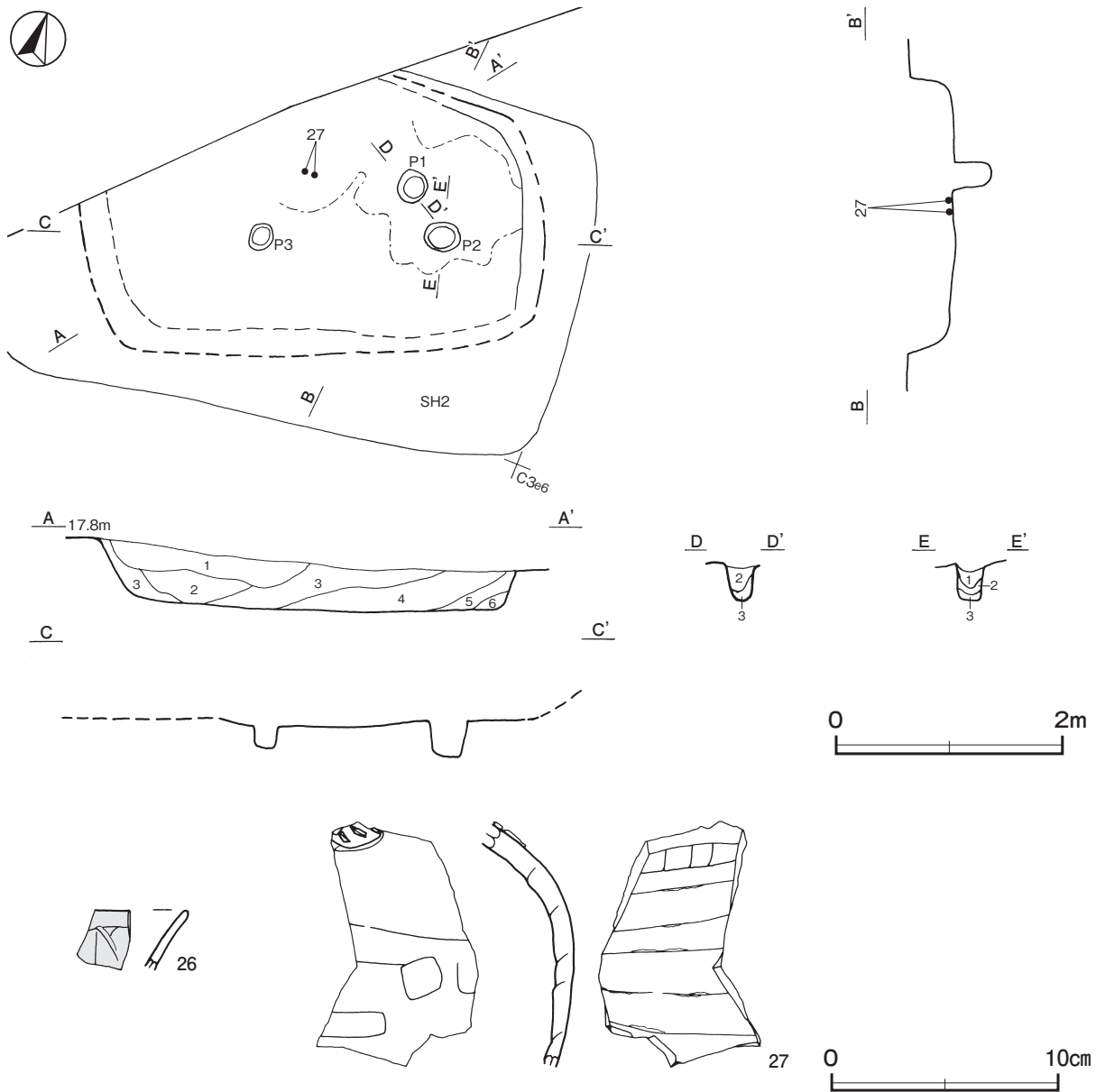
#### 土層解説

- |         |                       |         |           |
|---------|-----------------------|---------|-----------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒 色   | ロームブロック微量 |
| 3 黒 色   | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒 褐 色 | ロームブロック多量 |

**遺物出土状況** 覆土中から磁器片1点（碗）、陶器片1点（有耳壺）が出土している。ほかに、混入した縄文土器片48点（深鉢）、弥生土器片4点（壺）、土師器片62点（甕）も出土している。

**所見** 出土遺物は14世紀前半までの所産である。磁器片は竜泉窯の青磁碗であり、陶器片は常滑産の三耳壺、もしくは四耳壺と考えられる。威信財として伝世する製品であることや当該期の遺物の出土量が少ないことから、本跡の廃絶に伴う混入の可能性が考えられる。このことから廃絶時期は、14世紀前半以降から当城が廃城となるまでの年代が考えられる。柱穴の可能性のあるピットが存在していることや炉跡が確認できなかったことから、倉庫の可能性はある。





第19図 第1号竪穴遺構・出土遺物実測図

第1号竪穴遺構出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	青磁	碗	-	(2.6)	-	緻密	黄灰	良好	外面片切彫の鎬連弁文 竜泉窯系碗B-1類	覆土中	5% PL10 14世紀前半
27	陶器	有耳壺	-	(10.8)	-	精良	褐灰	良好	輪積み ロクロナデ成形 外面自然釉付着 外耳部貼り付け痕 常滑第2段階	覆土中	5% PL10 13世紀後半

### 第1号溝跡（第20図）

**位置** 調査区北部のC3e3～C3g3区、標高18mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号竪穴遺構を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北端部は主要地方道美浦栄線に、南端部は民家の私道によって壊されているいるため、長さ5.20mしか確認できなかった。上幅0.73～0.84m、下幅0.40～0.55m、深さ16～38cmで、断面形は逆台形である。走行方向はN-28°-Eである。底面はほぼ平坦で、南方向へ緩斜している。



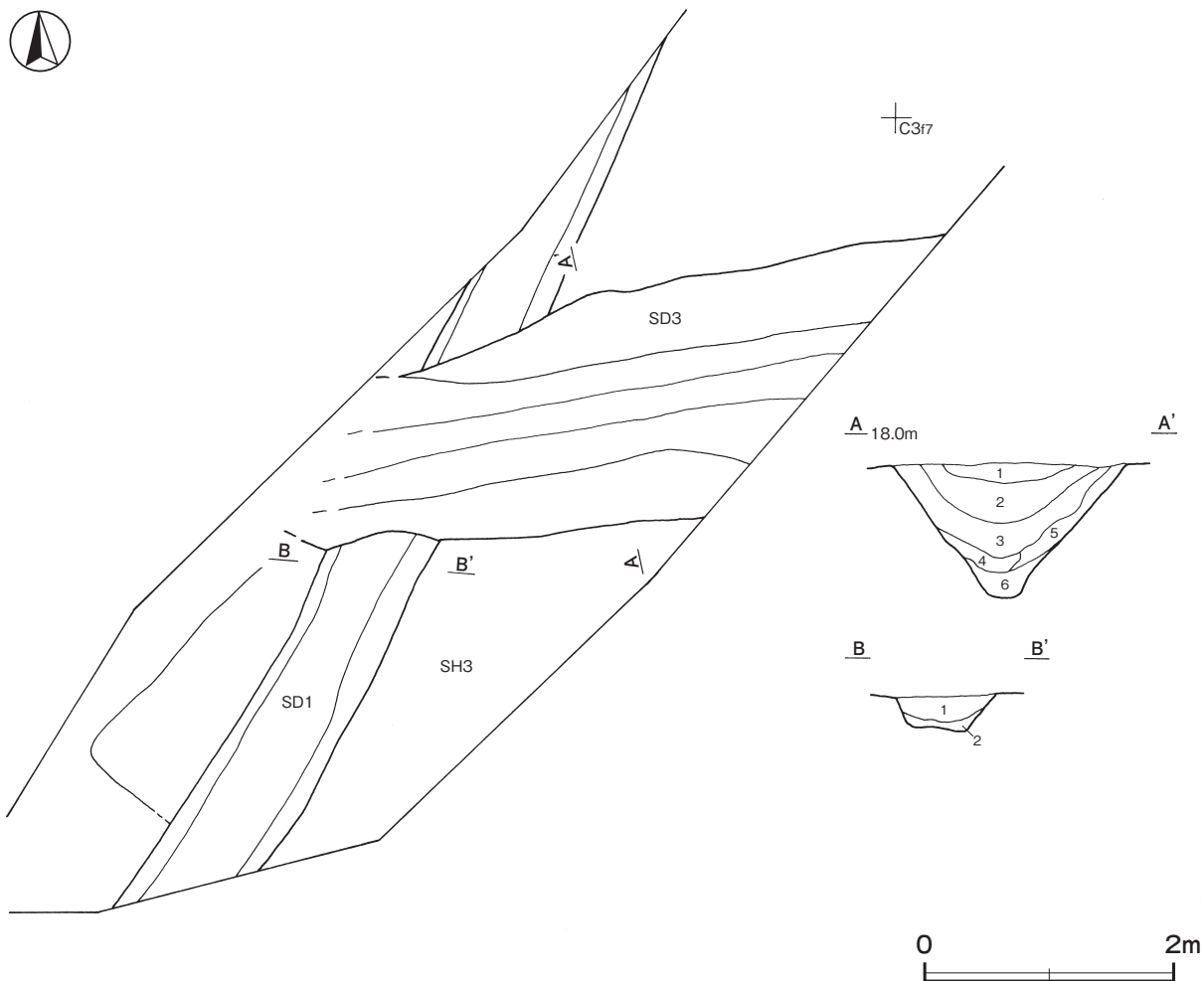
**覆土** 2層に分層できる。いずれも自然堆積である。第2層は壁面の浸食土を含んでいる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 伴う遺物は出土しなかった。混入した縄文土器片 20 点（深鉢），弥生土器片 16 点（壺），土師器片 4 点（坏）が出土した。このうち弥生土器片については，第3号竪穴遺構からの混入と考えられる。

**所見** 遺構の年代を特定する遺物は出土しなかったが，第3号溝跡と覆土が似ていることから，戦国時代の溝と考えられる。曲輪内の排水溝や小区画の可能性はあるが，性格不明である。



第20図 第1・3号溝跡実測図

**第3号溝跡**（第20・21図）

**位置** 調査区北部の C3f3～C3f5 区，標高 18 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号竪穴遺構，第1号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 東端部は調査区域外へ延び，西端部は主要地方道美浦栄線によって壊されているため，長さ 3.68 m しか確認できなかった。上幅 1.73～1.89 m，下幅 0.24～0.30 m，深さ 1.04 m で，断面形は V 字形である。走行方向は N - 81° - E である。底面はほぼ平坦である。

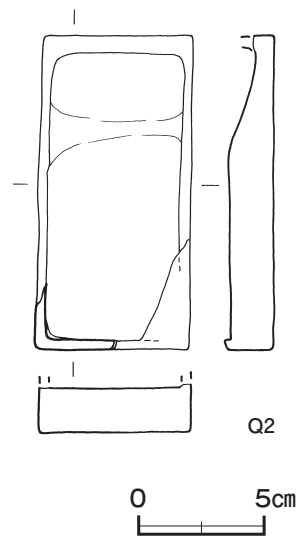
**覆土** 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況から，いずれも自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土遺物は石製品1点(硯)である。混入した縄文土器片20点(深鉢), 弥生土器片17点(壺), 土師器片4点(坏)も出土している。このうち弥生土器片1点が, 第3号竪穴遺構の土器片と接合している。

**所見** 出土遺物からは年代決定ができなかった。木原城縄張復元図(第5図)には, 大手郭の南西部に接している方形の小区画が存在している。この区画にほぼ一致することから, 区画に関わる溝と考えられる。



第21図 第3号溝跡出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	硯	12.5	6.2	1.9	(303.6)	粘板岩	陸部やや摩耗 硯陰に挟りなし	覆土中	95% PL9

**第2号土坑 (第22図)**

**位置** 調査区北部のC3c7区, 標高18mほどの台地平坦部に位置している。

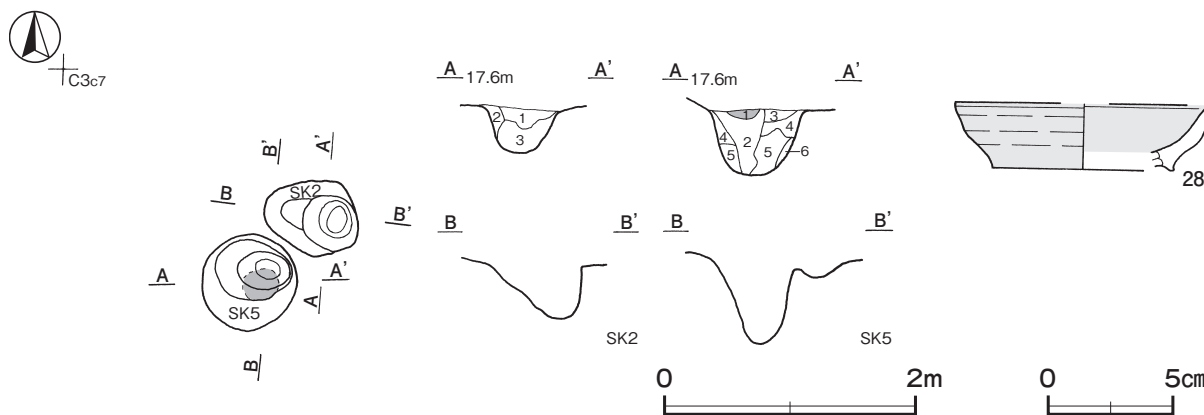
**規模と形状** 長径0.78m, 短径0.60mの楕円形で, 長径軸方向はN-60°-Wである。深さは40cmで, 底面は皿状である。壁はほぼ直立しているが, 西壁は緩斜している。

**覆土** 3層に分層できる。凹凸の激しい堆積状況から, いずれも人為堆積である。

**土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

**所見** 西壁のみが緩斜していることから, 柱を抜き取った痕跡と考えられ, 柱穴の可能性はある。また近くに第5号土坑が存在していることから, 関連性が考えられる。



第22図 第2・5号土坑・第5号土坑出土遺物実測図

### 第5号土坑（第22図）

**位置** 調査区北部のC3c7区，標高18mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.78m，短径0.76mの円形である。深さは60cmで，底面は皿状である。壁はほぼ直立している。

**覆土** 6層に分層できる。第1・2層は柱の抜き取り後に埋め戻されており，第1層には粘土が充填されていた。第3～6層は掘方への埋土である。

#### 土層解説

1 灰黄色 粘土ブロック多量，焼土ブロック中量	4 褐色 ロームブロック多量
2 黒褐色 ロームブロック少量	5 暗褐色 ロームブロック多量
3 暗褐色 ロームブロック中量	6 褐色 灰 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 陶器片1点（皿）が，第1・2層から出土している。

**所見** 出土遺物から16世紀末葉から17世紀前葉の廃絶と考えられる。抜き取られた柱痕部に粘土が充填されていたが，意図は不明である。柱痕が確認できたことから柱穴と判断され，第2号土坑との関連性が考えられる。

第5号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
28	陶器	丸皿	[10.2]	2.6	[7.2]	精良	灰黄	良好	ロクロ成形 外・内面灰釉 瀬戸美濃系大窯第4段階	第1・2層	10% PL10 16世紀末～17世紀前葉

表2 戦国時代の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	C3e3～C3g3	N-28°-E	直線状	[5.20]	0.73～0.84	0.40～0.55	16～38	台形	外傾	自然		SH3→本跡→SD3
3	C3f3～C3f5	N-81°-E	直線状	[3.68]	1.73～1.89	0.24～0.30	104	V字形	外傾	自然	硯	SH3→SD1→本跡

表3 戦国時代の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	C3c7	N-60°-W	楕円形	0.78×0.60	40	皿状	直立・緩斜	人為		
5	C3c7	—	円形	0.78×0.76	60	皿状	直立	人為	陶器皿	

### (2) 第2号曲輪跡（第23図）

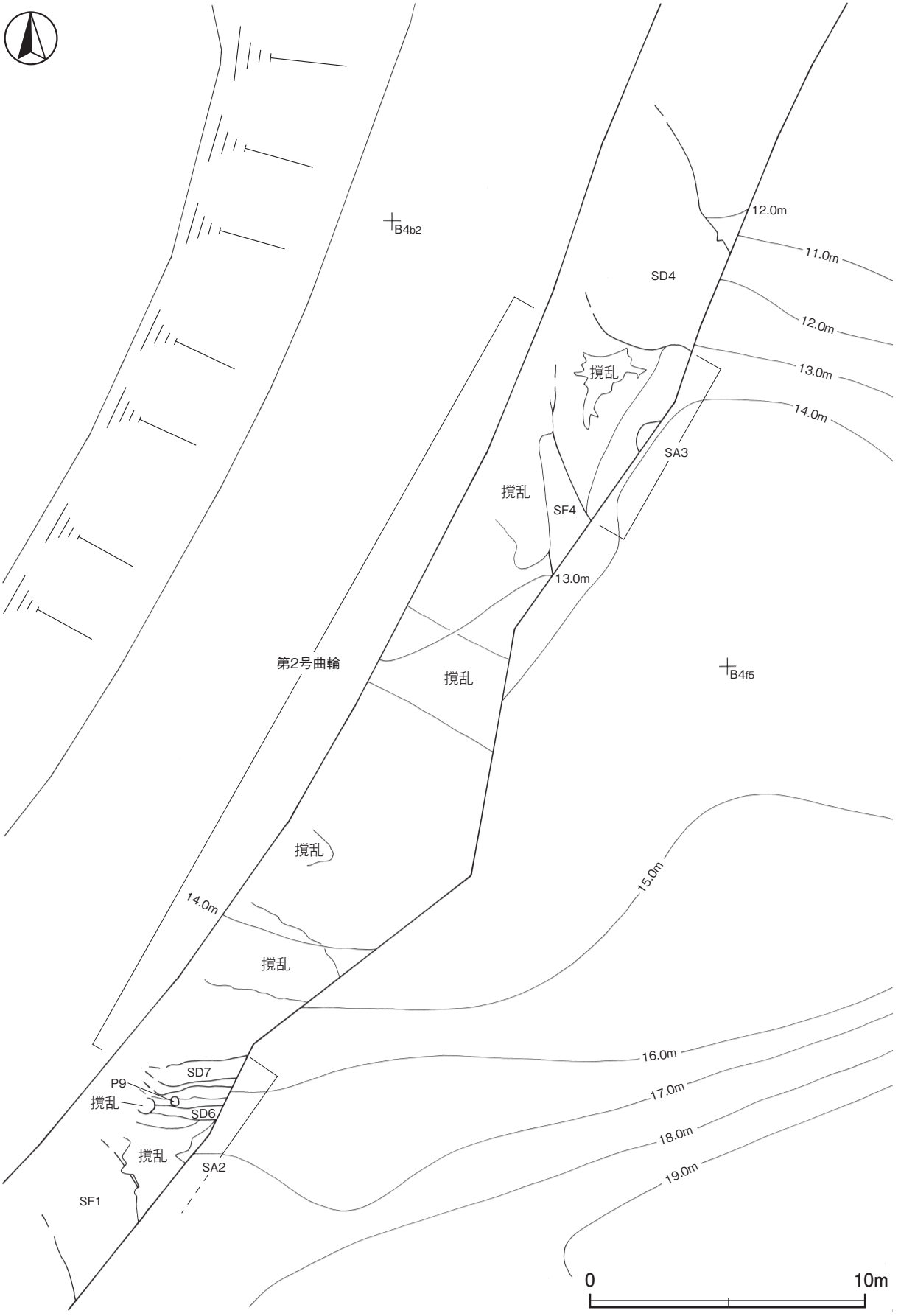
**位置** 調査区中央部のB4a2～B3i0区，標高13～14mほどの台地の傾斜部に位置している。

**規模と構造** 木原城縄張図(第5図)によると，本曲輪跡は，三の丸跡と大手郭跡に挟まれている。長軸約36m，短軸約14mで，扇状を呈しており，谷津地形を閉鎖するように構築されている。長軸方向はN-54°-Eである。

今回の発掘調査区域の範囲は，長軸25.6m，短軸6.5mである。第1号曲輪とは第2号土塁によって遮断され，第3号曲輪とは第3号土塁や第4号堀によって区画されている。遺構確認面は北傾している。

発掘調査で確認できた付帯施設は第3号土塁跡のみであるが，第4号堀跡については，第3号土塁の構築や廃絶に関わることから，本項で扱うこととした。

**所見** 出土遺物からの年代決定はできないが，曲輪の構築にあたっては，第3号土塁の構築と関連性が考えられる。



第 23 図 第 2 号曲輪跡実測図

### 第3号土塁跡（第24図）

**位置** 調査区域中央部のB4c4～B4d4区、標高14mほどの台地傾斜部に位置している。

**規模と構造** 西端部は攪乱を受けているため、長さは0.92mしか確認できなかった。B2c4区から南東方向（N-96°-E）へほぼ直線的に延びている。破壊された痕跡があることから、上幅1.32～1.60m、下幅6.14～7.12m、外矩の高さ1.73～1.84m、内矩の高さ0.95～1.04mで、盛土の高さは地山から1.64mしか確認できなかった。構築土の残存状態は比較的良好で、断面形は台形と推定できる。土塁の破壊層が外矩面や第4号堀跡に入り込んでいることから、最終的には構築土の一部が破壊されたと考えられる。また、構築土の上面には柵列などの痕跡は確認できなかったが、構築土層中に柵列の可能性があるピットが確認された。このことから土塁の構築は、二時期あるものと考えられる。

**構築土** 構築土13層とピットの覆土1層に分層でき、構築は二時期あるものと考えられる。第1～8層は、第Ⅱ期の構築土層である。第8層は土塁の基盤層で、黒色土ブロックを含んでいることから、第4号堀を掘削した際に排出された堆積土や旧表土が混入したものと考えられる。第10～14層は第Ⅰ期の構築土層である。第9層は杭などの痕跡と考えられることから、第Ⅰ期の土塁には柵列が構築されていたと想定できる。第14層は粘土を主体としており、基本層序第10層を削平した排土を使用して第Ⅰ期の土塁の基盤を構築したと考えられる。

土塁の破壊層については、第4号堀を埋め戻していることから、第4号堀跡にまとめた。

#### 土層解説

1	にぶ黄褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ロームブロック少量	10	黄灰色	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量
3	にぶ黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	明黄褐色	ロームブロック多量
4	暗褐色	ロームブロック中量	12	黄褐色	ロームブロック中量
5	にぶ黄褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6	黄褐色	ロームブロック多量	14	褐灰色	砂質粘土・酸化鉄多量
7	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量			
8	明黄褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック中量、焼土粒子微量			

**遺物出土状況** 構築土から確認できた遺物は、土師質土器片1点（皿）である。第Ⅱ期の構築土第6層中から出土している。ほかに、土塁構築時に混入した縄文土器片24点（深鉢）、土師器片19点（坏4・埴3・器台1・甕11）も出土している。

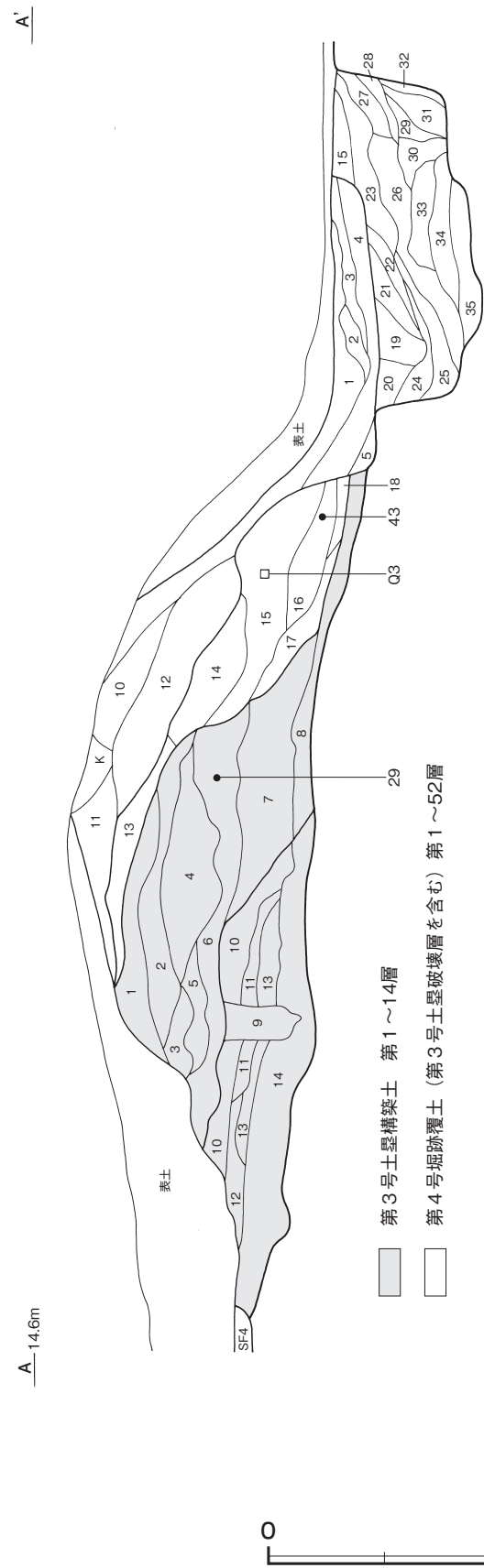
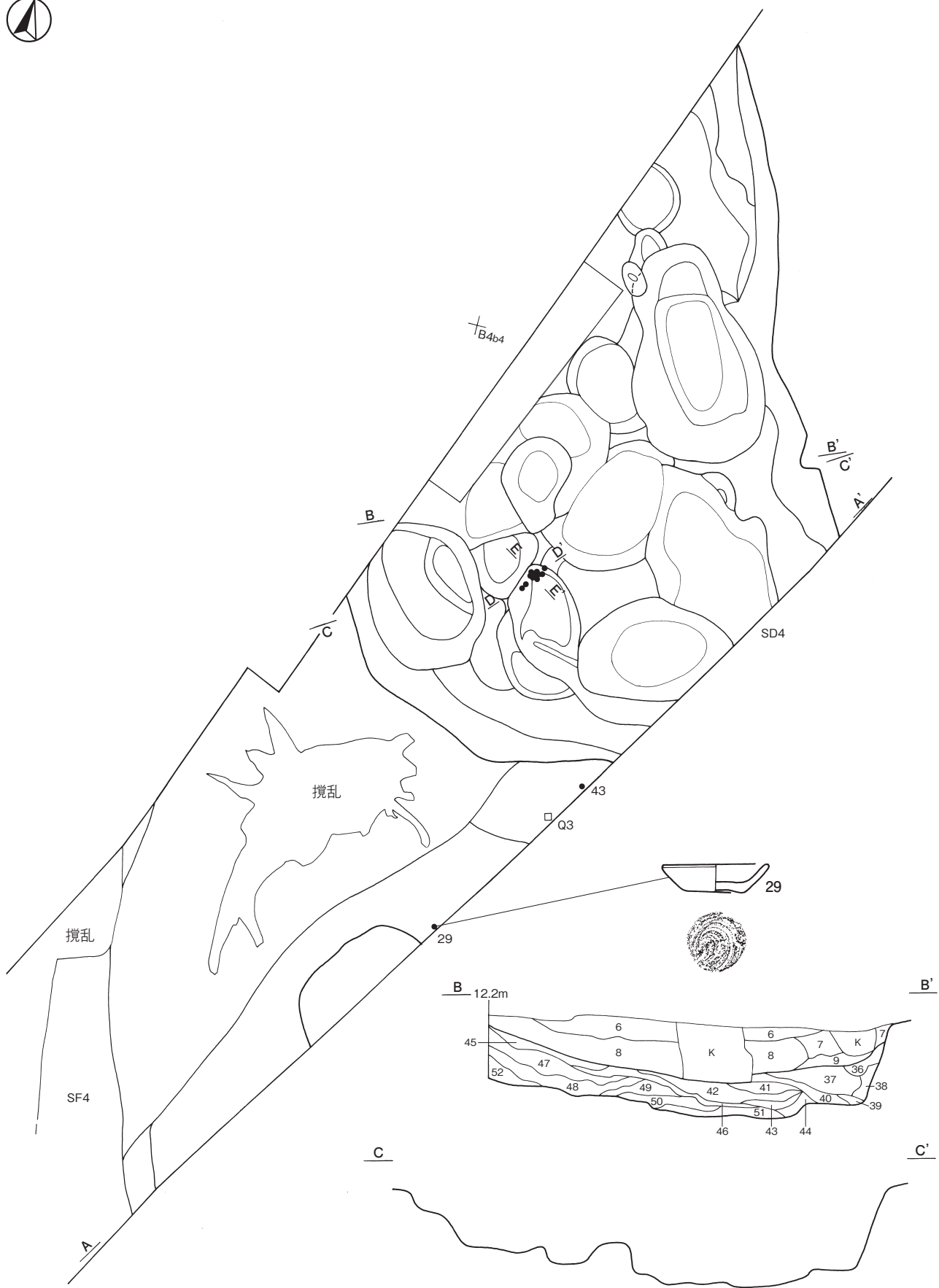
**所見** 第Ⅰ期の土塁の構築にあたっては、第2号曲輪が傾斜部に位置していることから基盤（第14層）を極力平坦に構築した後、盛土をおこなっている。この基盤層の直下は基本層序第10層に相当し、第2号曲輪の構築時に削平した排土を使用していると考えられることから、第2号曲輪と本跡の構築は同時期と考えられる。この構築法は第Ⅱ期の土塁の構築にも用いられており、第4号堀の掘削土を基盤（第16層）とした後に、盛土をしている。

構築年代は、出土遺物から第Ⅱ期の土塁が16世紀後半に比定でき、第Ⅰ期は出土遺物が無かったが、16世紀後半以前の可能性がある。

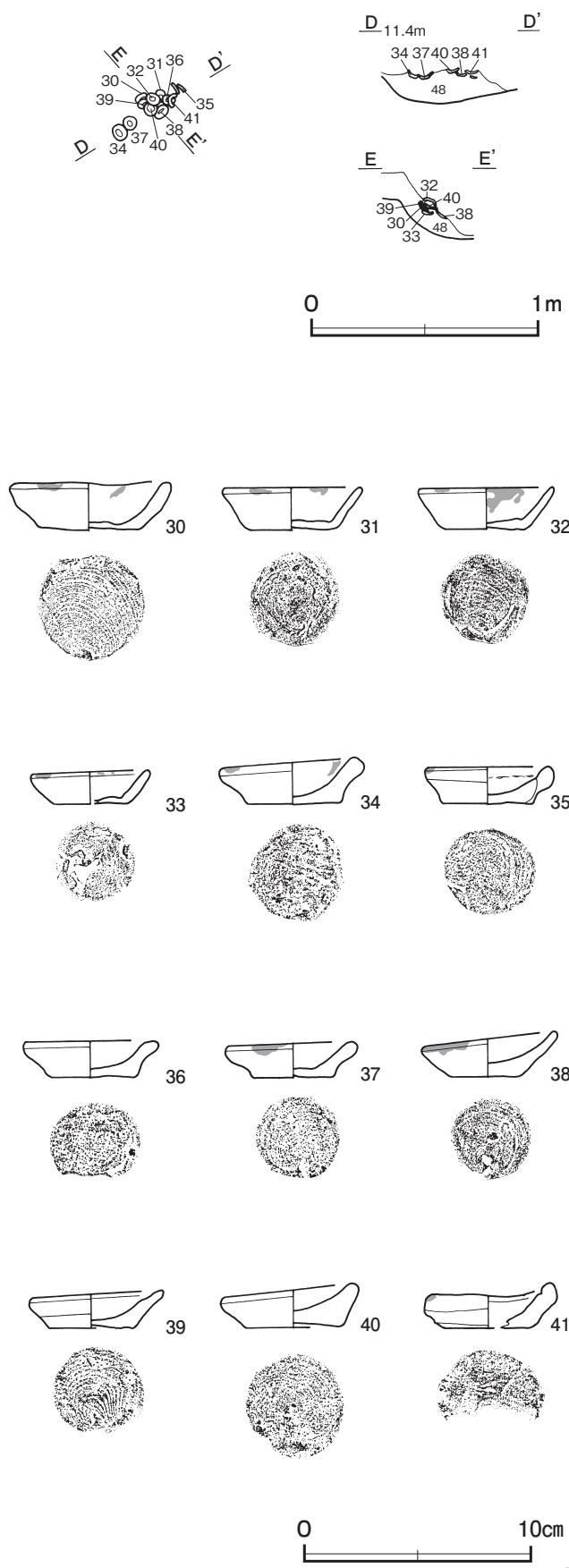
本跡は三の丸と大手郭に挟まれた谷津部の遮断を目的に構築されたと考えられる。また土塁の構築方向は、大手郭の北側に存在している平場の北部縁辺に向かっている。

### 第3号土塁跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	土師質土器	小皿	5.5	1.6	3.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第6層中	60% 16世紀後半

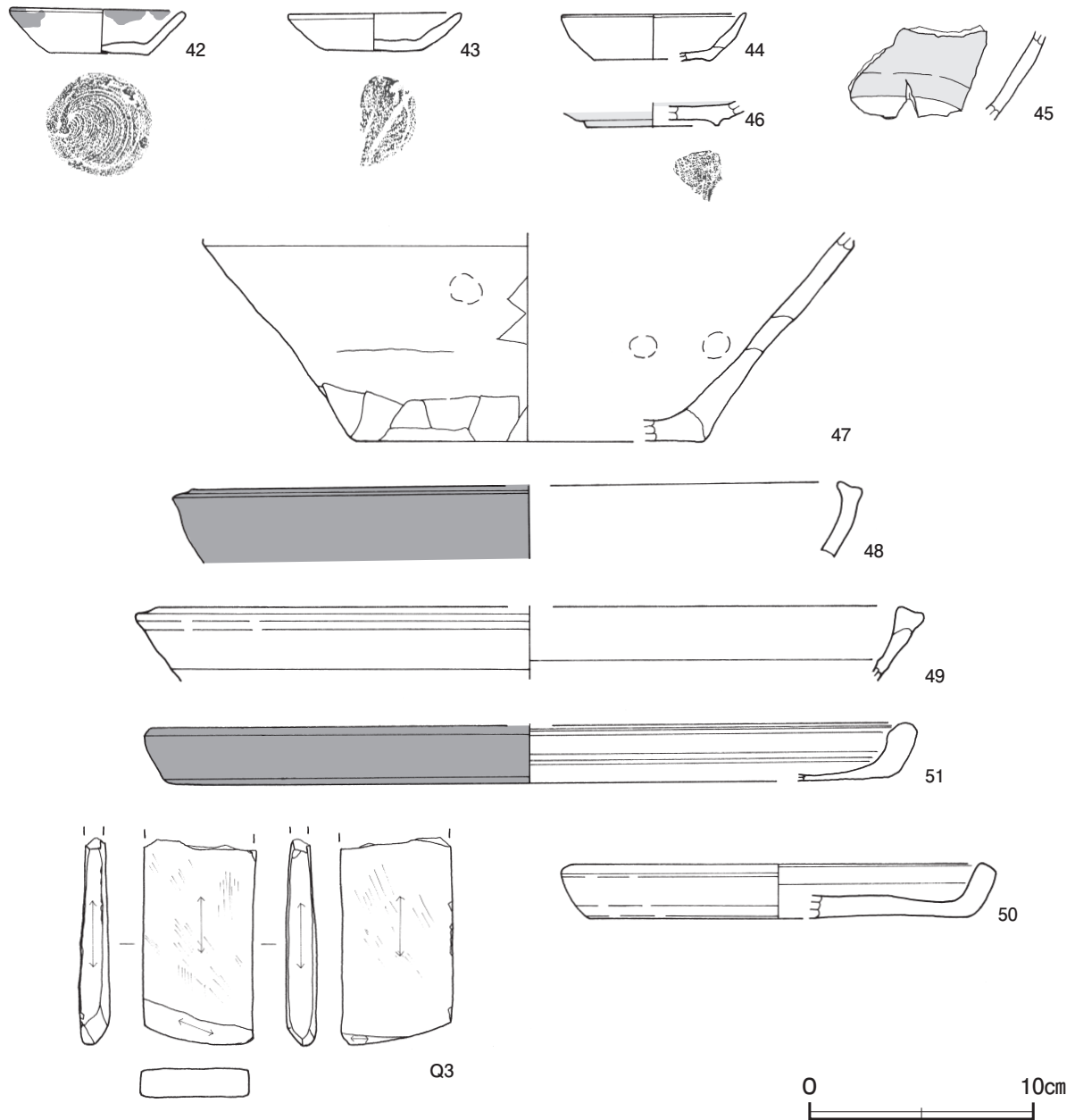


■ 第3号土壘構築土 第1~14層  
 □ 第4号堀跡覆土 (第3号土壘破壊層を含む) 第1~52層



第24図 第3号土壘跡・第4号堀跡・出土遺物実測図





第 25 図 第 4 号堀跡出土遺物実測図

#### 第 4 号堀跡 (第 24・25 図)

**位置** 調査区中央部の B4a4 ~ B4c4 区, 標高 12 m ほどの台地傾斜部に位置している。

**重複関係** 第 3 号土塁の破壊層によって埋め戻されている。

**規模と構造** 東端部と西端部は調査区域外へ延びているため, 長さは 4.10 m しか確認できなかった。B4a4 区から東方向 (N - 133° - E) へ緩やかに彎曲して延びている。上幅 3.61 ~ 7.48m, 下幅 3.10 ~ 5.80m, 第 3 号土塁の基盤から底面までの深さは 0.92 ~ 1.30m である。断面形は概して箱状で, 堀底には土坑状の窪みが存在しており, 凹凸が激しく起伏に富んでいる。この窪みの掘方は規模や配置が不規則で, 堀底からの深さは 20 ~ 90cm である。

**覆土** 52 層に分層できる。第 1 ~ 50 層は第 3 号土塁の破壊層を含めた人為堆積, 第 51・52 層は自然堆積である。人為堆積層は, 大きく二時期に分けられる。第 1 ~ 12 層は第 II 期の堆積で, 第 I 期の堆積層の一部を壊して

埋め戻している。第11・12層は粘土ブロックが含まれており、第1～10層とは異なる土質であることから、大手郭北側の平場からの崩土が含まれている可能性がある。第13～50層は第I期の堆積層である。第13～18層及び第39～50層は第3号土塁から埋め戻しており、第19～38層は第3号曲輪から埋め戻している。このことから、第3号土塁の破壊による埋め戻しは西から東方向へ、第3号曲輪からの埋め戻しは東から西方向へおこなわれていると考えられる。この埋め戻し方のため、重複関係が生じているような堆積をしているが、時期差はないものと考えられる。このことは同時期の遺物である30～41と43の出土位置からもうかがえる。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	26 明黄褐色	ロームブロック多量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	27 にぶい黄褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量	28 にぶい灰黄褐色	ロームブロック多量
4 黒褐色	ロームブロック中量	29 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
5 黒褐色	ロームブロック微量	30 灰黄褐色	ロームブロック多量
6 黒色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	31 にぶい黄褐色	ローム粒子多量
7 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量	32 にぶい黄褐色	ローム粒子少量
8 黄褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・黒色土ブロック少量	33 にぶい黄褐色	ロームブロック極多量
9 黒褐色	ロームブロック多量	34 褐灰色	ロームブロック微量
10 明黄褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量	35 にぶい黄褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック中量
11 黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量	36 褐灰色	ロームブロック多量
12 黄褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量、炭化粒子微量	37 明黄褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
13 にぶい黄褐色	ロームブロック多量	38 黄褐色	ロームブロック多量
14 にぶい褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック微量	39 黒色	ロームブロック少量
15 褐色	ロームブロック中量	40 明黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
16 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	41 明黄褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量
17 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	42 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
18 黄褐色	ローム粒子多量	43 黒色	ロームブロック微量
19 暗褐色	ロームブロック中量	44 浅黄橙色	ロームブロック多量
20 暗褐色	ロームブロック少量	45 黒色	ロームブロック多量
21 明褐灰色	ロームブロック多量	46 黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
22 暗褐色	ロームブロック多量	47 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
23 にぶい褐色	ロームブロック少量	48 黒褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック中量
24 暗褐色	ローム粒子微量	49 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
25 褐灰色	ロームブロック中量	50 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
		51 黒褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量
		52 黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量

**遺物出土状況** 覆土中から土師質土器片29点(皿21・鍋6・焙烙2)、瓦質土器片1点(鉢)、陶器片10点(碗1・皿1・鉢5・鍋2・土瓶1)、磁器片9点(碗6・皿2・徳利1)、石器1点(砥石)、瓦片3点などが出土している。第I期の廃絶に伴う遺物は30～44、46、Q3である。30～41は第48層、43は第16層、Q3は第15層から出土している。第II期の廃絶に伴う遺物は48～50である。48・49は第I期の人為堆積層からの混入と考えられる。ほかに、混入した縄文土器片18点(深鉢)、土師器片1点(坏)も出土している。

**所見** 出土遺物から廃絶時期は第I期が17世紀前葉、第II期が19世紀代と考えられる。構築年代は、第3号土塁第II期の構築層との関連性から、16世紀後半と考えられる。また掘底で確認できた土坑状の窪みは、攻め手が堀を渡河する際に、その進入速度を低減させる構造と考えられている。このことから障子堀の系譜を引く堀と考えられる。

第4号堀跡出土遺物観察表(第24・25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	土師質土器	小皿	6.8	2.1	4.7	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	100% PL5 16世紀後半
31	土師質土器	小皿	6.0	1.9	4.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	100% PL5 16世紀後半
32	土師質土器	小皿	5.8	1.9	3.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	100% PL5 16世紀後半
33	土師質土器	小皿	5.0	1.4	3.0	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	90% PL5 16世紀後半

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師質土器	小皿	5.7	1.9	4.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	100% PL5 16世紀後半
35	土師質土器	小皿	5.4	1.6	4.0	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	90% PL5 16世紀後半
36	土師質土器	小皿	5.8	1.6	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第48層	80% PL5 16世紀後半
37	土師質土器	小皿	5.5	1.6	3.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	100% PL5 16世紀後半
38	土師質土器	小皿	5.8	2.0	3.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第48層	95% PL5 16世紀後半
39	土師質土器	小皿	6.7	1.6	3.7	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第48層	90% PL5 16世紀後半
40	土師質土器	小皿	5.8	2.0	4.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第48層	90% PL5 16世紀後半
41	土師質土器	小皿	5.3	1.5	[4.5]	長石・石英・雲母	橙	普通	粘土紐巻き付け 油煙付着 ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第48層	55% PL5 16世紀後半
42	土師質土器	小皿	7.6	2.0	4.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第15層中	100% PL5 16世紀後半
43	土師質土器	小皿	7.5	1.7	4.0	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第I期層中	55% PL5 16世紀後半
44	土師質土器	小皿	[8.2]	2.1	[5.4]	長石・石英	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第I期層中	20% PL5 16世紀後半
45	陶器	天目茶碗	-	(3.9)	-	精良	褐灰	良好	ロクロ成形 鉄釉漬けがけ 瀬戸美濃系	覆土中	5%
46	陶器	皿	-	(1.1)	[6.0]	精良	灰白	良好	ロクロ成形 長石釉 瀬戸美濃系 志野焼	第I期層中	5% 16世紀末 ~17世紀前葉
47	陶器	捏鉢	-	(9.2)	[15.4]	精良	灰褐	良好	輪積み ロクロナデ成形 体部下端ヘラケズリ 指頭痕及び斜位のヘラナデ残存 常滑産	覆土中	10% PL10
48	土師質土器	鍋	[28.8]	(3.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	輪積み ロクロナデ成形	第II期層中	10% PL5 16世紀代
49	土師質土器	鍋	[33.2]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	輪積み ロクロナデ成形	第II期層中	10% PL5 16世紀代
50	土師質土器	焙烙	[18.2]	2.4	[16.8]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 見込み部中央部に円形の煤付着	第II期層中	40% PL6 17世紀代
51	土師質土器	焙烙	[34.0]	2.6	[31.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ成形	第II期層中	10% PL5 19世紀代

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	(9.2)	5.0	1.4	(102.9)	粘板岩	砥面6面	第15層中	PL9

### (3) 第3号曲輪跡 (第26図)

**位置** 調査区北東部の A4h5 ~ B4b5 区、標高 10 ~ 11 m ほどの台地縁辺の傾斜部に位置している。

**規模と構造** 木原城縄張復元図 (第5図) には、本曲輪跡は描かれておらず、今回の調査によって確認できた曲輪である。規模は不明であるが、三の丸の台地と大手郭の台地の外縁に沿って構築されていることから、帯状を呈する曲輪と推定できる。長軸方向は N - 38° - W である。

今回の発掘調査区域は、長軸 14.2 m、短軸 8.9 m である。第2号曲輪とは第3号土塁と第4号堀によって遮断され、城外とは第4号切岸や第5号堀によって区画されている。遺構確認面は北傾している。北部では整地層が確認できたが、中央部から南部までは上面から攪乱を受けていることから、整地層の範囲は明確にはできなかった。この整地層は暗褐色土であり、本曲輪の構築時の削平土、もしくは第5号堀の掘削土を使用したと考えられる。

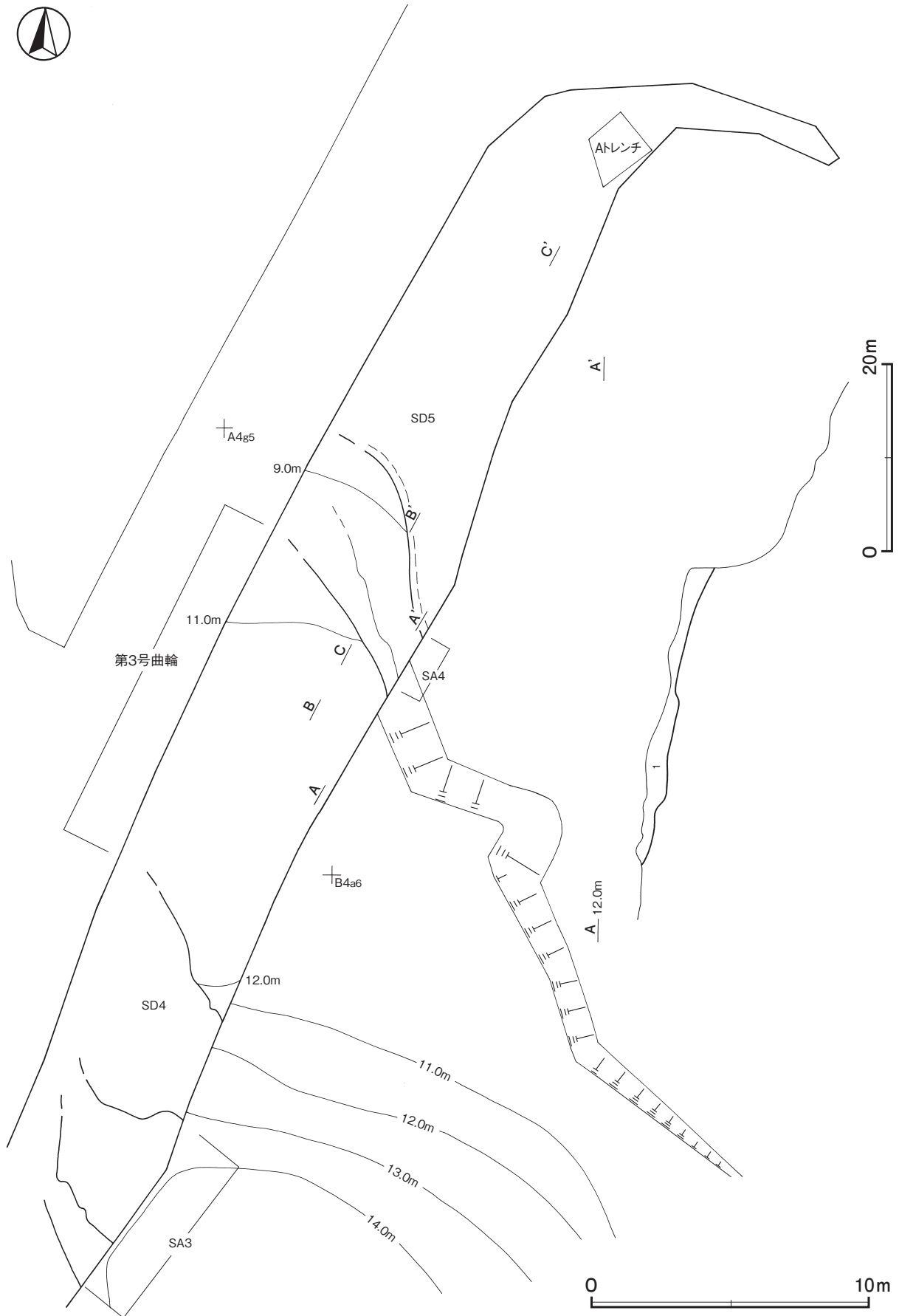
発掘調査で確認できた本曲輪の付帯施設は第4号切岸のみであるが、第5号堀については第4号切岸との関連性から、本項で扱うこととした。

**整地層** 単一層で、築城時の整地と考えられる。攪乱のため、他の整地層の存在については、不明である。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

**所見** 出土遺物が確認できなかったことから構築年代は、不明である。木原城縄張復元図 (第5図) には、台地平坦部に構築されている本丸跡と二の丸を取り囲んだ西側の低地部に「きぜ郭」が存在している。本跡も台地部に位置している三の丸や大手郭の麓の低地部に構築されていることから、きぜ曲輪と同様の性格をもつ曲輪と考えられる。



第26図 第3号曲輪跡実測図



#### 第4号切岸跡（第26・27図）

**位置** 調査区北東部の A4g5～A4i6区，標高10mほどの台地端部から低地に向かう傾斜部に位置している。

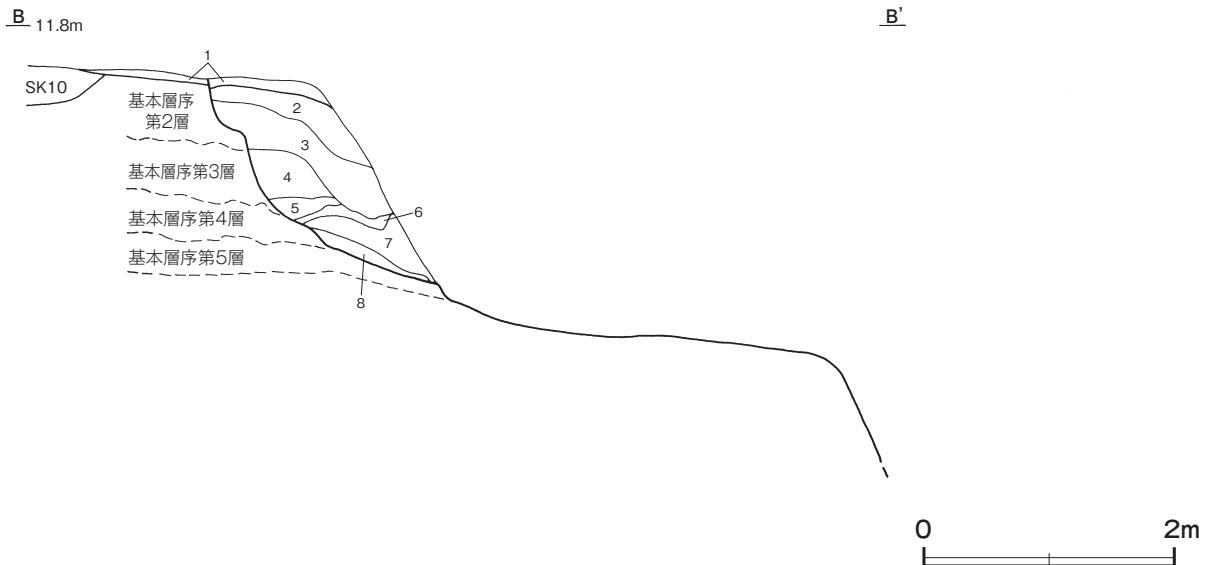
**規模と構造** 北西端と南東端は調査区域外へ延びているため，長さは3.14mしか確認できなかった。A2g5区から南東方向（N-149°-E）へ彎曲して延びている。外矩の中腹には犬走りと考えられる平場を削り出し，さらに第5号堀を掘削している。断面形は段状を呈している。外矩中腹の平場の幅は2.10～3.14m，平場から上面までの高さは1.67mで，第5号堀から平場までの高さは0.72mしか確認できなかった。切岸の上面には整地層が残存しているが，土塁の構築層は確認できなかった。このことから土塁の存在については，不明である。

**層位** 第3号曲輪の整地層（第1層）下に，7層（第2～8層）を確認した。いずれも基本層序の自然堆積層が乱れた層位であり，地滑りの痕跡と推察できる。

##### 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量	5 褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ローム粒子多量，炭化物少量，焼土粒子微量	6 黒色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 明黄褐色	ロームブロック少量	7 褐色	ロームブロック多量
4 黒褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

**所見** 出土遺物が確認できなかったことから，構築年代は不明である。また調査区域外の東側には切土による段差が存在していることから，この切土へ継続していると考えられる。



第27図 第4号切岸跡実測図

#### 第5号堀跡（第26・28・29図）

**位置** 調査区東北部の A4c8～A4h7区，標高9mほどの低地部に位置している。

**規模と構造** 北西端部と南東端部は調査区域外へ延びているため，長さは2.19mしか確認できなかった。A2c8区から南東方向（N-137°-E）へ緩やかに彎曲して延びている。堀幅を確認するため，Aトレンチを設定して調査をおこなったが，堀の北壁は確認できず，堀幅は21.80mしか確認できなかった。また堀底についても，安全上の理由から深さ1.80～2.32mしか調査ができなかった。このことから，堀の形状などの詳細は不明である。

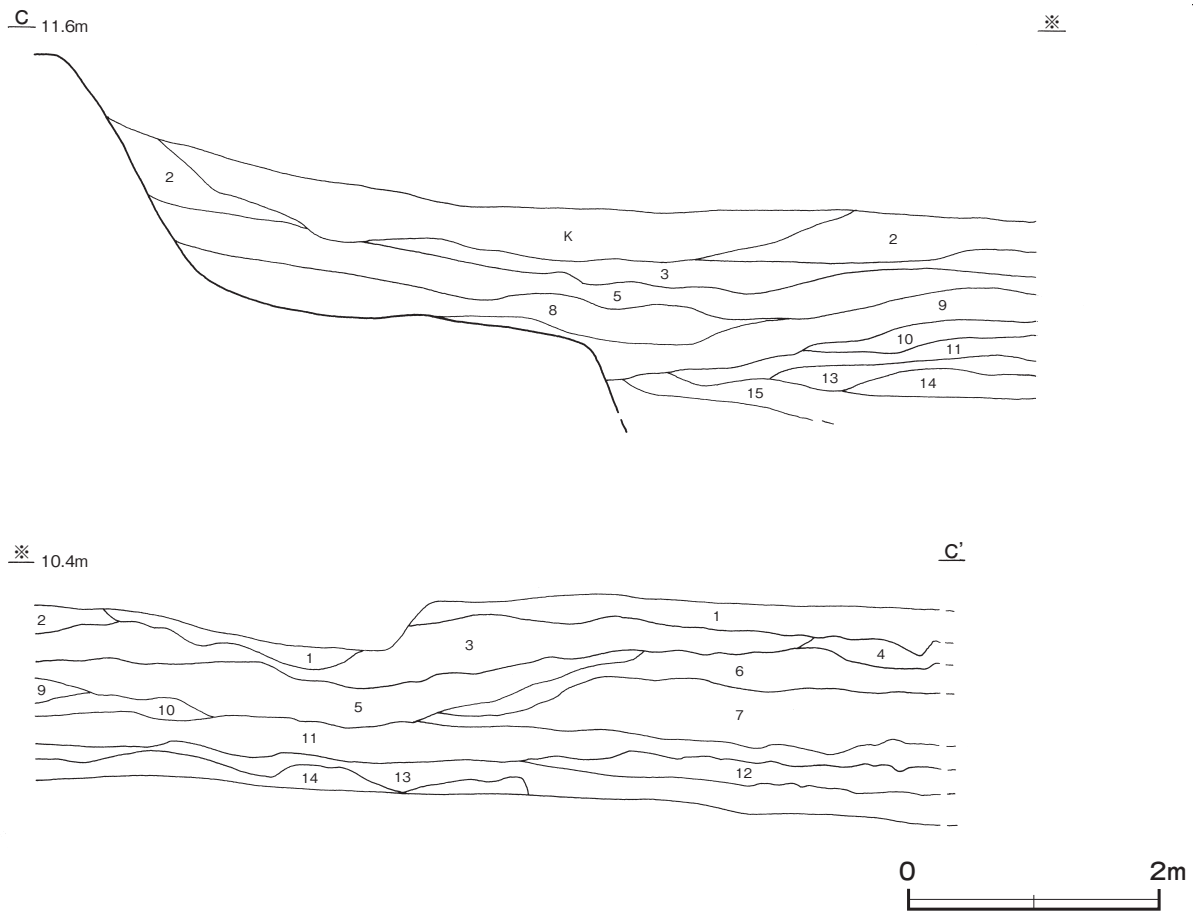
**覆土** 第4号切岸の壁面を包含した層位を含め、15層までしか分層できなかった。第1～14層は人為堆積で後世の土地利用によって埋め戻されたと考えられる。第15層は埋め戻された層位であるが、堆積の状態が堀の下方へ落ち込む様相がみられる。このため第1～14層までとは、異なる堆積層の可能性はある。

**土層解説**

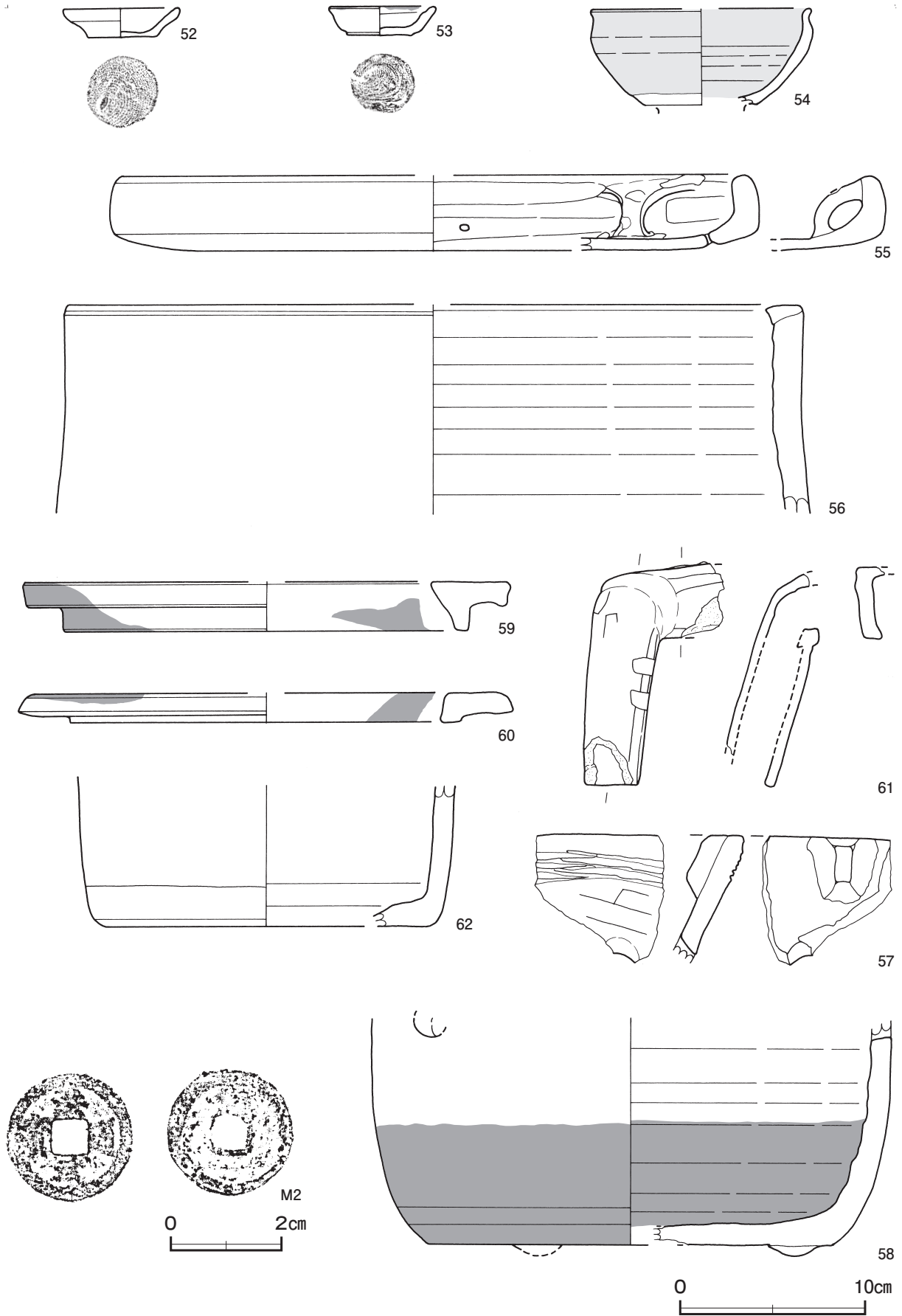
- |        |                              |         |                        |
|--------|------------------------------|---------|------------------------|
| 1 明黄褐色 | 砂粒主体、ロームブロック少量               | 8 黒褐色   | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量  |
| 2 黄褐色  | ロームブロック多量、砂粒中量               | 9 黒褐色   | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量  |
| 3 褐灰色  | ロームブロック・焼土粒子少量               | 10 黒褐色  | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量   |
| 4 黒色   | 焼土粒子少量、ローム粒子微量               | 11 黒褐色  | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 5 褐灰色  | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量           | 12 褐灰色  | ロームブロック少量、焼土粒子微量       |
| 6 黒褐色  | 黒色土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化材少量 | 13 黒色   | ロームブロック中量、焼土粒子微量       |
| 7 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量               | 14 褐色   | 粘土ブロック多量、ロームブロック中量     |
|        |                              | 15 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量       |

**遺物出土状況** 覆土中から縄文土器片148点（深鉢）、弥生土器片1点（壺）、土師器片103点（坏8、高坏1、甕94）、土師質土器片57点（皿4・鉢8・甕4・焙烙24・焜炉1・竈罏2・三脚1・小鉢2・不明11）、陶器片12点（碗2・鉢3・甕3・鍋1・蓋2・急須1）、磁器片12点（皿3・碗9）、瓦片34点、石器・石製品5点（双孔円板1・砥石1・不明3）、金属製品48点（鎌1・煙管1・釘9・不明37）、銭貨1点（洪武通寶）などが出土した。これらの遺物は第1～14層からの出土であることから、後世の土地利用に伴って埋め戻された際に混入した遺物と判断できる。

**所見** 第1～14層までは、縄文時代から明治時代までの遺物が混入していることから、18世紀後半から19世紀にかけての埋め戻しと考えられる。第15層以下については不明である。



第28図 第5号堀跡実測図



第 29 图 第 5 号掘跡出土遺物実測図

第5号堀跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師質土器	小皿	6.1	1.6	3.8	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り	第1～9層	80% 16世紀後半
53	土師質土器	小皿	5.5	1.6	3.4	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部回転糸切り 油煙付着	第1～9層	95% 16世紀後半
54	陶器	天目茶碗	[11.6]	5.2	[6.0]	精良	灰白	良好	ロクロ成形 鉄釉漬けかけ 体部下部から高台部削りだし 瀬戸美濃系登窯第2段階	第1～9層	10% 17世紀後葉～18世紀中葉
55	土師質土器	焙烙	[33.6]	4.1	[34.6]	長石・石英・雲母・小礫	黒褐	普通	輪積み ロクロナデ成形 底部砂目痕 内耳貼り付け 内面横位のヘラナデ 補修痕	第1～9層	30% PL6 19世紀
56	土師質土器	甕	[39.6]	(11.3)	-	長石・石英・雲母・礫	明赤褐	普通	輪積み ロクロナデ成形 外面横位ナデ 寸胴形	第1～9層	10% PL5 18世紀後半～19世紀カ
57	土師質土器	七厘カ	-	(6.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	輪積み ロクロナデ成形 外面口縁帯剥離 貼付痕明瞭 内面瓶掛部貼付 外面から内面へ穿孔 煤付着	第1～9層	5% PL6 18世紀後半～19世紀カ
58	土師質土器	火鉢カ	-	(12.8)	[21.8]	長石・石英	明赤褐	普通	ロクロナデ成形 底部に脚貼付 外面から内面へ穿孔 煤付着	第1～9層	20% PL6 18世紀後半～19世紀カ
59	土師質土器	甕罎	[26.0]	2.7	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	全面ナデ調整 煤付着	第1～9層	5% 18世紀後半～19世紀カ
60	土師質土器	甕罎	[26.8]	1.6	-	長石・石英	にぶい橙	良好	全面ナデ調整 煤付着	第1～9層	5% 18世紀後半～19世紀カ
61	土師質土器	脚	-	12.1	-	長石・石英	にぶい橙	普通	全面ナデ調整 五徳の類と思われる	第1～9層	5% PL6 18世紀後半～19世紀カ
62	土師質土器	鉢	-	(7.6)	[17.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ成形 二次焼成カ	第1～9層	10% PL6 18世紀後半～19世紀カ

番号	器種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	銭貨	2.38	0.62	0.14	(2.92)	銅	洪武通寶 無背銭 一文銭	第1～9層	PL9 初鑄 1368年

#### 4 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、道路跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

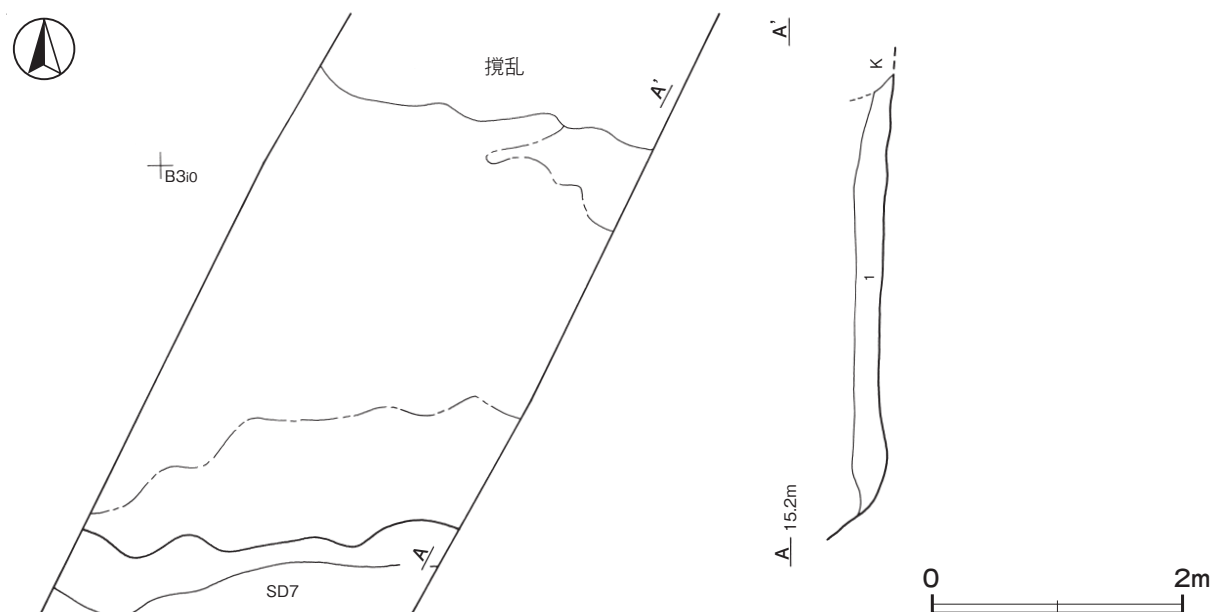
##### 道路跡

##### 第2号道路跡（第30図）

**位置** 調査区中央部のB3h0～B3i0区、標高15mほどの台地傾斜部に位置している。

**重複関係** 第2号土塁の第I期破壊層を掘り込み、第II期破壊層によって埋められている。

**規模と形状** 東端部と西端部は調査区域外へ延びているため、長さ2.74mしか確認できなかった。長軸方向はN-89°-Eで、直線的に延びている。路面はほぼ平坦であるが、東方向へ緩斜している。北部一帯は攪乱を受けているため、掘方は上幅1.65～3.98m、下幅1.57～3.65m、深さ20cmしか確認できなかった。断



第30図 第2号道路跡実測図

面形は攪乱を受けていることから不明である。側溝は確認できなかった。

**構築土** 単一の構築土を確認した。上面が路面であり、中央部分は硬化している。

**土層解説**

1 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

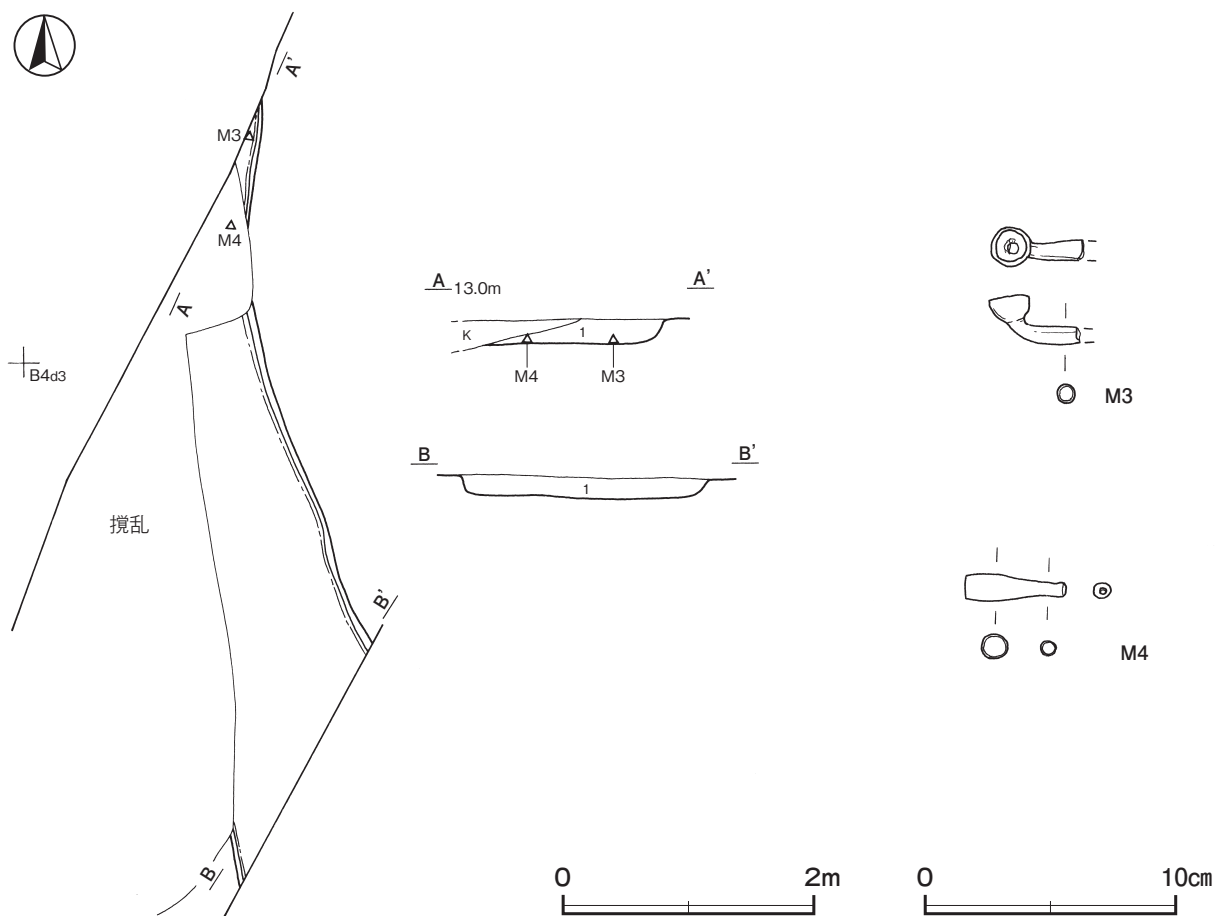
**遺物出土状況** 構築土上面から土師質土器片3点（焙烙）、瓦質土器片1点（鉢）、陶器片3点（鉢2・蓋1）、磁器片4点（皿2・碗1・小坏1）、瓦片1点などが出土した。これらの遺物は、第2号土塁の第Ⅱ期破壊層からの混入と考えられる。構築土からの出土遺物は確認できなかった。

**所見** 出土土器からの年代決定はできないが、第2号土塁の破壊層の年代から、構築は17世紀前葉以降、廃絶は18世紀後半以降と判断できる。また、江戸時代末葉の「天領検地絵図（第6図）」には本道路と考えられる道路が描かれており、第4号道路へと続いている。

**第4号道路跡（第31図）**

**位置** 調査区中央部のB4c3～B4d3区、標高13mほどの台地傾斜部に位置している。

**規模と形状** 南東端部と北西端部は調査区域外へ延びていることや西部に攪乱を受けているため、長さ4.13mしか確認できなかった。B4c3区から南東方向（N-157°-E）へほぼ直線的に延びている。路面はほぼ平坦であるが、北西方向へ緩斜している。北西部に攪乱をうけているため、掘方は上幅0.93～1.46m、下幅1.24～1.82m、深さ20cmしか確認できなかった。断面は逆台形を呈している。側溝は確認できなかった。



第31図 第4号道路跡・出土遺物実測図



**構築土** 単一の構築土を確認した。上面が路面であり、中央部分は硬化している。

**土層解説**

1 暗 褐 色 粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 構築土から金属製品2点(煙管)が出土している。また構築土の上面から金属製品12点(刀子3・釘4・不明5)が確認されているが、これらの遺物は混入と考えられる。

**所見** 出土遺物から18世紀後半の構築と考えられる。江戸時代末葉の「天領検地絵図(第6図)」には第2号道路に繋がる本道路が描かれている。また主要地方道美浦栄線から北方向へ延びる取り付け道も本道路の延長上に描かれている。第2号道路跡との道幅が一致しないことから、上面が削平されていると考えられる。

第4号道路跡出土遺物観察表(第31図)

番号	器種	長さ	幅	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	煙管雁首	(3.7)	0.8	0.7	0.1	(4.80)	銅	火皿径1.6cm 継目痕	覆土中	95% PL9 18世紀後半
M4	煙管吸口	4.0	1.1	0.3~0.7	0.1	6.03	真鍮	撫肩状	覆土中	100% PL9 18世紀後半

表4 江戸時代道路跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
2	B3h0~B3i0	N-89°-E	直線状	(2.74)	(1.65)~ (3.98)	(1.57)~ (3.65)	(20)	台形	外傾	人為		
4	B4c3~B4d3	N-157°-E	直線状	(4.13)	(0.93)~ 1.46	(1.24)~ 1.82	(5)	皿状	外傾	人為	煙管	SA破壊層I→本跡 →SA破壊層II

5 その他の遺構と遺物

時期が決定できない遺構を掲載した。掲載遺構は堅穴建物跡1軒、堅穴遺構1基、土坑7基、ピット9か所である。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

**第5号堅穴建物跡(第32図)**

**位置** 調査区南西部のC3d6区、標高18mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 西側に接する第2号堅穴遺構との新旧関係は不明である。

**規模と形状** 東部が調査区域外へ延びていることから、南北軸3.48m、東西軸1.48mしか確認できなかった。東壁は確認できなかったが、硬化面の範囲や土層断面の立ち上がりから、平面形は、方形もしくは長方形と考えられる。南北軸方向はN-47°-Eである。壁高は14~18cmで、壁はほぼ直立している。調査区域での竈の確認はできなかった。

**床面** ほぼ平坦で、ハードローム層を掘り込んだ面を生活面としている。中央部が広く硬化している。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ20cm・26cmで、支柱穴の可能性がある。いずれも覆土中にロームブロックを多量に含んでいることから、埋め戻されていると考えられる。

**土層解説**

1 暗 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化物微量      2 褐 色 ロームブロック多量

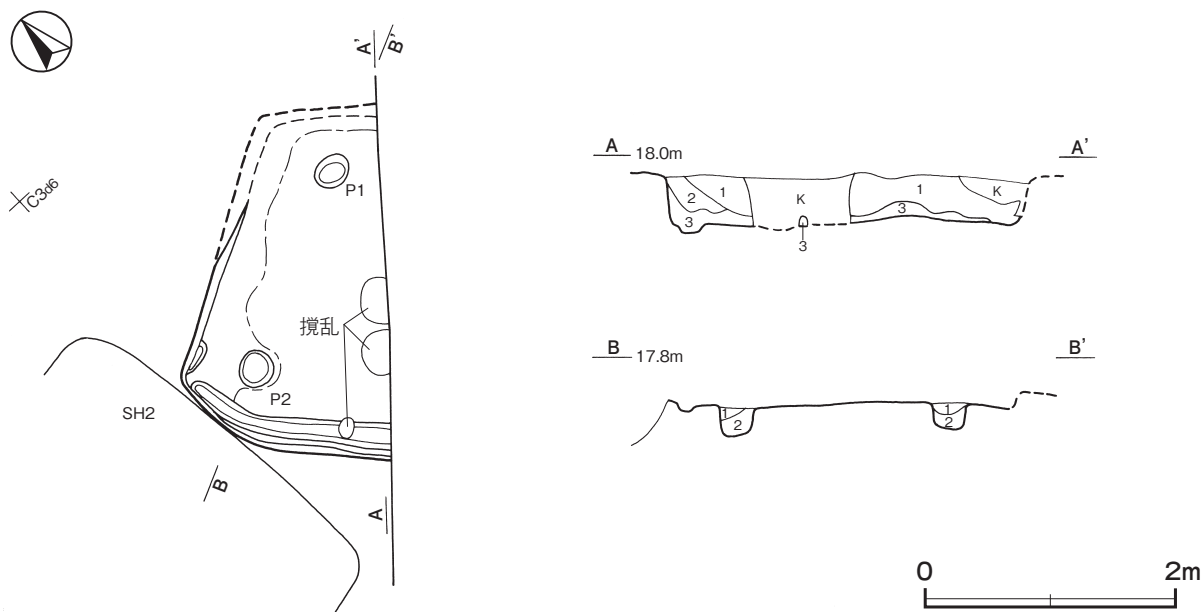
**覆土** 3層に分層できる。不規則な堆積状況から、埋め戻されていると考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量      3 暗褐色 ロームブロック多量  
2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 床面に炭化材が少量確認できたが, 時期を決定できる遺物は確認できなかった。混入している縄文土器片 12 点 (深鉢), 弥生土器片 3 点 (壺) が出土している。

**所見** 時期は, 伴う土器がないことから不明である。



第 32 図 第 5 号 竪穴建物跡実測図

(2) 竪穴遺構

第 3 号 竪穴遺構 (第 33 図)

**位置** 調査区南西端部の C3g3 区, 標高 18 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第 1・3 号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部は第 3 号溝に, 中央部から南西部にかけては第 1 号溝に掘り込まれているため, 北東・南西軸 2.50 m, 北西・南東軸 2.22 m しか確認できなかった。南西端部が確認できたことから, 平面形は, 方形もしくは長方形と考えられる。このことから北東・南西軸の方向は  $N - 48^\circ - E$  と推定される。壁高は 6 ~ 18 cm で, ほぼ直立している。

**床面** ほぼ平坦である。炉跡や硬化面は確認できなかった。

**ピット** 4 か所。P 1・P 2 は深さ 8cm・10cm で, P 1 はロームブロックを多量に含んでいることから, 埋め戻されていると考えられる。規模や形状が似ていることから, 同様のピットと考えられるが, 性格不明である。P 3・P 4 は深さ 32cm・35cm で, 柱穴と考えられる。第 1・3 号溝との重複が激しく, この他のピットは確認できなかったため, ピットの配置については不明である。

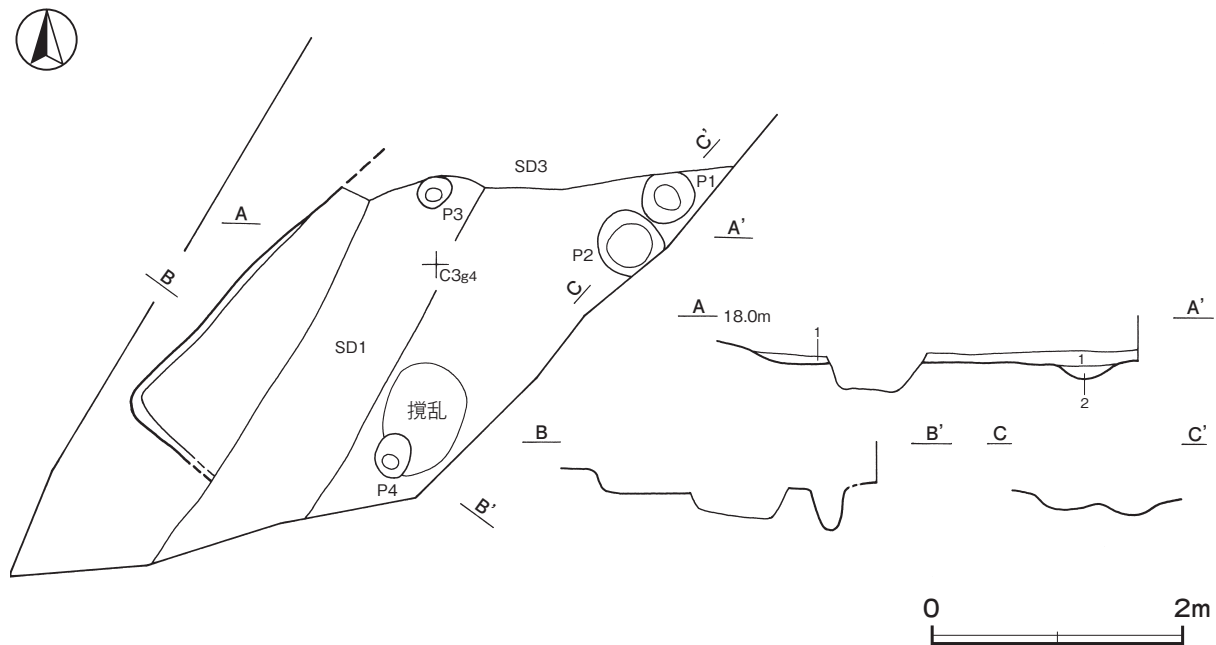
**覆土** 単一層である。含有物が少なく, 堆積土の粒子が細かいことから自然堆積と考えられる。第 2 層は P 1 の覆土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量      2 黒色 ロームブロック多量

**遺物出土状況** 縄文土器片 52 点 (深鉢), 弥生土器片 74 点 (壺), 土師器片 47 点 (坏 4, 甕 43), 鉄滓 1 点 (2.8 g) が出土している。全域に散在した状態で, 覆土中から出土している。土師器片は, ほかの土器片に比べて細片が多く, 耕作による混入の可能性がある。

**所見** 弥生時代後期, もしくは古墳時代後期の可能性があるが, 時期を特定できなかった。このことから遺存状態が比較的良好な弥生土器については, 本節末に掲載した。



第 33 図 第 3 号竪穴遺構実測図

(3) 土坑 (第 34 図)

時期を決定できない土坑 7 基について, 実測図, 土層解説, 一覧表を掲載する。第 1 号曲輪が位置する台地平坦部で確認した土坑については, 当城跡に関わる土坑の可能性がある。また, 第 3 号曲輪跡が位置する台地傾斜部で確認した土坑については, 第 10 号土坑の存在から縄文時代の土坑の可能性がある。いずれも出土遺物が少なく細片であること, また限られた調査区域であることから遺構間の関係が明確にできなかったため, 時期は決定できなかった。

**第 1 号土坑土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**第 3 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

**第 4 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

**第 6 号土坑土層解説**

- 1 暗灰黄色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗灰黄色 粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 明黄褐色 粘土ブロック多量
- 4 明黄褐色 粘土粒子多量

**第 7 号土坑土層解説**

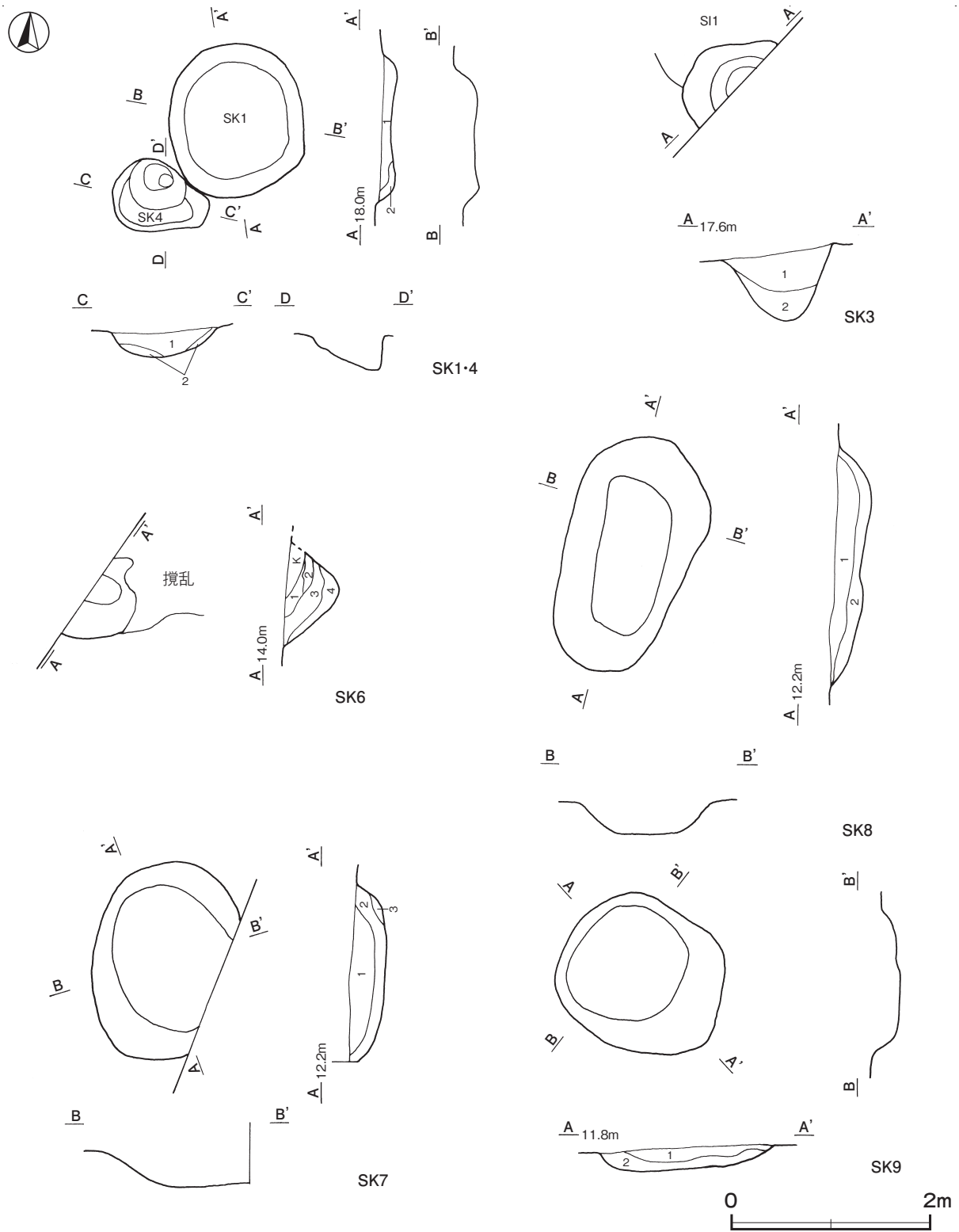
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**第 8 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

**第 9 号土坑土層解説**

- 1 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量



第 34 図 土坑実測図

表 5 土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C3e5	N - 12° - W	楕円形	1.54 × 1.35	20	平坦	緩斜	自然	縄文土器・土師器	
3	C3d6	N - 50° - E	[楕円形]	1.12 × (0.42)	76	鍋底状	外傾	人為		SI1 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
4	C3f4	N-79°-W	不整形	0.98×0.72	34	皿状	直立・緩斜	自然		
6	B4g1	N-33°-E	[楕円形]	(1.00)×(0.50)	42	鍋底状	緩斜	自然		
7	B4a5	N-27°-W	[楕円形]	2.00×(1.20)	36	平坦	緩斜	自然		
8	B4a4	N-22°-E	楕円形	2.42×1.28	30	平坦	緩斜	自然		
9	A4i5	N-45°-W	楕円形	1.75×1.50	22	平坦	緩斜	自然		

(4) ピット(第14図)

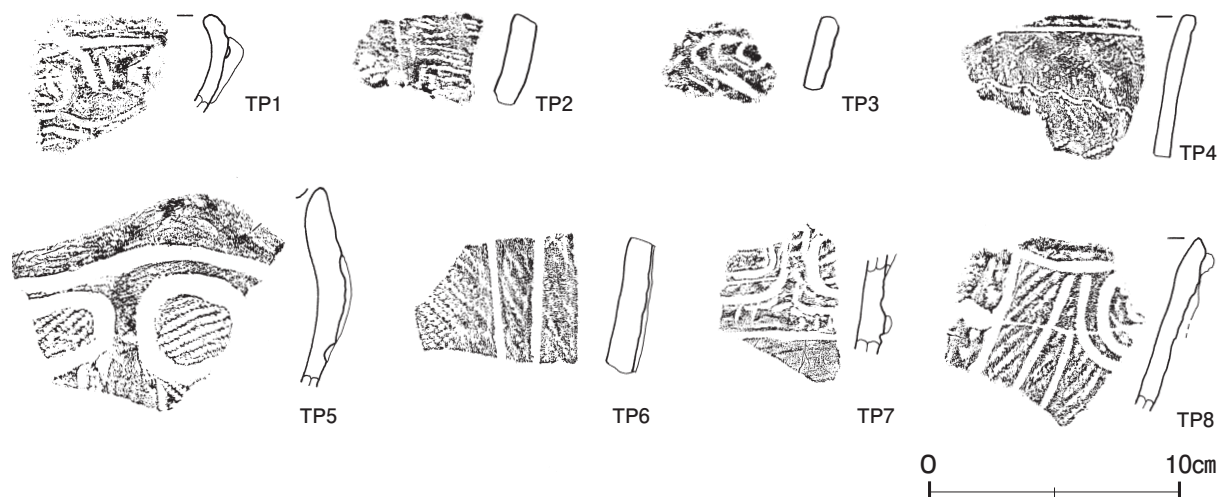
時期を決定できないピット9か所について、一覧表を掲載する。これらのピットのほとんどは、第1号曲輪跡が位置している台地平坦部に集中していることから、当城跡に関わるピットの可能性がある。出土遺物が少なく細片であること、また限られた調査区域であったため、ピット間の配列関係などが明確にならなかったことから本項にまとめた。

表6 ピット一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (cm)	深さ (cm)					
1	C3e4	N-46°-E	楕円形	34×28	26	平坦	直立	人為	土師器甕片1点	
2	C3e4	N-87°-E	楕円形	52×41	35	平坦	直立	人為	土師器甕片2点	
3	C3e5	-	円形	32×30	8	平坦	外傾	人為		
4	C3e5	N-1°-E	楕円形	50×28	12	平坦	外傾	人為		
5	C3f5	N-44°-E	[楕円形]	48×(22)	35	皿状	直立	人為	縄文深鉢片1点・土師器甕片1点	
6	C3e5	-	円形	33×30	23	平坦	直立	人為	土師質土器鉢カ1点	
7	C3e5	N-78°-W	楕円形	33×27	12	平坦	直立	人為	土師器甕片1点	
8	C3e5	N-60°-W	楕円形	50×41	18	皿状	外傾	人為		
9	B3i0	-	円形	27×25	27	平坦	直立	人為		

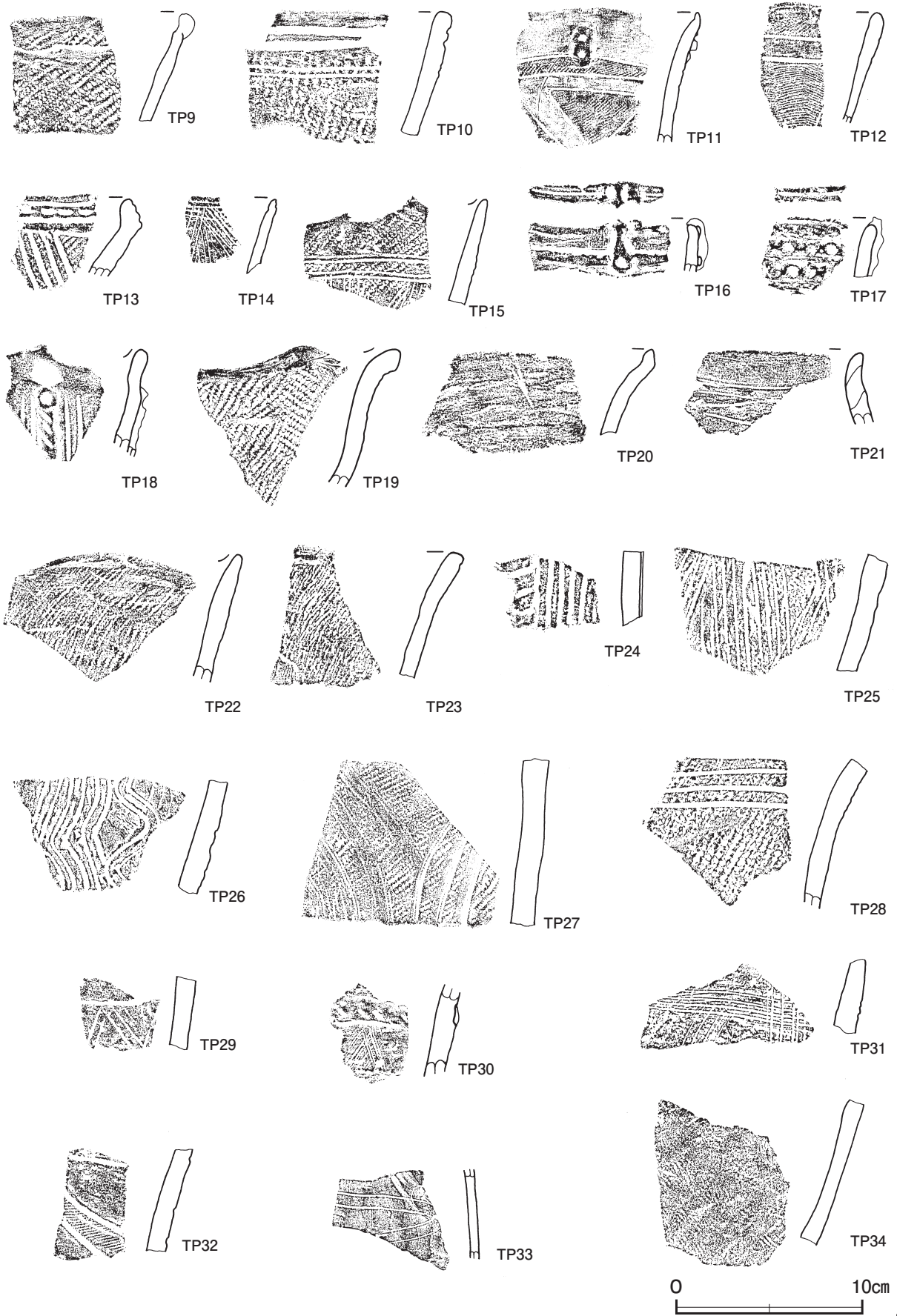
(5) 遺構外出土遺物(第35～39図)

遺構に伴わない縄文時代から江戸時代に至る遺物について、各時代の特色ある遺物を抽出し、実測図と拓影図、遺物観察表を掲載する。

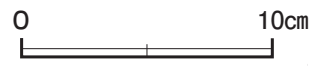
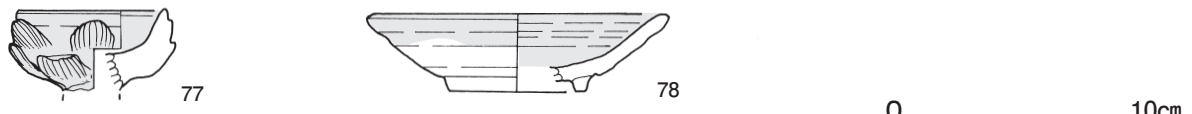
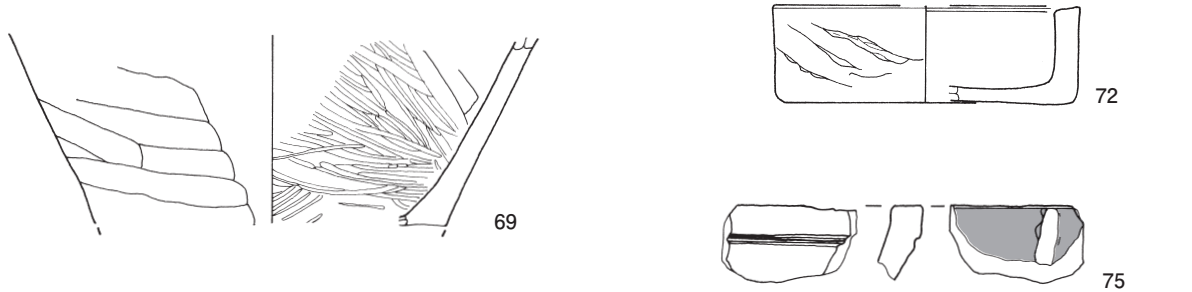
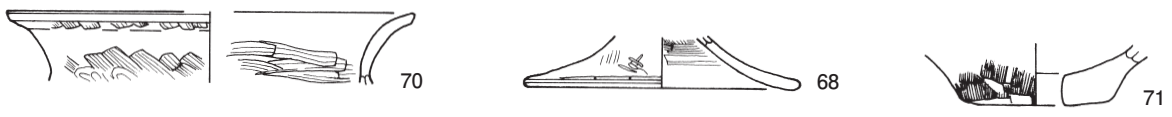
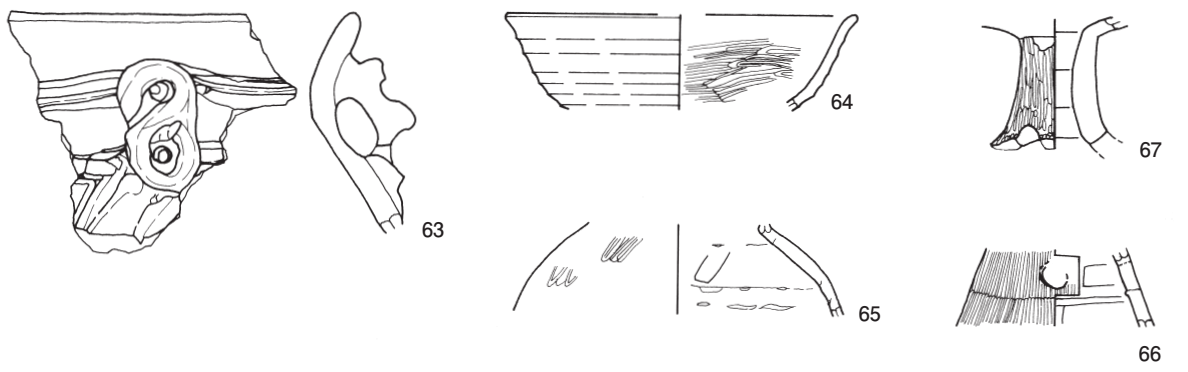
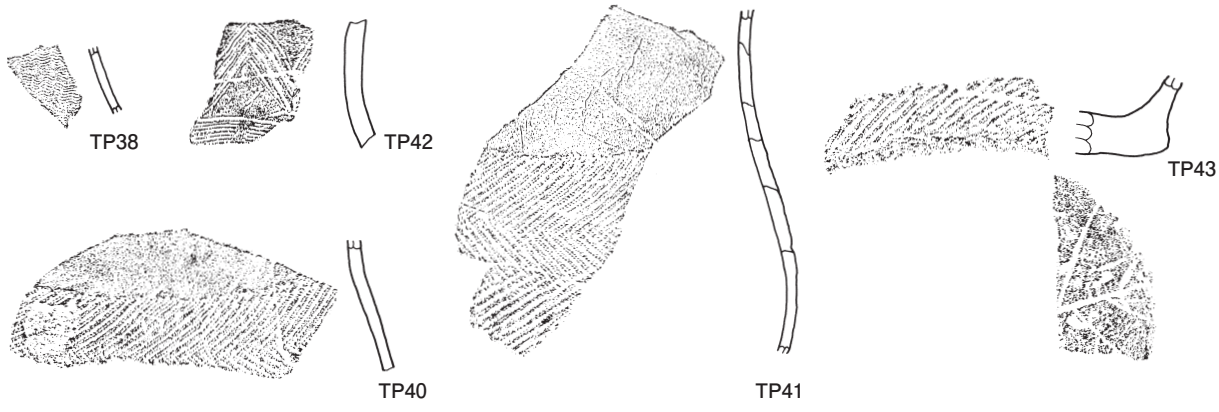
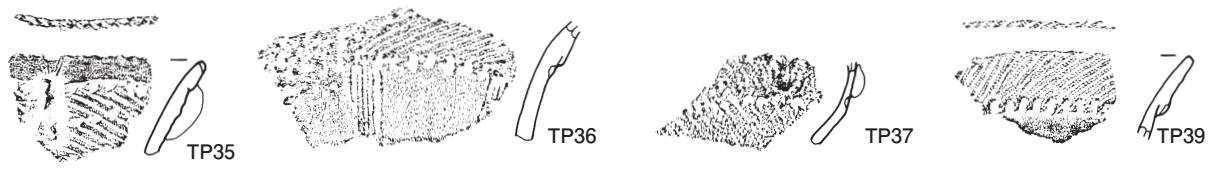


第35図 遺構外出土遺物実測図(1)

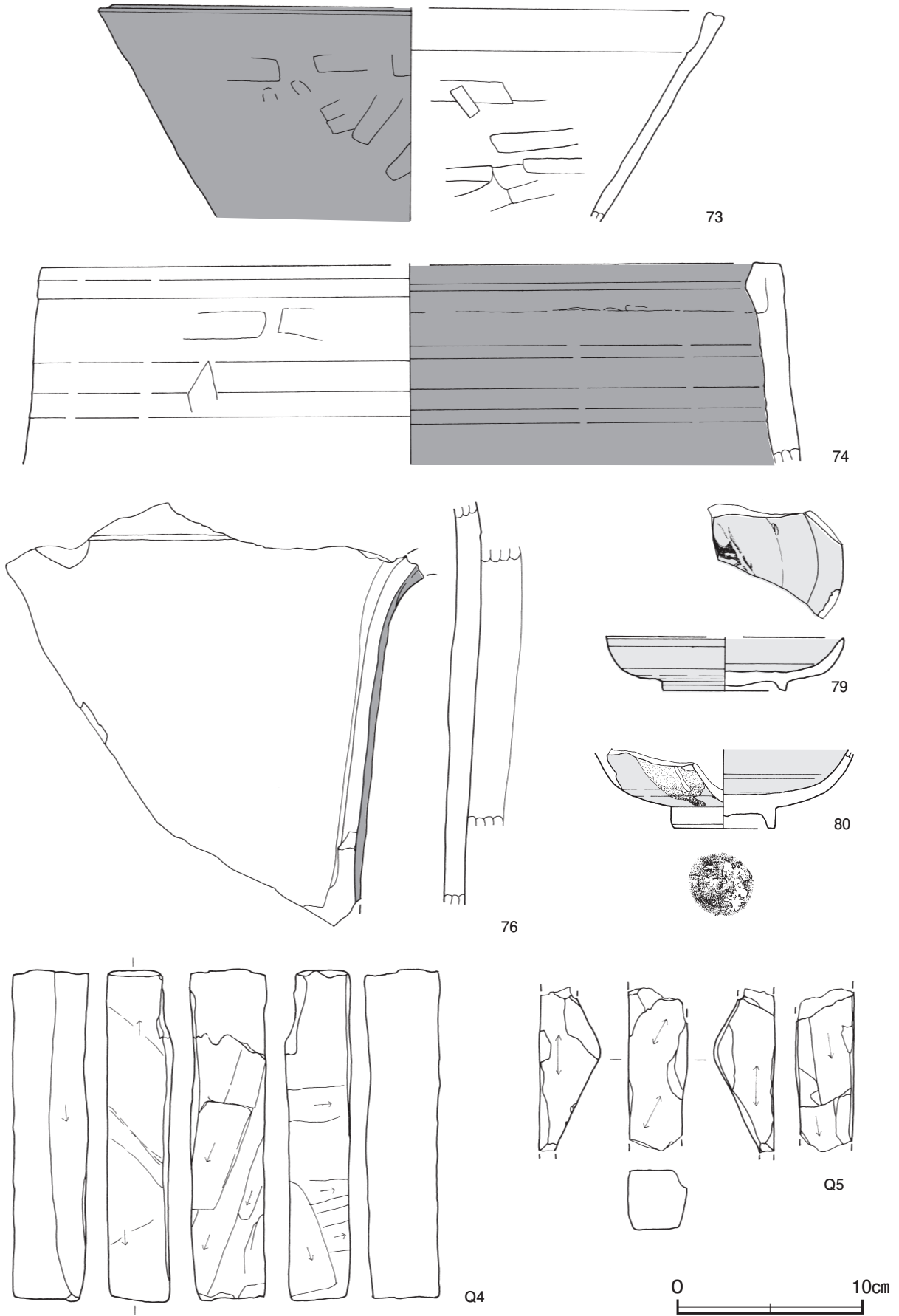




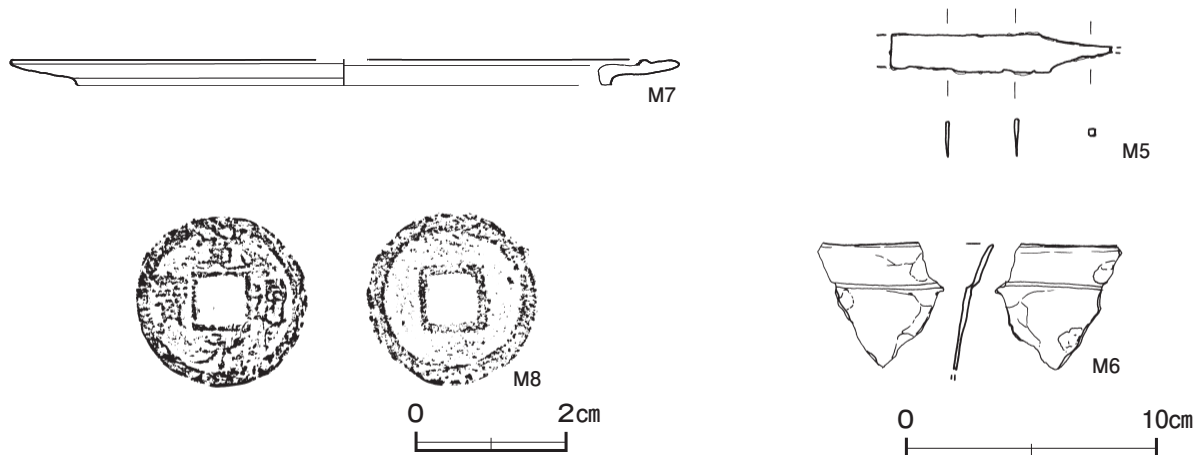
第 36 図 遺構外出土遺物実測図 (2)



第 37 図 遺構外出土遺物実測図 (3)



第 38 図 遺構外出土遺物実測図 (4)



第39図 遺構外出土遺物実測図(5)

遺構外出土遺物観察表(第35~39図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	口縁下にアーチ状のモチーフ貼付後沈線文	第2号土塁跡	PL7 前期後葉
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	横位擦糸文	表土	PL7 前期後葉
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	半裁竹管による刺突列と斜位沈線文	表土	PL7 前期後葉
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	結節縄文及び綾線文 横位沈線文	第1号竪穴遺構	PL7 前期末葉
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	沈線による円形・楕円形区画 区画内R Lの単節縄文充填 沈線を伴う磨り消し帯垂下	第1号竪穴遺構	PL7 中期後葉
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	R Lの単節縄文施文後、沈線を伴う磨り消し帯を垂下	第3号溝跡	PL7 中期後葉
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗褐	沈線による楕円形区画 区画に沿った隆帯貼付 隆帯には刻み	第2号竪穴遺構	PL7 中期中葉
TP 8	縄文土器	深鉢	長石	にぶい黄橙	L Rの単節縄文を地文 沈線と隆帯による施文 隆帯及び口辺には刺突列	第3号曲輪跡	PL7 後期前半
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	折り返し口縁 L Rの単節縄文を地文 折り返し部に沿って地文ナデ消し	第1号竪穴遺構	PL7 後期前半
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	L Rの単節縄文を地文 口辺ナデ消し後2条の太沈線施文 細沈線2条は地文上から施文	第1号曲輪跡	PL7 後期前半
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線を伴う帯状 三角区画 区画内L Rの細縄文充填 8の字状のモチーフ貼付 内面ミガキ顕著	第5号堀跡	PL7 後期前半
TP12	縄文土器	深鉢	長石	橙	沈線による区画後、区画内に羽状条線文施文	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	L Rの単節縄文施文後、沈線による施文や区画文 区画外の地文ナデ消し 口縁ナデ後2条の沈線と刺突列	第2号土塁跡	PL7 後期前半
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	横位の条線施文後、縦位・斜位の条線	第1号竪穴遺構	PL7 後期前半
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	微波状口縁 L Rの縄文施文後、条線	表土	PL7 後期前半
TP16	縄文土器	深鉢	長石	灰黄褐	口縁上面に沈線1条 横位隆帯2条 縦位隆帯1条の順で貼付 口縁上部に突起 隆帯交点に圧痕	第5号堀跡	PL7 後期前半
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	隆帯2条 隆帯正面に圧痕	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明黄褐	微波状口縁下に指頭痕 指頭痕下に竹管刺突及び刻みを有する縦位紐線帯 縦位沈線施文 赤彩	第3号曲輪跡	PL7 後期前半
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	L Rの単節縄文羽条構成 内面ミガキ顕著	第1号曲輪跡	PL7 後期前半
TP20	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい褐	横位ナデ	第4号堀跡	PL7 後期前半
TP21	縄文土器	深鉢	長石・長石	橙	横位ナデ 条線	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	微波状口縁 L Rの多条縄文 内面ミガキ顕著	第5号堀跡	PL7 後期前半
TP23	縄文土器	深鉢	長石長石・赤色粒子	橙	L Rの多条縄文 内面ミガキ顕著	第2号竪穴遺構	PL7 後期前半
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	縄文ナデ消し 縦位5条・横位3条の条線文	第2号竪穴遺構	PL7 後期前半
TP25	縄文土器	深鉢	長石	明赤褐	縄文ナデ消し 2条1単位の縦位・斜位の沈線文 内面ミガキ顕著	第3号曲輪跡	PL7 後期前半
TP26	縄文土器	深鉢	長石	明赤褐	外面ナデ 部分的に縄文(L Rカ)残存 2条1単位の波状沈線文	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	L Rの単節縄文を地文 渦状の磨り消しによる施文	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	L Rの単節縄文 横位3条の条線文 内面ミガキ顕著	第2号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	条線による三角区画	第3号溝跡	PL7 後期前半
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	連続した刻みを有する横位隆帯 ナデの後2条1単位の条線による格子文	表土	PL7 後期前半
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	縄文ナデ消し 横位・斜位の条線文 内面ミガキ顕著	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半



番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	長石	橙	縄文磨り消し 沈線による区画内LRの単節縄文充填	第1号竪穴建物跡	PL7 後期前半
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	2条1単位の条線による区画 外・内面ミガキ顕著	表土	PL7 後期前半
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	縄文ナデ消し	第2号土器跡	後期前半
TP35	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	灰褐	1段の複合口縁 口縁部上面にヘラ状工具による刺突 単節縄文施文後、横位の刺突列 摘み付けによる貼瘤	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期後葉
TP36	弥生土器	壺	長石・石英・細礫	橙	1段の複合口縁 口縁部に附加条一種 口縁下端に刺突列 5条1単位の縦区画文	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期後葉
TP37	弥生土器	壺カ	長石・石英・細礫	極暗赤褐	単節縄文 横位の刺突列 摘み付けによる貼瘤 根鹿北式カ	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期末葉カ
TP38	弥生土器	壺	長石・石英・細礫	にぶい黄橙	4条1単位による櫛描き文 横位の波状文	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期中葉
TP39	弥生土器	壺	長石	にぶい黄橙	1段の複合口縁 口縁部上面に縄文 口縁部附加条一種 口縁下端に横位の刺突列 頸部下に無文帯 TP40・41と同一	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期中葉～後葉
TP40	弥生土器	壺	長石	にぶい黄橙	頸部下に無文帯 体部単節縄文羽状構成 TP39・41と同一	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期中葉～後葉
TP41	弥生土器	壺	長石	にぶい黄橙	頸部下に無文帯 体部単節縄文羽状構成 TP39・40と同一	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期中葉～後葉
TP42	弥生土器	壺	長石・石英・雲母・細礫	にぶい赤褐	3条1単位カによる櫛描き文 三角区画文	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期中葉
TP43	弥生土器	壺	長石・石英・雲母・細礫	黒褐	附加条一種 底部木葉痕	第3号竪穴遺構覆土中	PL8 後期後葉カ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
63	縄文土器	深鉢	-	(8.8)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外・内面ナデ 沈線を伴った横位・斜位の隆帯 S字状モチーフの把手貼付	第1号竪穴建物跡	5% PL7 後期前半
64	土師器	坏	[13.8]	(3.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	ロクロナデ成形 内面横位ミガキ	第1号竪穴建物跡	10% 10世紀前半
65	土師器	埴	-	(3.6)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	外面縦位ミガキ 内面輪積み 縦位・斜位ナデ	第1号竪穴建物跡	20% 4世紀前葉
66	土師器	器台	-	(3.1)	-	長石・石英	橙	普通	外面縦位ミガキ 内面輪積み 横位ナデ 外面から内面へ穿孔	第1号竪穴建物跡	5% 4世紀前葉
67	土師器	高坏	-	(5.2)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	外面縦位ミガキ 内面輪積み 外面から内面へ穿孔	第1号竪穴建物跡	20% 4世紀前葉
68	土師器	高坏	-	(2.1)	[10.8]	長石・石英	明赤褐	普通	外面縦位ミガキ 内面斜位ハケ目 裾部外・内面横位ナデ	第1号竪穴建物跡	5% 4世紀前葉
69	土師器	鉢	-	(7.6)	-	長石・石英	橙	普通	外面横位ナデ 内面横位・斜位ミガキ 底部剥離	第10号土坑	20% 6世紀後葉
70	土師器	甕	[16.2]	(2.8)	-	長石	にぶい橙	普通	外面斜位ハケ目後横位ナデ 内面横位ハケ目後横位ナデ 布留系	第1号竪穴建物跡	5% 4世紀前葉
71	土師器	甕	-	(2.4)	[6.0]	長石・石英	明赤褐	普通	外面縦位・斜位ハケ目 内面斜位ナデ後横位ナデ 底面ナデ 内面から外面へ穿孔	第1号竪穴建物跡	5% 4世紀前葉
72	土師質土器	鉢	[11.8]	3.8	[11.4]	長石	浅黄橙	普通	粘土巻き上げ ロクロナデ成形 二次焼成カ	第3号曲輪跡表土	30% PL6 18世紀～19世紀
73	土師質土器	鍋	[32.1]	(11.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	輪積み ロクロナデ成形 外面煤付着	表土	10% 16世紀
74	土師質土器	甕	[40.0]	(10.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	輪積み ロクロナデ成形 内面煤付着	第1号曲輪跡表土	5%
75	土師質土器	七厘	-	(3.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ成形 外面1状の横位沈線 内面瓶掛部剥離 内面煤付着	第3号曲輪跡表土	5%
76	瓦質土器	置竈	-	(21.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	輪積み不明瞭 ロクロナデ成形 焚口部貼付 焚口部煤付着	表土	10% PL6
77	青磁	仏餉碗	[5.8]	(3.2)	-	緻密	灰白	良好	ロクロナデ成形 細刻線を伴う連弁貼付 内外面青磁釉漬けかけ 竜泉窯系磁器	表土	45% PL10 15世紀代カ
78	陶器	皿	[11.4]	3.1	[5.4]	精良	浅黄	良好	ロクロ成形 高台削りだし 灰釉漬けかけ 瀬戸美濃系登臺第1段階	表土	30% PL10 17世紀前葉
79	陶器	皿	[12.8]	2.9	[6.6]	精良	黄灰	良好	ロクロ成形 高台削りだし 外・内面御深井釉見込み部に摺絵 瀬戸美濃系連房皿期a	表土	30% PL10 17世紀～18世紀
80	陶器	皿	-	(4.3)	[5.5]	精良	灰白	良好	ロクロ成形 高台・内面一部削りだし 漬けかけ 外面白釉 内面青緑釉 見込み部輪上げ 唐津産	第4号堀跡表土	30% PL10 17世紀後半～18世紀前半

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	砥石	18.0	3.6	4.1	453.1	結晶片岩	砥面4面	第2号曲輪跡表土	PL9
Q5	砥石	(9.8)	3.1	3.2	(105.7)	凝灰岩	砥面4面	表土	PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	刀子	(8.8)	(1.5)	0.1～0.2	(8.33)	鉄	両檔 刃部断面三角形 基部断面方形	第4号道路跡表土	PL9

番号	種別	口径	高さ	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	鍋	-	(5.0)	0.2	(21.54)	鉄	蓋受け部の稜明瞭 断面形は土師質鍋に似る	第1号竪穴建物跡	
M7	竈鏝	[26.8]	1.0	0.4～0.5	(50.01)	鉄	竈受け部短小	表土	

番号	器種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	銭貨	2.33	0.6	0.12	(1.61)	銅	新寛永通寶 無背銭 一文銭	第1号竪穴建物跡	PL9 初铸 1668年



## 第4節 ま と め

今回の調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、戦国時代を主とした中世、江戸時代の遺構や遺物を確認した。以下に、今回の調査から主に考えられる事項について、縄文時代と弥生時代後期から古墳時代、戦国時代の木原城の二点をまとめることとする。

### 1 縄文時代から古墳時代

縄文時代の遺構と遺物は、斜面部で確認した第10号土坑と、前期から後期の土器片が出土している。調査区域全体から出土した土器片は、ほとんどが後期前半代の土器形式に該当する称名寺式から堀之内式である。遺構の確認こそ少なかったが、出土遺物の数量から調査区域を取り囲む台地上には縄文時代後期前半代の集落が存在していたと推察できる。

古墳時代の遺構や遺物は、古墳時代前期前葉と考えられる第2号竪穴遺構と後期後葉（6世紀後葉）と考えられる第1号竪穴建物跡を確認した。いずれも台地の平坦部に位置している。調査区域における台地の平坦部は、両跡から北東方向へ約10m先の地点より、落ち込む地形を形成している。確認した遺構数が少ないことから明確な判断はできないが、各時期の集落の縁辺部に位置する可能性がある。また、弥生時代後期後葉の土器片が比較的多く出土している。特に、後期末葉と考えられるTP38や古墳時代前期前葉の布留系甕片70には留意が必要と思われる。これらが、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけての同時性や連続性を直接的に示す資料とは判断できないが、各時期の集落が推定でき、今後当該地区において発掘調査がなされる場合には、該期の過渡段階を視野にいたした調査が求められる。

### 2 当調査区域における戦国時代の木原城について

#### (1) 木原城址における発掘調査史

木原城は本丸・二の丸・三の丸・大手郭・きぜ郭からなる内郭と御茶園曲輪、清月曲輪、寺郭などの外郭によって構成されている。これらの郭群は、規模や形状、あるいは発達した横矢掛けの有無などに特徴の違いがみられ、構築年代が異なる可能性を秘めている。

これまでのところ、木原城址における内郭部の発掘調査は、平成5・6年度の公園整備に伴う本丸跡の確認調査、平成8年度の手洗い所建設に伴う本丸跡東側部分の調査、平成9年度の児童館建設に伴う三の丸跡の調査、平成14年度の駐車場建設に伴う二の丸跡の調査、平成15年度の県営ほ場整備に伴うきぜ郭跡の調査の5回に及んでいる<sup>1)</sup>。

木原城址の部分的な調査ではあるにせよ、調査成果からは、自然地形を巧みに利用しながらも、築城に伴う整地や盛土などの大規模な地形改変や綿密な縄張りに基づいた、計画的かつ短期間で築城された様相が報告されている<sup>2)</sup>。出土遺物は16世紀のものが主体であり、きぜ郭跡の調査においては、整地層中から、16世紀中葉から後半の瀬戸美濃産の陶器片と共に土師質土器片が出土している。今回の調査で出土した土師質土器小皿には、きぜ郭から出土した土師質土器と同様の特徴がみられる。

#### (2) 調査区域における縄張復元（第40図）

今回の調査区域は、三の丸跡と大手郭跡に挟まれた地点である。確認した遺構は、曲輪跡3区画とそれら

に付帯している土塁・切岸跡4条、堀跡2条などである。

#### ア 第1号曲輪

第1号曲輪は台地平坦部に位置しており、「木原城縄張復元図」(第5図)から三の丸の一部と考えられる。第1・2号土塁によって防御されたこの空間には、伴う可能性のある第1号竪穴遺構や複数の土坑などが確認できた。

第1号土塁の構築方向は、大手郭の西側土塁へ向かっている。「木原城縄張復元図」(第5図)には双方の土塁の間に三の丸への開口部がみられ、城門の構築が想定できる。第2号土坑や第5号土坑は柱穴と考えられることから、城門に関わる可能性があり、大手郭は城門を防御するための角馬出と想定できる。

第3号溝の走行方向は、第1号土塁や大手郭の西側土塁の構築方向に対して直行している。「木原城縄張復元図」(第5図)にみられる方形区画にはほぼ一致しており、三の丸内の小区画と考えられる。

第2号土塁は、第1号土塁と共に二重土塁を形成している。双方は構築土を伴う土塁が想定でき、第1号道路は堀状の窪地になると考えられる。こうした形状の二重土塁は、後北条氏系の城郭に顕著にみられる比高二重土塁と類似している。また、構築方向は大手郭の北側に形成されている平場の縁辺へ向かっており、この平場を防御する土塁も兼ねていたと考えられる。

第1号道路の走行方向は、大手郭の南西隅の開口部へ向かっている。このことから、大手郭や三の丸から第2号土塁上や大手郭北側の平場へ守備兵を展開させる武者走りの可能性がある。第1・2号土塁には構築土が想定できることから、城外からは守備兵の行動が見づらい構造になっていたものと考えられる。

#### イ 第2号曲輪

第2号曲輪は、台地傾斜部に位置している。第3号土塁と第4号堀によって防御されたこの空間には、第6号土坑以外の遺構は確認されなかった。上部からの攪乱が著しいことから明確ではないが、空地的な空間であったことが推測できる。また、三の丸や大手郭北側の平場によって、三方から包囲されている空間でもある。

第3号土塁の構築方向は、大手郭北側に位置する平場の突端部の中腹から三の丸の土塁縁辺に向かっており、谷津地形を遮断するように構築されており、当城の弱点でもある傾斜部を閉鎖する目的が考えられる。このことは本跡において、少なくとも1回の修築がおこなわれ、防御の強化がなされていることにも裏付けできると思われる。

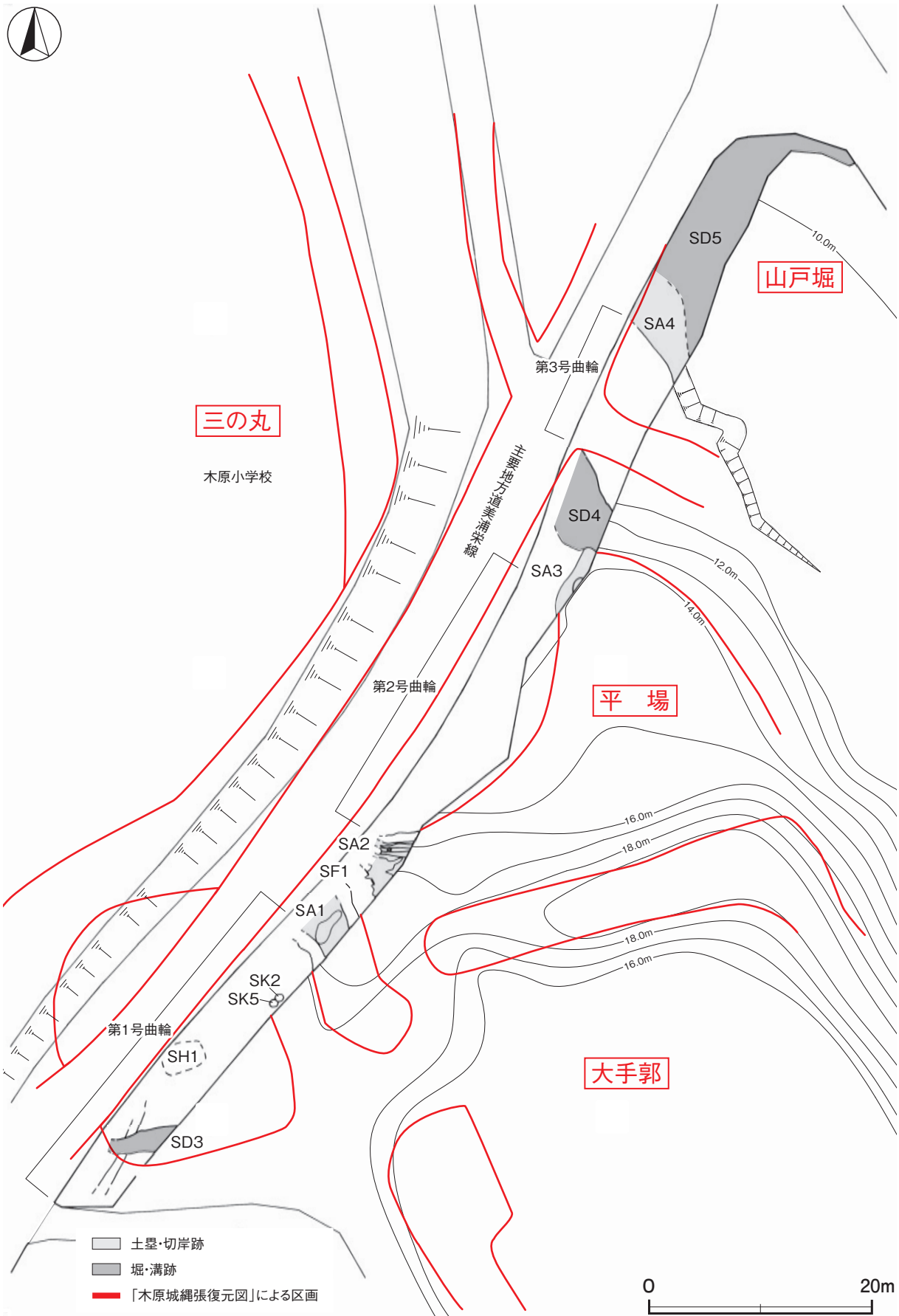
第4号堀は、第3号土塁の外矩下部に沿って掘り込まれている。掘削した排出土が第3号土塁の改修に使用され、第Ⅱ期の構築土層群を形成している。底面に土坑状の窪みが不規則に掘り込まれており、障子堀の系譜を引くものと思われる。障子堀は防御性の高い堀で、後北条氏系の城郭で顕著に用いられている。

#### ウ 第3号曲輪

第3号曲輪は、台地縁辺の傾斜部に位置している。今回の調査区域で、唯一整地層が確認できた曲輪で、三の丸と大手郭の台地の外縁に沿って構築された帯状を呈する曲輪と推定できる。

第4号切岸は、段状に切土され、外矩中腹に平場を有している。外矩面に土塁の構築土の破壊層が確認できなかったことや、この切岸の延長と考えられる調査区域東側の切土に土塁の痕跡がみられないことから、土塁の盛土はなされなかった可能性がある。

第5号堀の堀幅や堀底は、今回の発掘調査では確認できなかったが、少なくとも、堀幅21.80 m以上、深さ2.32m以上であることから、大規模な堀であったと考えられる。「木原城縄張復元図」(第5図)には山戸堀の名称がみられ、城外と城内を区画する堀であり、「天領検地絵図」(第6図)では幅広く、城下



第 40 図 調査区域における木原城縄張復元図

の町場と水路によって結ばれて描かれている。

こうした帯状の曲輪と大規模な堀とを組み合わせた構造は、本丸や二の丸の麓に築かれた「きぜ郭」に類似している。きぜ郭の調査においては、低地部に盛土・整地をし、曲輪が構築されているが、土塁の痕跡は確認されていない<sup>3)</sup>。「天領検地絵図」(第6図)のきぜ郭を概観すると、幅が広い堀によって城外と城内を区画し、町場や霞ヶ浦とは水路によって結ばれてる。

きぜ郭や第3号曲輪における立地や形態から、第3号曲輪は水運との関わりが深い曲輪と考えられ、本丸や二の丸へはきぜ郭が、三の丸や大手郭には第3号曲輪が、物資の輸送等に利用されていたものと考えられる。それ故に第3号曲輪と第2号曲輪の境には、防御性の高い障子堀の系譜を引く第4号堀が構築されたものと考えられる。

以上のように、今回の調査によって確認された第1～3号曲輪においては、傾斜部の防御の強化と霞ヶ浦の水利等を視野に入れた縄張の構造が考えられる。

### (3) 調査区域の構造物における構築・廃絶年代と破城・城割について

木原城における築城の時期については、近藤利貞が寺郭に所在する永巖寺を開山した応永元(1394)年<sup>4)</sup>、伊佐部村(東町)の居館が焼失したことから近藤氏が木原へ移住した永正元(1504)年<sup>5)</sup>、土岐治英によって木原城が改修され、近藤利勝が入城した永禄5(1562)年<sup>6)</sup>が考えられている。

今回の調査区域において、構築年代が判明した構造物は第3号土塁である。本跡の第Ⅱ期の構築土から出土した土師質土器(29)は、16世紀後半のものと考えられる。また、第Ⅱ期の構築土には、第4号堀を掘削した排出土が使用されたと考えられることから、第4号堀も同時期の構築と考えられる。

このことから、第3号土塁や第4号堀の構築については、土岐氏の改修による築城時期の可能性が高いと推察できる。さらに、内郭部が計画的縄張に基づいた短期間の築城であることからすれば、当調査区域の城郭関連の遺構は、16世紀中葉に構築された可能性がある。

また、第3号土塁の構築土には、16世紀後半以前と思われる第Ⅰ期の構築土層群が確認できたことや第1号竪穴遺構の出土遺物(26・27)、本丸跡の発掘調査で出土した13世紀代の金銅仏<sup>7)</sup>から、土岐氏による改修以前の城郭や関連施設の存在も否定はできない。改修以前の城郭の存在については、今後の資料の蓄積を待たなくてはならない。

一方、廃絶年代が判明した構造物は、第2号土塁、第3号土塁、第4号堀、第5号土坑である。

第2号土塁は、土塁の破壊行為は少なくとも二時期あるものと考えられるが、当城に関わる土塁の破壊は第Ⅰ期とした16世紀後半から17世紀前葉と考えられる。

第4号堀は第3号土塁を破壊した層位によって、埋め戻されている。当城に関わる土塁の破壊は第Ⅰ期で16世紀後半から17世紀前葉である。

第5号土坑は柱穴と考えられる。柱を抜き取った後に埋め戻されており、16世紀末葉から17世紀前葉の遺物が出土している。

改修の時期との兼ね合いから廃絶時期は、16世紀末葉から17世紀前葉と考えられる。第1～3号土塁、第4号堀のいずれもが、破壊や埋め戻されていることから、破城や城割がおこなわれたことが考えられる。当該期については、天正18(1590)年の土岐氏の佐竹氏への降伏、慶長7(1602)～8(1603)年の佐竹氏転封及び常陸仕置、慶長20(1615)年の一国一城令、島原の乱の後に実行された寛永15(1638)年の城



跡破却令などの影響が考えられる。いずれも戦国時代の風習を色濃く残しての時期であり、破城や城割については、当時の作法や慣習に基づいておこなわれたと考えられる。

こうした作法や慣習は、土塁や堀の破壊行為において、特徴的にみることができる。破城は、降伏者が勝者や世間に対して屈服・従属を表明し、降伏者と城の関係を断ち切る作法や慣習で、建物以外の堅固な城郭施設（虎口・土塁・堀など）の一部を降伏者自ら破却する行為とされている<sup>8)</sup>。また破城については、当時の作法や慣習にみられる精神性に加えて、再利用を防ぐ軍事的的一面も考えられている<sup>9)</sup>。当城の弱点である傾斜部の防御を図った第1～3号土塁や第4号堀は、当城の防御施設の象徴的存在と考えられる。角馬出が想定される大手郭の土塁が現存しているのに対し、第1・2号土塁は構築土を徹底的に破壊させていることや防御性の高い第4号堀を第3号土塁の破壊とともに廃絶している行為は、破城に際しての勝者の強い意志が感じられる。

一方、第4号堀から纏まって出土した土師質土器小皿（30～41）には、油煙の付着が少なく、全面に油煙が付着する一般的な灯明具とは様相が異なっており、祭祀的な一面がみられる。荻原三雄氏は、城を破却する破城と城を割る城割とは意味が異なることを指摘し、城割には前城主と城との関わりを断ち切るために、呪術や宗教的儀式が用いられたことを提言されている<sup>10)</sup>。「木原城縄張復元図」（第5図）や「天領検地絵図」（第6図）からは、内郭部の中心である本丸と外郭部の寺郭に所在する近藤氏の菩提寺である永厳寺とが、当城域の両端部に対面して位置しており、双方の空間を土塁や堀によって結びつけることで大規模な城郭を築き上げていることがわかる。この大空間には、番城衆の滞在や民衆の避難場所などに関わる小空間が多く存在していたと想定できるが、一方で、城主の政治や軍事、生活の空間と城主の精神面を支える空間の存在にも着目する必要がある。今回の調査区域で確認された土塁や堀の破却行為には、双方の空間を結びつけ、城域を一体化していた防御施設の象徴的部分を分断することによって、内郭部と永厳寺とを精神的に断ち切る城割の一面性も含まれているようにも思われる。

当城の廃絶は、出土遺物から16世紀末葉から17世紀前葉が考えられることから、佐竹氏の所領支配下で当城の破却がおこなわれたかは断定できない。土塁や堀の廃絶の様相から、少なくとも近藤氏と当城の関係を断ち切るための作法や慣習に基づいた破城がなされたものと考えられる。

#### 註

- 1) a 後藤和民ほか『木原城址Ⅰ－平成5年度 予備発掘調査概報－』木原城址調査団 1994年3月  
b 後藤和民ほか『木原城址Ⅱ－平成6年度 予備発掘調査概報－』木原城址調査団 1995年3月  
c 川村 勝『木原二本松遺跡・木原城址』茨城県稲敷郡美浦村教育委員会 2005年3月
- 2) 1) cに同じ
- 3) 1) cに同じ
- 4) 美浦村史編さん委員会編『美浦村誌』美浦村 1995年11月及び、永厳寺寺伝
- 5) 4)に同じ
- 6) 中山信名『新編常陸国誌』崙書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 7) 1) aに同じ
- 8) 伊藤正義「破城と破却の風景－越後国「郡絵図」と中世城郭」『城破りの考古学』吉川弘文館 2001年9月
- 9) 中井 均「今、破城を再検討する」『織豊城郭』第11号 織豊城郭研究会 2007年2月
- 10) 荻原三雄「中世城館における宗教的空間ともう一つの『城割』」『山梨考古学論集4－山梨県考古学協会20周年記念論文集－』山梨県考古学協会・山梨県考古学協会20周年記念論文集編集委員会 1999年5月



# 写 真 図 版



調査区遠景（北東上空から）

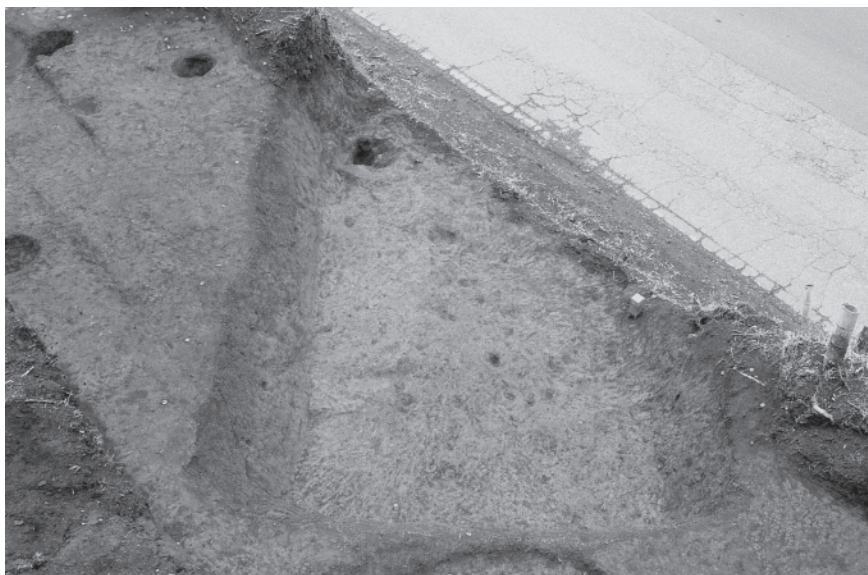
第1号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第1号竖穴遺構  
遺物出土状況



第2号竖穴遺構  
完掘状況





PL2



第 2 号土壘跡  
土層断面



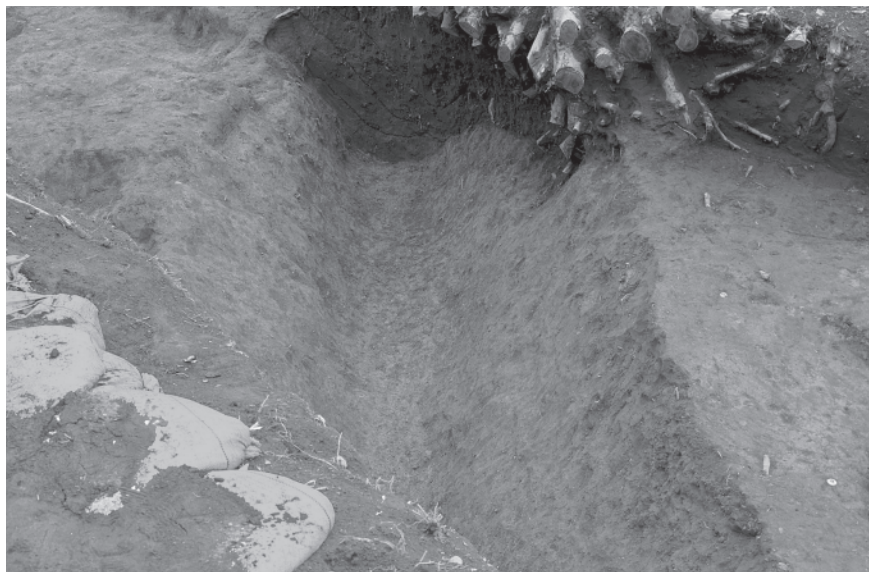
第 2 号土壘跡  
遺物出土狀況



第 2 号土壘跡  
完掘狀況



第 3 号 沟 迹  
完 掘 状 况



第 3 号 土 壘 迹  
土 層 断 面



第 4 号 堀 迹  
土 層 断 面

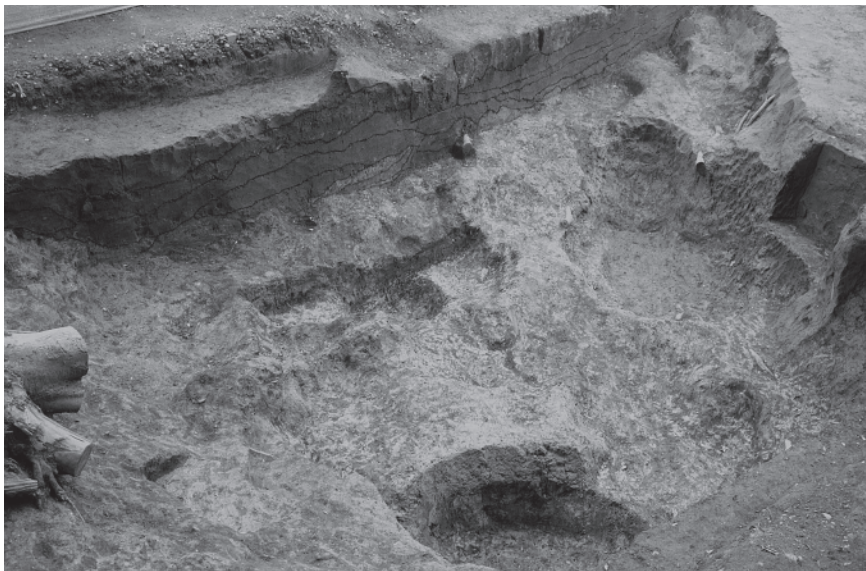




PL4



第 4 号 堀 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 4 号 堀 跡  
完 掘 状 況



第 4 号 切 岸 跡  
第 5 号 堀 跡  
完 掘 状 況





SD4-30



SD4-31



SD4-32



SD4-33



SD4-34



SD4-35



SD4-37



SD4-38



SD4-39



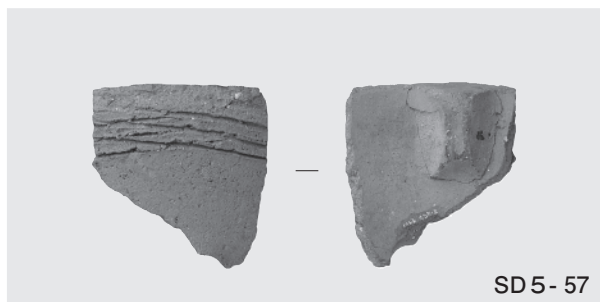
SA2-25



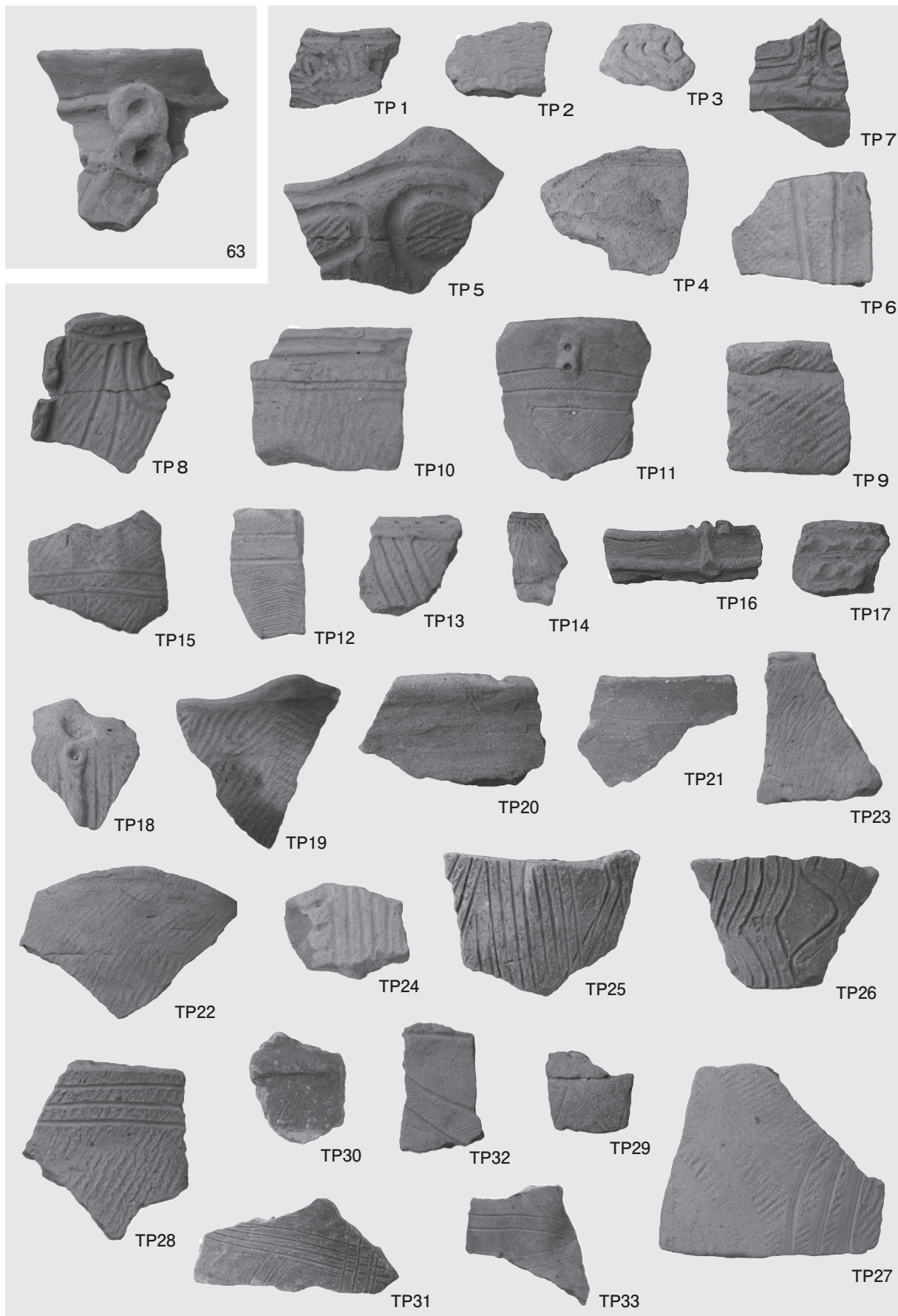
SD5-56

第2号土壘跡, 第4・5号堀跡出土土器

PL6

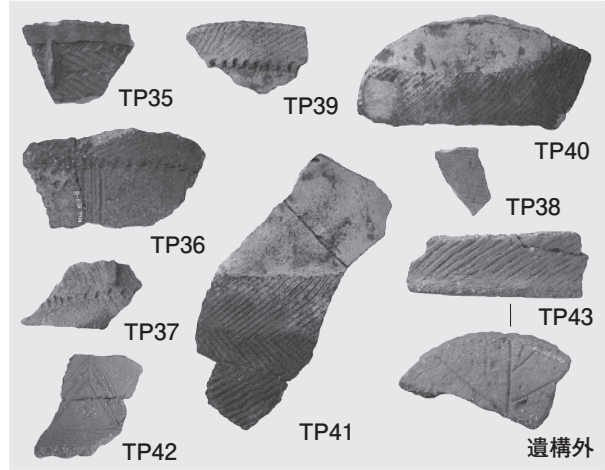


第2号土壘跡, 第4・5号堀跡, 遺構外出土土器

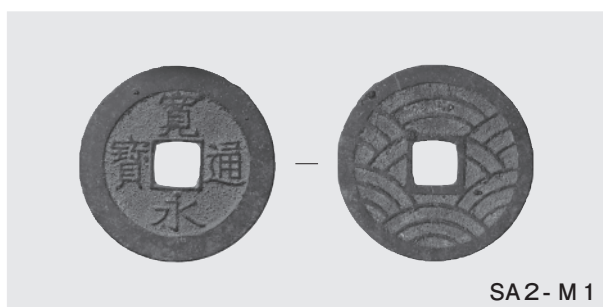


遺構外出土器



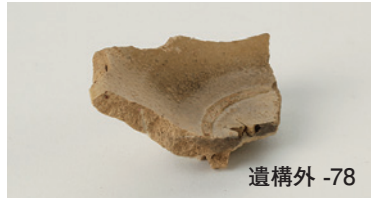
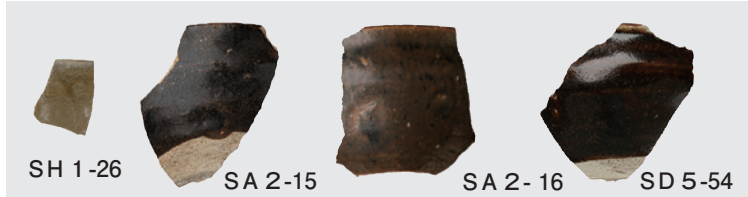


第1号竖穴建物跡，第2号竖穴遺構，第10号土坑，遺構外出土土器



出土土製品, 石器・石製品, 金属製品





第2号土壘跡, 第1号豎穴遺構, 第5号土坑, 第4・5号堀跡, 遺構外出土陶器・磁器

# 抄 録

ふりがな	きはらじょうし							
書名	木原城址							
副書名	主要地方道美浦栄線交差点改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第376集							
著者名	田村雅樹							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
木原城址	茨城県稲敷郡美浦村大字木原1568番地6ほか	08442 - 073	36度 02分 17秒	140度 29分 40秒	9 ~ 18m	20110601 ~ 20110831	580㎡	主要地方道美浦栄線交差点改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
木原城址	集落跡	縄文	土坑 1基		縄文土器			
		古墳	竪穴建物跡 1軒 竪穴遺構 1基		土師器・須恵器・土製品			
		城館跡	戦国	曲輪跡 3区画 土塁跡 3条 切岸跡 1条 堀跡 2条 竪穴遺構 1基 道路跡 1条 溝跡 5条 土坑 2基		土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・銭貨		
	交通施設	江戸	道路跡 2条		金属製品			
	その他	時期不明	竪穴建物跡 1軒 竪穴遺構 1基 土坑 7基 ピット 9か所		縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・石器・金属製品・銭貨			
要約	縄文時代は、遺構数が少ないながらも、後期前半の土器片が多く出土したことから、周辺に集落跡が推定できる。 古墳時代は台地の落ち際に、遺構が確認できたことから、集落の縁辺部と考えられる。 木原城における当該地は、三の丸と大手郭に挟まれた傾斜部である。築城に際しては、防御性の弱い傾斜部に土塁や堀を構築し、防御の強化がなされている。また、大規模と想定できる堀は、水路と結び付いた様子が古絵図に描かれており、水運との関わりが考えられる。							

## 仕 様

- 編 集 O S Microsoft Windows 7  
Home Premium Service Pack 1  
レイアウト Adobe InDesign CS5  
図版作成 Adobe Illustrator CS5  
写真調整 Adobe Photoshop CS5  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
- 組 版 OpenType13級リュウミンPro・L 基本  
Adobe InDesign CS5
- 印 刷 オフセット印刷
- 写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線 カラー210線
- ・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第376集

## 木 原 城 址

### 主要地方道美浦栄線交差点改良 事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

〒311-0114 那珂市東木倉280番地3

TEL 029-295-3331